始

特231
427

和服裁縫書

全

須磨裁縫學校

大阪帝國圖書館

メートル	鯨尺	メートル	鯨尺
2 mm	5厘	61 cm	1尺6寸
4 〃	1分	64 〃	1〃2〃
8 〃	2〃	68 〃	1〃8〃
1.2 cm	3〃	72 〃	1〃9〃
1.5 〃	4〃	76 〃	2 尺
2 〃	5〃	80 〃	2尺1寸
3.8 〃	1寸	83.5 〃	2〃2〃
7.6 〃	2〃	87 〃	2〃3〃
11.5 〃	3〃	91 〃	2〃4〃
15 〃	4〃	95 〃	2〃5〃
19 〃	5〃	98.5 〃	2〃6〃
23 〃	6〃	102 〃	2〃7〃
26.5 〃	7〃	106 〃	2〃8〃
30.3 〃	8〃	110 〃	2〃9〃
34 〃	9〃	114 〃	3 尺
38 〃	1尺	136.5 〃	3尺6寸
42 〃	1尺1寸	303 〃	8 尺
45.5 〃	1〃2〃	360 〃	9尺5寸
49.5 〃	1〃3〃	1061 〃	2丈8尺
53 〃	1〃4〃	1100 〃	2〃9〃
57 〃	1〃5〃	1137 〃	3 丈

はしがき

1. 本書は本校の裁縫科生徒用指導に充てむが爲に編纂したるものなり。
1. 本書は普通和服の裁ち方，積り方竝に一般の知識を傳へんが爲に主ことしてこれに要する圖を掲げその傍に積り方の算式を示し又普通の仕立上げ寸法其他特に注意すべき要項を附記せり。
1. 書中に記載したる寸法はメートル法を主ことしたれども從來の鯨尺寸法を全然廢しては如何ど思ふ節なきにしもあらねば兩樣を用ひて記載せり。
1. 卷頭に普通衣服の裁縫に用ゆる鯨尺寸法のメートル法換算表を附けおきたれど最初この表に依るともメートル法に馴れられんことを希望す。

昭和十一年四月

編　者　識

和服裁縫全書目次

第一章　裁縫をなすに注意すべき事項……1

第二章　絲留めの止方，結び方，縫ひ方の種類……3

第三章　襦　袢……10

　第一節　一ッ身襦袢……10

　第二節　中裁襦袢……13

　第三節　本裁襦袢……15

　第四節　同女物袷長襦袢……24

　第五節　同男物袷長襦袢……32

第四章　單　衣……36

　第一節　一ッ身單衣……36

　第二節　三ッ身單衣……51

　第三節　四ッ身單衣……52

　第四節　本裁單衣……57

第五章　帶……73

　第一節　各種帶仕立について鯨帶(一名腹合せ帶)……73

　第二節　名古屋帶……76

　第三節　丸　帶……78

　第四節　男　帶……79

第六章　袷……81

　第一節　小裁物及び中裁袷……81

　第二節　本裁袷……92

第七章　綿入……104

　第一節　小裁，中裁，本裁綿入……104

第八章　羽　織……109
第一節　小裁羽織，袖無，甚平……109
第二節　中裁羽織……120
第三節　本裁男羽織……125
第四節　女物袷羽織仕立方……140
第五節　本裁單羽織(男女……143
第九章　寢冷え知らず……149
第一節　二三歳及び三四歳單，袷……149
第十章　帽子類……152
第一節　嬰兒用帽子及び四五歳用，女學生用……152
第十一章　被　布……155
第一節　小裁，中裁，本裁被布……155
第十二章　女物コート……163
第一節　種　類……163
第二節　女物袷半コート……164
第三節　本裁女物單半コート……182
第十三章　女　袴……186
第一節　本裁女袴……186
第二節　小裁，中裁女袴……192
第十四章　男　袴……193
第一節　男袴の名稱及び本裁男袴……193
第二節　男小裁，中裁袴，襠なし袴……208
第三節　袷　袴……210
第十五章　小　袖……211
第一節　普通長着，二枚重ねの寸法下着の詰方，模樣合せ，模樣の種類……211
第十六章　裲　襠……217
第一節　裲襠の裁方仕立上げ寸法……217
第十七章　單衣本重ね……220
第一節　本裁單衣本重ね……220
第二節　本裁單衣半重ね……222
第十八章　本裁比翼……223
第一節　本裁女物袷比翼……223
第二節　本裁女物附比翼……229
第十九章　夜着，蒲團，蚊帳，ネンネコ，子守袢纏……232
第一節　小夜着，中夜着，大夜着及び袖なし夜着……232
第二節　ネンネコ……235
第三節　子守袢纏……238
第二十章　蒲　團……244
第一節　敷蒲團及び掛ふとん……244
第二節　附記——カバー夏蒲團……248
第二十一章　蚊　帳……250
第一節　蚊帳の積り方及び挽蚊帳……250
第二十二章　股　引……255
第一節　男物股引……255

和服裁縫全書

第一章　裁縫をなすに注意すべき事項

1. 地　直　し

先づ仕立てんとする帛布について耳の釣れたるもの耳のゆるみたるもの布目の歪みたるもの等すべて帛布の正しからざるものは最初に於て鏝，アイロン，霧吹を用ひ或は小さく切込みを入れる等種々地質に應じて工夫を凝らして地直しすること肝要なり。

2. 裁　　斷

織傷，染斑の有無を檢し模樣，縞柄，大柄なるは特に注意して寸法を誤らざる樣考慮して折，積り再び尺をあてて愈間違なきを確めて後裁切るをよしとす一度裁誤るときは其の衣服は生涯傷物となる。

3. 標　　附

用具は燒篦と角篦とあり何れにてもよろし其使用法に注意し寸法を間違へぬ樣其標は小さくかつ正しくなすべし標大きくして仕立上げて尙出るが如きは體裁極めて惡し地質の薄きものに强く標入れして破ることなき樣最も注意すべしチョークを用ひて標を付ける事あり寸法に不正確を來す恐れあり故にチョークを用ゆる時は薄く削りて細く付けざるべからず又布に篦の不明なる時には縫標を附ける事

あり時間を多く要すれども正確を保つ故場合によりては必要なり。

4. 縫絲及縫方，キセ等の注意事項

布の地質に相應したる質の絲にて布地薄き時は稍細目の絲を用ふ色は白赤黑の如き物は言を俟たざれども中間の色は布の色よりも稍濃目の色絲をよしとす。

縫方は直線斜線ともに針目大小なき樣よく揃へ眞直に縫ふべし針目の大きさは地質により一樣ならず大なるは4mm位より小なるは1mm位とす。

絲こきは充分になさざれば仕立見苦し絹布上等物などは地質を損せぬ樣特に注意を要す。

キセは仕立上げをきれひにするものなり正しく掛けざるべからず深さは場合により一定せず普通は 2mm なれどキセのよく保ちゑざる所例へば袖付，腰揚，胴接ぎの如き 1mm となすべく又裾の縫合せ，八ツ口，袖下の如きは3mmとす。

5. 鏝，アイロン，火熨斗

上級に進むにつれて自然絹布毛布類の取扱ひ多し從つて鏝類を使用せざるべからずまづ鏝は燒加減を知ることが最も大切なり布の焦げざる程度内に於てよく熱せられたるをよしとす鏝を己が頰の近くに持ち來りてその感ずる温かみにて燒け加減を知り又鏝の上に水滴を飛ばしその音によりて聞きわけ或は靜に紙に置きて試し知る等普通に行ふ不注意して燒き過ぎたる鏝にて布を焦す如きは其の難裁損じに同じよくよく注意して誤りなき樣せざるべからず縫目にはまづ平鏝を必要とす折鏝は箇所によりて避くる所あり指と爪とにてまづ

折りを付け一方を開き鏝をかくる時は一方の凹みを作らずして都合よろしモス，縮緬の如き指先にて折の附がたきものはまづ表を躾して後鏝をかけるべし。

アイロンは主に地質を整へる際又仕立上げのお仕上げに使用すその熱と壓への兩樣を必要とする事多く餘りに熱し過ぎて間に不調法なき樣之も充分注意して使用せざるべからず。

第二章　絲の結び方，留方，縫方の種類

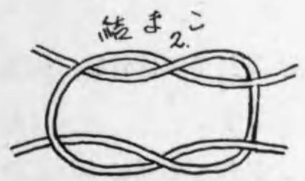
絲の結び方

1. 留結び

（用途）縫始の絲留に用ふ。

（方法）第1圖の如く絲の端を食指の指頭に捲き拇指の腹にて挾み拇指を向ふに押して食指を手前に引き絲の一端を食指の指頭にからげたる輪の中に燃りからげて結び玉を造る仕方なり。

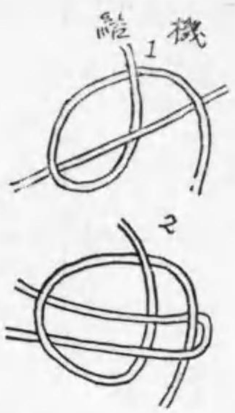
2. こま結び



（用途）この結び方は主として袖口，袖付其他の留をなすに用ふ。

（方法）第2圖に示したる如く糸の兩端を抱き合せて結ぶ仕方なり。

3. 機結び

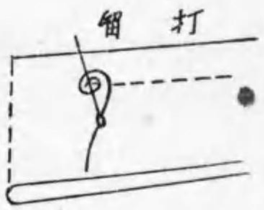


（用途） 縫絲及び躾絲綴絲，等不足の時繼ぎ等に用ふ。

（方法） 双方の絲端左手食指の指頭の上にて右を下に左を上に重ね右手の絲を左の拇指と食指の間に輪を造り交叉せられたる絲の左端の下を潜らし右に向へる絲端の上に出し右の絲端を右手の拇指にて左食指の指頭の上に輪をなせるその中に押し入れて輪を潜らせ左拇指の先きにて押へ右手の絲を右手の食指と中指とにて引き第2圖の如くになす。

絲 の 留 方

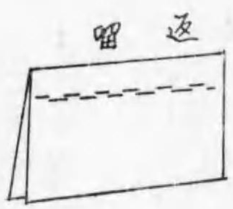
4. 打　　留



（用途） 最も簡單なる留方にして着物羽織の胴接ぎ等に用ふ。

（方法） 縫終りの所に針をあてそれに縫かけの絲を二回程卷いてその絲の上を左手の拇指にて押へ絲の弛まぬやう針を抜き上ぐ。

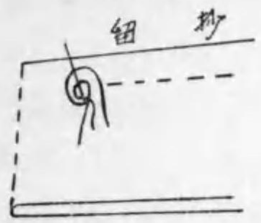
5. かへし留



（用途） 着物の縫目裏表共裾口は脊縫，脇縫衽縫とも此の留方をなす。

（方法） 縫終りを前の針目と交互に4cmばかり後へ縫戻して打留をする。

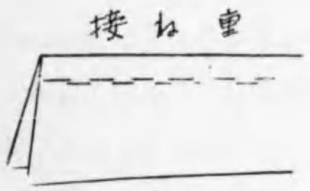
6. 抄　　留



（用途） 返しとめより尙一層丈夫になす必要ある部分卽ち單衣の袖口，袖付，衿先き等に用ふ。

（方法） 縫終りにて針を上げ縫終りの所を出し斜に布も今縫つた絲も共に抄ひ上げ其の針に絲を二回からげ左手の拇指にて押へ其の針を拔き上げ返し留同樣に4cm縫戻して打留をなす。

絲 の 繼 ぎ 方

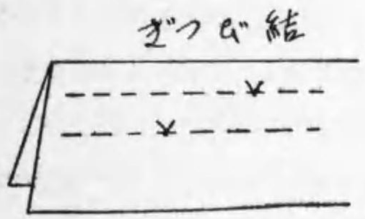


7. 重ね繼ぎ

（用途） すべて運針の途中絲の切れたる場合又は不足の生ぜし時の此方法による事多し。

（方法） 絲の終りを縫放しになしおき更に別絲に留結びをなして先きの縫終りより4cm程手前より前の針目と交互に針目を拾ひ同じ縫道を重ねて縫ふ。

8. 結び繼ぎ

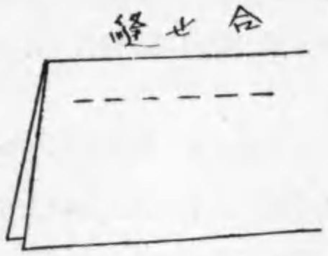


（用途） 普通運針，躾掛又は耳絎等の場合途中にて絲の不足したる時に用ふ。

（方法） 此のつぎ方は普通機結びを用ふ。

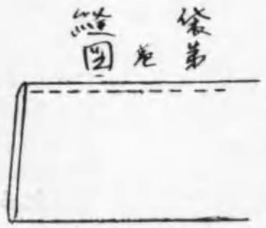
各 種 縫 方

1. 合 せ 縫



（用途） 背縫，脇縫，衽附等皆この縫方にして針目の大小又は縫代の深淺等は其の部分によりて各異なれども用途廣く用ひらる。

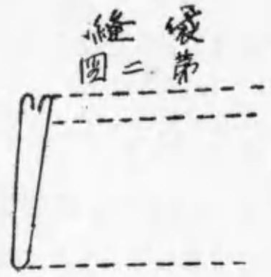
（方法） 2枚の布を表裏とも同じ針目にて縫合す。



2. 袋　縫

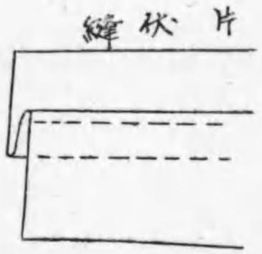
（用途） 單衣その袖下中裁物の背縫等に用ふ。

（方法） 2枚の布を表を外に裏を内にして約4mm(1分)の縫代になして少し針目大きく縫ふ一方に折りして布を裏返して先きの縫代を中に袋狀になして縫ふ。

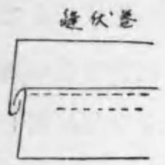


3. 伏せ縫

（用途） 單衣風呂敷の如きものの端縫に用ふ。

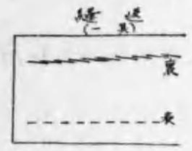


（方法） 單衣ものにて縫代を體裁よくかつ縫目の開かざる樣にする方法にして片伏縫卷付縫等の別あり片伏縫は縫ひ合はさんとする2枚の布の一方の布を1分3mm控へて縫ひ次に布をひろげて針目細かく表にさし合縫卷伏縫ひは片伏縫と同じなれど2枚の布の一方を6mm(2分)控へて縫ひ合はせ縫代の多き方を出す樣に折を

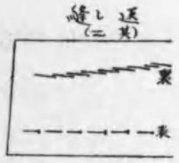


返し其の縫代の多き分にて一方の縫代を卷き包み前の如く表に小さき針目を出して縫ふ。

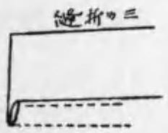
4. 返し縫



（用途） 丈夫なのを主とする場合又は厚地の布にて普通運針の行ひ難き場合に多く用ひる縫方にして普通返し縫と半返し縫ひの別あり。



（方法） 1針に進んで其の針の2分ノ1の所迄後へ戻して次には1針半進みこれを反復するを半返し縫ひと云ふ。返し縫と云ふは1針進みては針を抜き上げ其の針を1針戻して2針進み又1針戻して先きの針目の所へ針を入れては2針進む縫方にして丁度表の體裁は機械ミシンを使用したる表面と同じになる縫方なり。

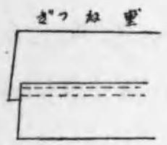


5. 三ツ折縫

（用途） は簡單な單衣肩當の端縫又は單衣半襦袢の裾等を縫ふ。

（方法） 布の端を裏に向け三ツ折となしその折目の端を裏表ともに細かく針目を出して縫ふ。

6. 重ね縫

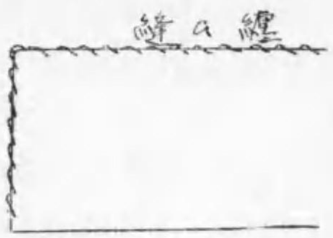


（用途） 羽織の心又は衣服三ツ衿の心等に用ふ。

（方法） 2枚の布端を1.2cm(3分)重ね合せ圖の如く縫代の兩端を縫ふ。

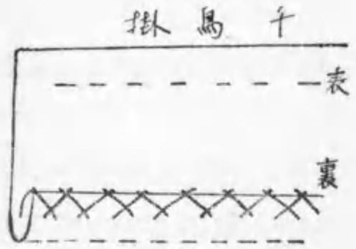
7. 纏ひ縫

（用途） 裁目のほつれを防ぐ爲になす縫方にして着物の衿，肩明き其他裁目を纏ふに用ふ。



（方法） 約3mm(1分)の縫代にして裏より表に針を出し裁目を裏に卷くが如くなして針先きを裏に出して表に出しこれを針の長さ一ぱい繰り返して針を拔き上げ又次に進む仕方なり。

8. 千 鳥 掛

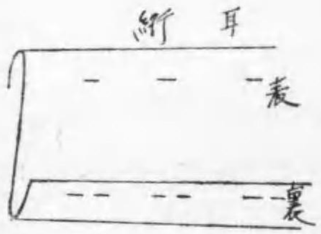


（用途） 主としてセル其他地厚なる毛織物等の單衣の袖口，褄下裾廻しなどに用ゆ。

（方法） 普通縫方，紩方とも右より左に進むなれど千鳥掛は其の反對に右にかけ針をかけ左より右に圖の如く布を三ッ折になして其の上は針目を表に出さずして內側の三ッ折りのきわ丈表に細かく針目を出して縫ふ仕方なり。

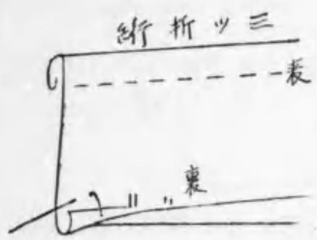
紩　　方

1. 耳　　紩



（用途） 簡單なる單衣の脇縫，衽縫込みの始末袖振八ッ口等の縫込みを始末する紩方なり主として其の縫込み耳の時のみ。

（方法） 布の紩代を折りその耳の端より3mm(1分)內に入りたる所圖の如く表に1針裏に2針目を出して2cm又は3cm位の針目に布と布との間に紩絲を忍ばせて紩け付ける。

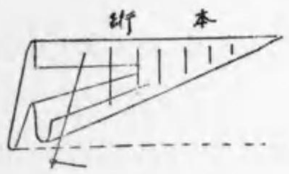


2. 三ッ折紩

（用途） 單衣の袖口，褄下裾紩等に用ふ。

（方法） 布の端を三ッ折となし紩代の折山より約1mm內側に針を通し1cm位の針目にて表に小さく針を出して紩け付ける。

3. 本　　紩

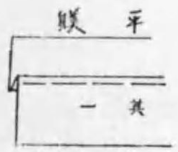


（用途） 紐類袴の紐衿裏の紩方綿入衣の褄下等に用ふ。

（方法） 紩代の折山より1mm內側に針を出し手前を1cm向ふの布も1cm双方とも同じ針目にて紩け付る。

躾の各種類

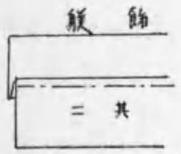
1. 平　　躾



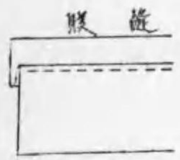
（用途） 各要所の折被せを整へ縫込みを押へるに用ふ。

（方法） 長針一ぱいに布を2cm位抄ひては又これを反復する仕方なり。

躾掛針目の大小はその地質及び場所に依りて一樣ならず。



2. 縫　　躾（名飾躾）

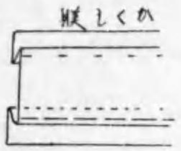


（用途） 縮緬，錦紗の類の如き布のやわらかきものの袖口，裾廻り衿等に裝飾をかね縫目を正しく整へる爲になすものにして着用してもこれを

取り除くことなく保存しおくものなり。

(方法) 折り山より約5mmの所内側を表2mm裏4mmの針目に絹絲絲を以て縫ふものなり。

3. 隱　　絲



(用途) 男女とも腰身揚の如く縫目の崩れ易き所又は衣服袷の裾，衽幅の如き地質と共色の絲を以て應用す。

(方法) 2cmの針目にて表に小さく針目を出し着用の際も取り除かずそのままになし置くなり。

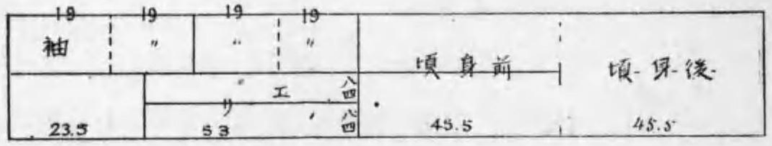
すべて絲絲は引きしめざる樣稍ゆるめに感せらるる程度になし置くをよしとす。

第三章　襦　　袢

第一節　一ツ身襦袢

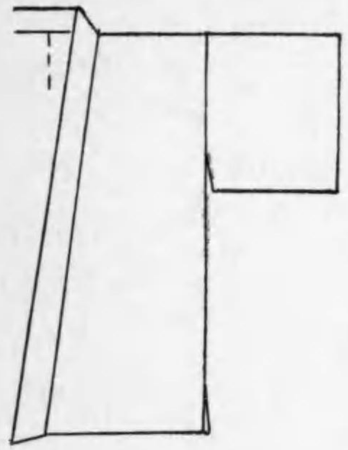
1. 一ツ身襦袢は初歩兒より五六歳まで用ひすべて半襦袢は小裁，中裁，本裁にかゝはらず肌着の外は別袖を付ける場合多し。

1. 幅36cm (9寸5分) 長さ1.47cm (4尺4寸) の布を以て一ツ身襦袢の裁方



裁切寸法　寸法中括孤内は鯨尺なり

1. 袖　丈　19cm (5寸)　　積　方



1. 袖　巾　18cm　(4寸7分5厘)

1. 身　丈　45.5cm　(1尺2寸)

用布 (147−45.5cm×2) ÷4

＝19cm袖丈

1. 衿肩明　4cm　(1寸)

(用布−袖丈×4)÷2＝身丈

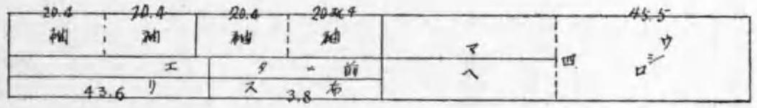
1. 衿　幅　8.4mm (2寸3分5厘)

(身丈＋7.5cm)×2＝衿丈

1. 衿　丈　53cm　(1尺4寸)

並幅　232cmを以て一身襦袢の裁方　乙
(46寸)

用布の都合にて少し大ふりの襦袢を裁たんとする時は衽の布を入れることあり。



積　方

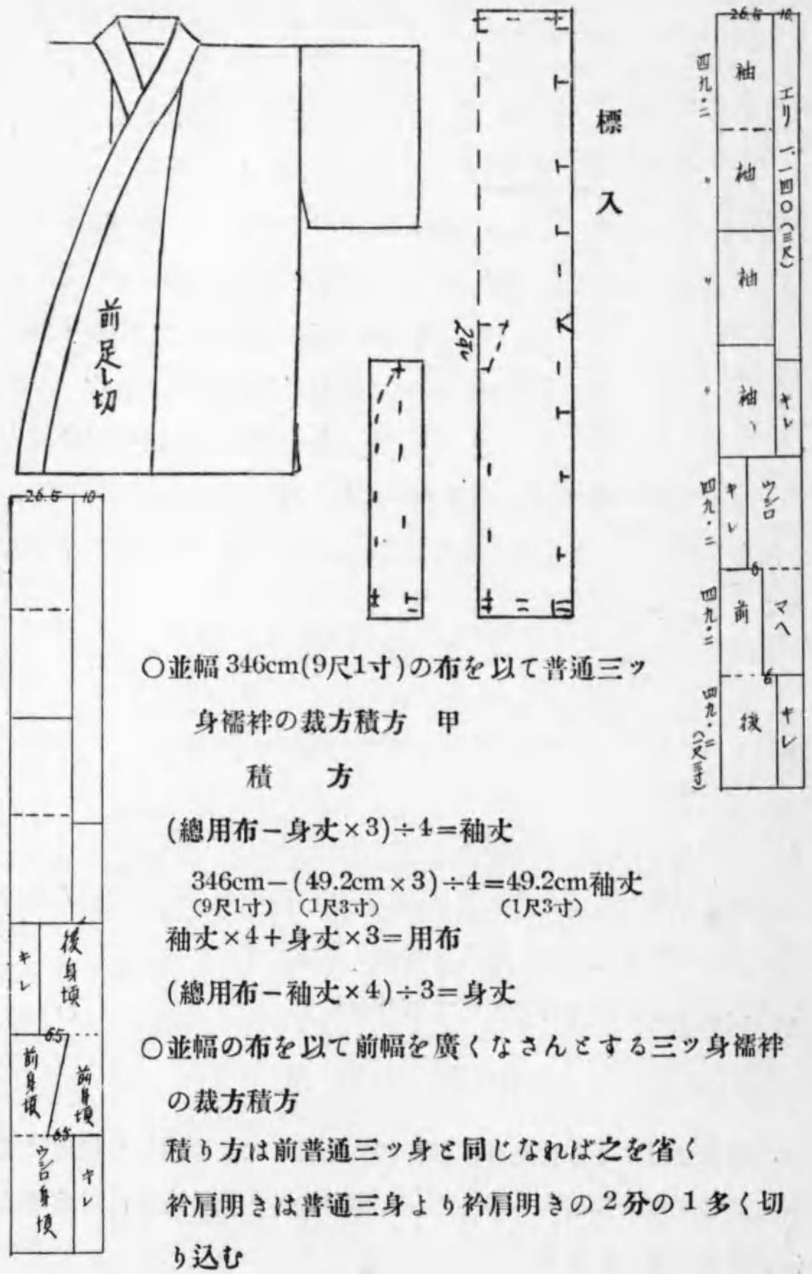
袖丈×4＋身丈×2＝用布　204×4＋45.5cm×2＝232cm
(5寸5分)　(1尺2寸)　(4尺6寸)

前身頃に足し切は身丈より10cm短かく圖の如く斜に標を入れ衿附の方は出來る丈け廣く張らせ適當な形になす。

衿の不足分は三ッ衿の所にて別切をはぐ。

仕立方注意

1. 肩當は附ける方丈夫なれども初生兒などには必要なし縫方は簡單なれども度々洗濯するものなれば針目細かく袖は八ッ口馬乘等の留は確實になすを要す。



○並幅 346cm(9尺1寸)の布を以て普通三ッ身襦袢の裁方積方　甲

積　方

(總用布－身丈×3)÷4＝袖丈

346cm－(49.2cm×3)÷4＝49.2cm袖丈
(9尺1寸)　(1尺3寸)　(1尺3寸)

袖丈×4＋身丈×3＝用布

(總用布－袖丈×4)÷3＝身丈

○並幅の布を以て前幅を廣くなさんとする三ッ身襦袢の裁方積方

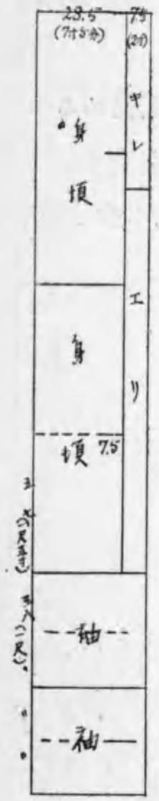
積り方は前普通三ッ身と同じなれば之を省く

衿肩明きは普通三身より衿肩明きの2分の1多く切り込む

第二節　中　裁　襦　袢

○中裁襦袢の裁方　7, 8歳より12, 3歳兒まで用ふ。

仕立上標準寸法



袖　丈　一定せず形も種々あれども袂袖の長きものは別とす。

23cm(6　寸)乃至 34cm(9　寸)

袖　附　15cm(4　寸)乃至 19cm(5　寸)

袖　幅　26.5cm(7　寸)乃至 32cm(8寸5分)

身　丈　49.5cm(1尺3寸)乃至 57cm(1尺5寸)

衿肩明　5.5cm(1寸5分)乃至6.5cm(1寸7分)

身八ッ口　10cm(2寸5分)

後　幅　一パイ25.cm(6寸5分)

前　幅　25cm(6寸2分)

馬　乗　10cm(2寸5分)

衿　幅　4cm乃至4.5cm(1寸2分)

○並幅の布を以て四身襦袢の裁方積方

(袖丈＋身丈)×4＝用布　　衿肩明(2寸)

{用布(袖丈×4)}÷4＝身丈　(38cm＋57)×4＝380cm

標附縫方は省く　　(1尺)＋(1尺5寸)×4＝1丈

○本　裁　襦　袢

近來肌着を除くの外大抵別切を用ふること多し卽ち夏季用にはレース袖を用ひ冬季用には袖のみ別布を以て袷仕立になし筒袖又は毛絲にて編みたるを附けることあり長袖には身頃に本綿ネル等を

用ひ袖にはモス其他を用ふること多し。

第三節　本裁襦袢

○普通女物仕立上寸法

袖　丈　一定せず着物の袖よりも1cm(2分5厘)詰める

袖　附　着物の袖附よりも5mm(1分强)詰める

袖　幅　着物の袖幅よりも3mm(1分弱)廣く

但し筒袖の時着物の幅より廣きは見苦し少し狹くするものとす。

身　丈　68cm(1尺8寸)內外

衿肩明　着物より3mm(8厘)詰める

身八ツ口　着物より1cm(2分5厘)多く

馬　乘　10cm(2寸5分)

後　幅　28.5cm(7寸5分)

前　幅　27cm(7寸1分)

衿　幅　三ツ衿(衿肩廻)の所普通5.5cm(1寸5分弱)肩より23cm下りたる所にて6.4cm(1寸7分)下にて7.5cm(2寸)漸次廣くなしたるものバチ衿を云ふ此の仕立は着て形よし然し年若く或は學生にして襦袢の衿を出すこと好まぬ者は三ツ衿の通り5.5mm眞直になすべし。

○並幅の布を以て女物本裁襦袢の裁方積方

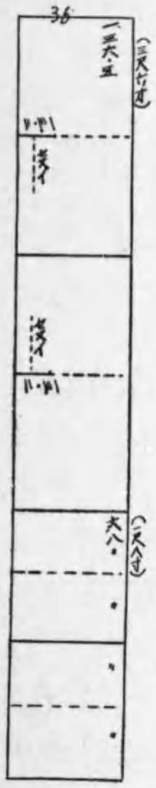
積　方

身丈×5+15cm+袖丈×4=用布

68cm×5=340cm
340cm+1.5=355cm
└(衿先き衿肩廻りの縫代)
45.5cm×4=182cm

(總丈−袖丈×4−15cm)÷5=身丈　355cm+182cm=537cm用布
└(衿肩廻衿先縫代衿天接縫代等)

○男物襦袢仕立上寸法



袖　丈　着物袖丈より8mm(2分)短かく

但し袖附より下は着物の如く縫ひ人形にすることあり

袖　附　着物より8mm(2分)少なく

袖　幅　着物と同寸

身　丈　76cm(2尺)內外

衿肩明　着物より3mm詰める

馬　乘　15cm(4寸)乃至19cm(5寸)

後　幅　30cm(8寸)

前　幅　28.5cm(7寸5分)

衿　幅　5.5cm(1寸5分弱)

裁方積方は女物と同樣につき省く。

○本裁女物單衣長襦袢

女長襦袢は衿の樣式種々ありて寸法も一樣に云ひ難けれども袖，衿肩明，身八ツ口，肩幅，衿幅等は半襦袢と同じ。

○後幅は普通30cm(8寸)とすれど痩せた人太りたる人に依りて一樣ならず衣服の後幅と同寸にすればよろし。

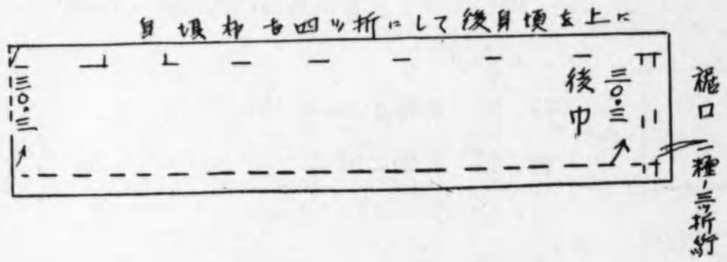
○前幅は別衿仕立摘み衿等に依つて相違あれど大抵26.5cm(7寸)を普通とす之より廣くするも亦狹ばむるも身體に合せて適當なるを良とす。

○女物本裁摘み衿長襦袢の裁方，積方(並幅物)

積　方　136.5cm＋68cm＝204.5cm　204.5cm×4＝858.0cm用布

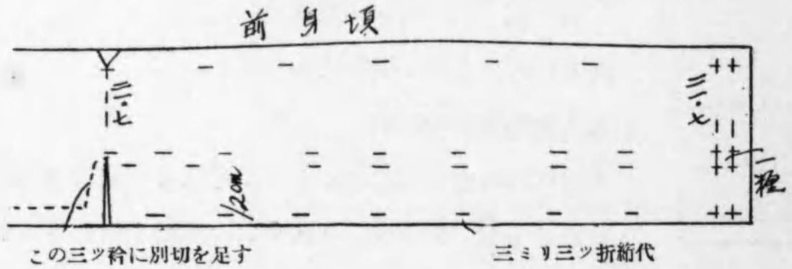
（身丈＋袖丈）×2＝用布　36寸＋18寸＝54寸　54寸×4＝216寸

○摘み衿女長襦袢仕立方，標附方



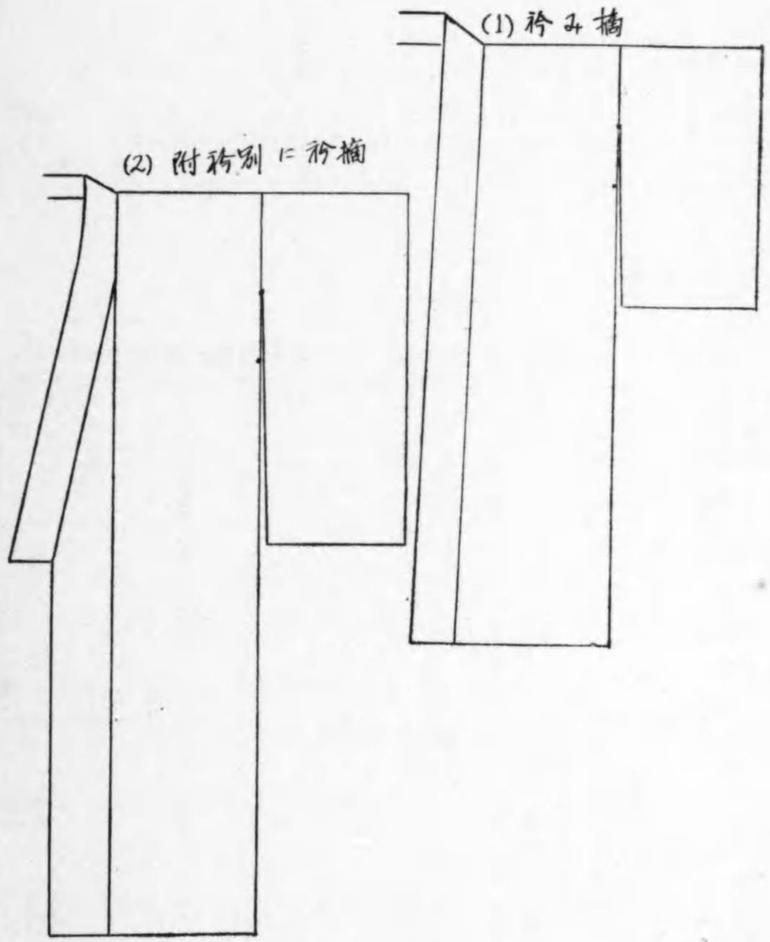
○摘み衿の時は衿肩明きの衿附の所より裾口まで眞直ぐになる。

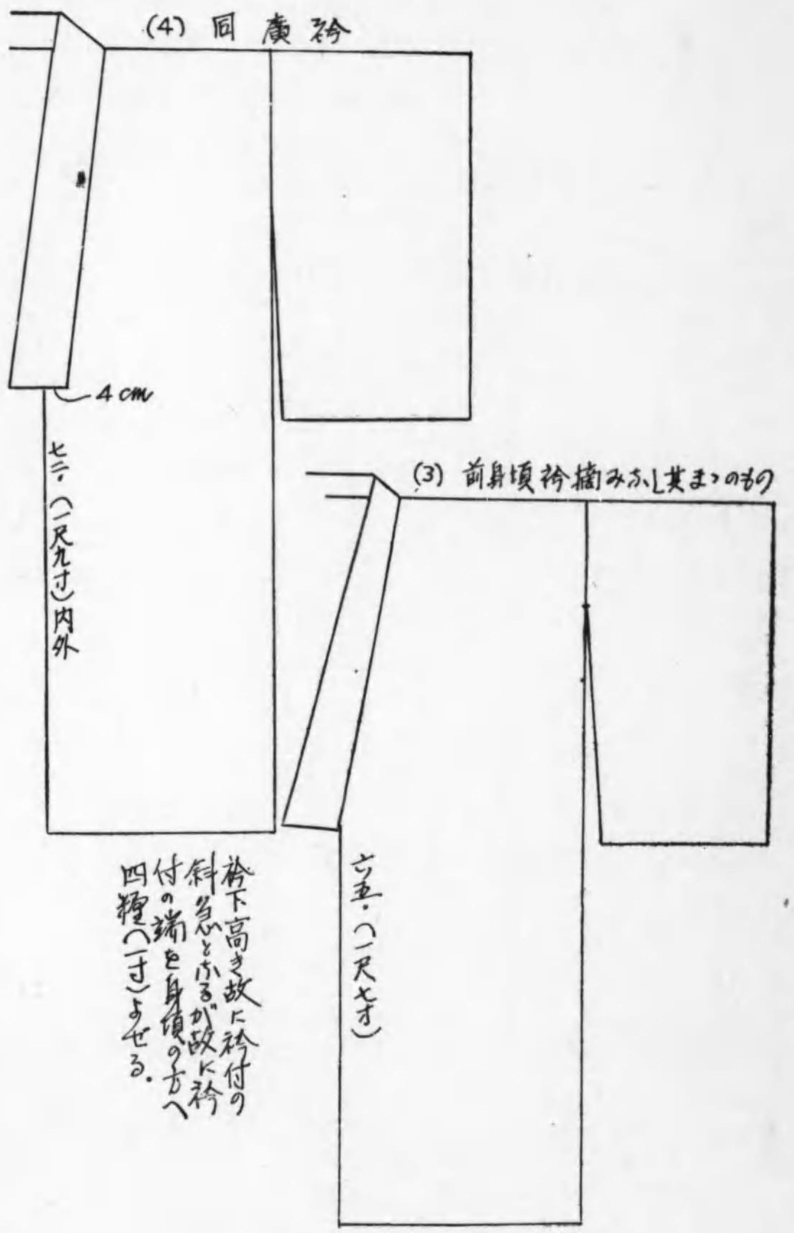
○大抵衿幅は12cmを（3寸）普通とすれど布幅によりて廣くも又狹くもなることあり。

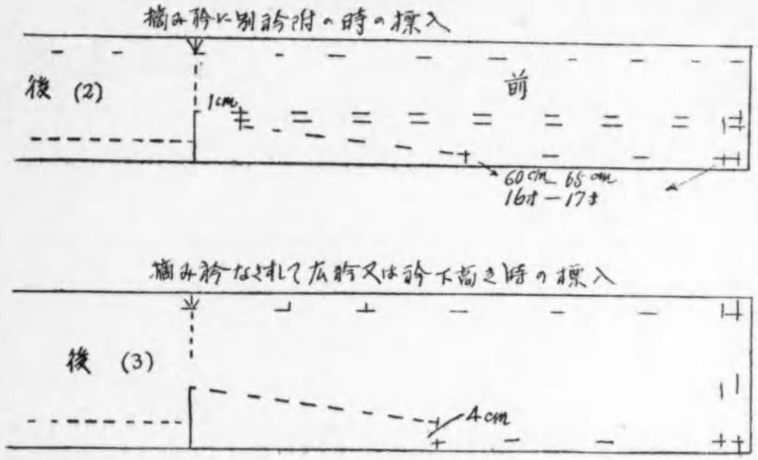


○身丈　着丈を普通とすれど好みにより着丈より長くすることもあり。

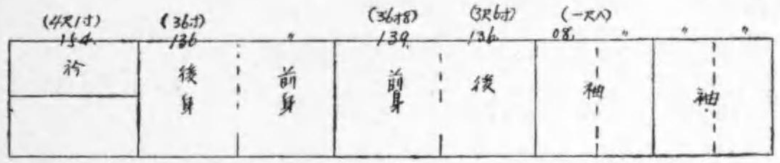
○前後の差は肩にて繰越しになすも身八ツ口下2cm（5分）の所にて前布の長き部分を摘み置くもよろし後へくり越しを付けた時は後身八ツ口4cm下りたる所にて長き部分のみ揚げをなす。







○並幅を以て女物本裁別衿長襦袢の裁方，積方



積　方

袖丈×4＋後身丈×5＋前後の差×3＋15cm＝總丈

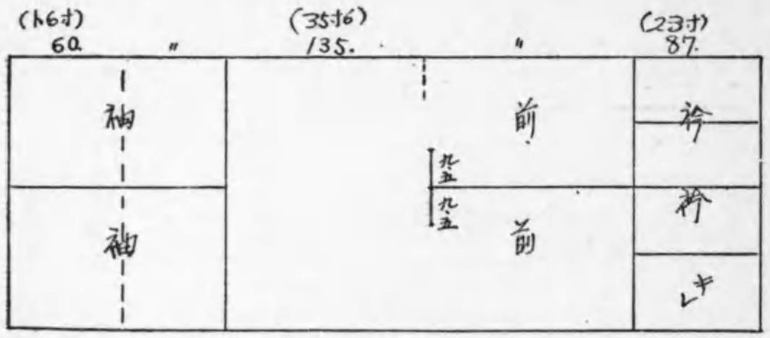
68cm×4＋135cm×5＋4cm×3＋15cm＝974cm

{總丈－(袖丈×4＋前後の差×3＋15cm)}÷5＝後身丈

{974cm－(68cm×4＋4cm×3＋15cm)}÷5＝135cm後身丈

○身丈に前後の差を附くる時は縫ひ變へる場合に身頃を前後變へること難きを以つて初め裁つ時に長き方の前身頃に揃へおき後身頃には縫揚をなして仕立つる方よろし又布の總丈短かき時は衿丈を40cm(約1尺5分)ばかり短かく裁ち掛衿をかくる故其の下になる所に別切を入れるもよし。

○二幅物を以て別衿女物本裁長襦袢の裁方，積方



衿布は三切接ぎ其の接目は両方とも掛衿の下になる。

積　方

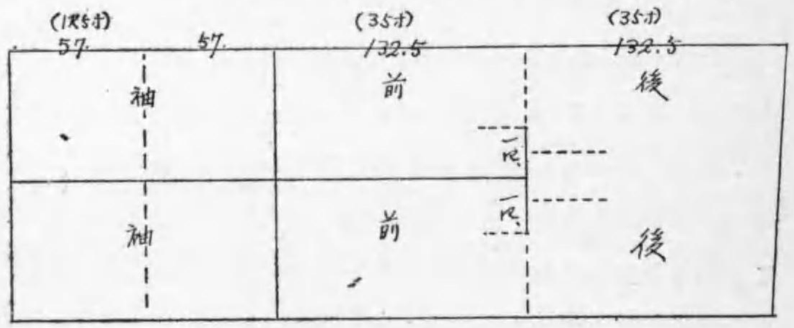
袖丈×2＋身丈×2＋衿丈＝總用布

60cm×2＋135×2＋87cm＝477cm總用布

{總丈－(袖丈×2＋衿丈)}÷2＝後身丈

{282cm－(60cm×2＋87cm)}÷2＝135cm後身丈

○二幅物を以て女物本裁摘み衿の裁方，積方

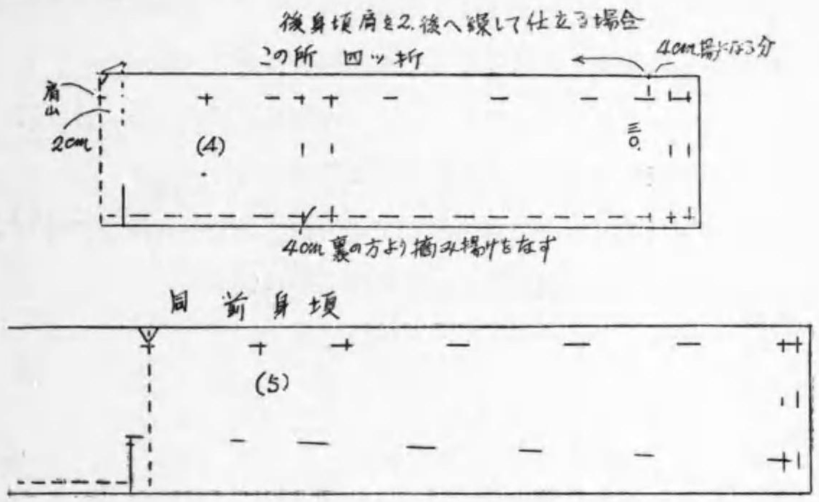


積　方

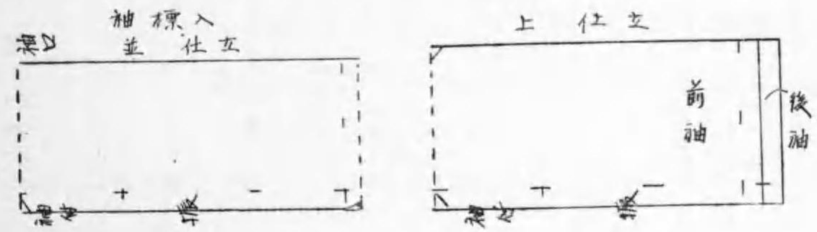
(袖丈＋身丈)×2＝總布

(57cm＋132.5cm)×379cm＝總用布

○女物別衿，標入方



身頃に繰り越しを付けることは抜衣紋を着安く着心地よし。



○本裁女物長襦袢仕立方

○仕立には並仕立と上仕立とあり先づ布の地質粗末にて常用する度に仕立變へを要するものは並仕立の方宜敷地質上等にて晴着用の時はなるべく丁寧に上仕立となすべし。

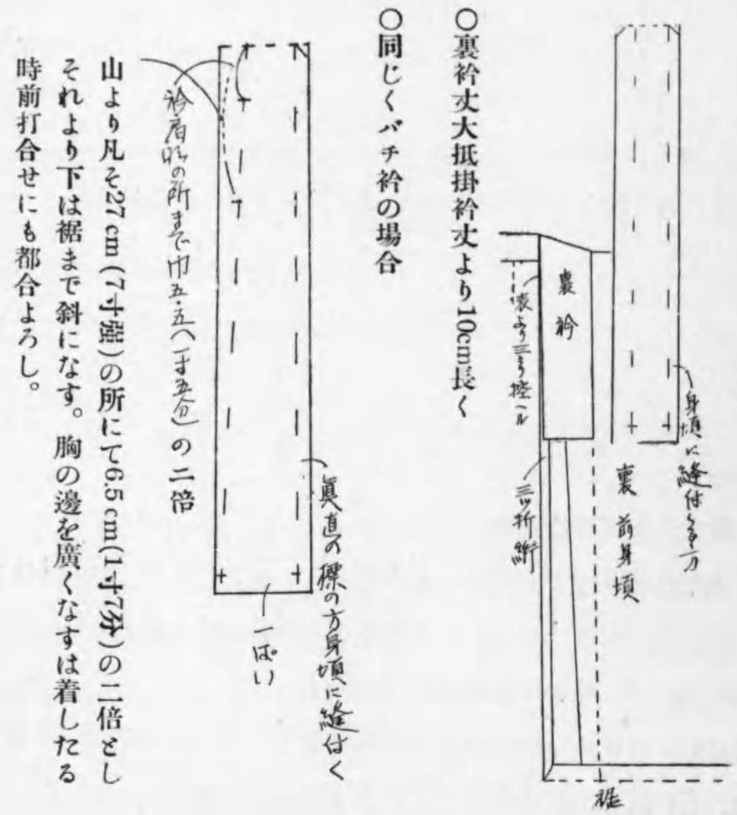
○圖の如く並仕立の時は両袖共袖の端を表より3mmの縫代にて縫ふ次に裏に返して両方共正しく置き寸法の通り標入をなす。

○上仕立の時は先づ兩方の袖布の表を合せて圖の如く前袖と後袖との差を附けて正しく置きそれより寸法の通り標入れをなす。

○並幅の時は袖を耳のままになすも亦3cmの三ッ折紬になすも何れにてもよろし幅の縫込みあらば袖附の方へ廻すべし。

○上仕立の袖下は後袖の長くしてある分を袖下縫目の上に折り三ッ折にして表には極小さき針目を出して紬け附くるなり。

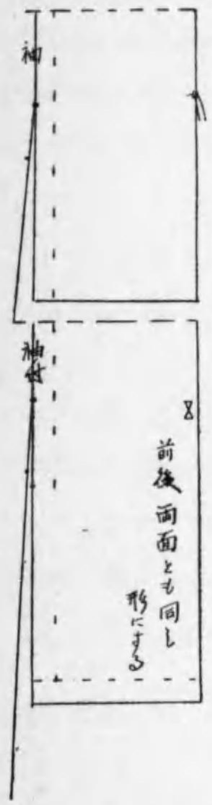
○袖口の留は着易き故に着物の袖口の寸法に合せて普通23cm(6寸)の所絲を以て結び留をなすか又は⋈形に留める。



○裏衿丈大抵掛衿丈より10cm長く

○同じくバチ衿の場合

山より凡そ27cm(7寸強)の所にて6.5cm(1寸7分)の二倍としそれより下は裾まで斜になす。胸の邊を廣くなすは着したる時前打合せにも都合よろし。



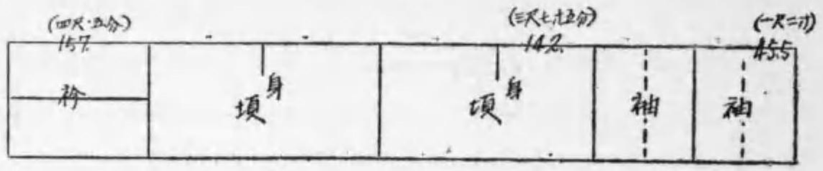
○身頃はまづ脊縫を針目細かく丁寧になす前後の差を操り越しになす時は裏より見て身の八ッ口下に4cm(1寸)の縫揚をなす此の折りは裾の方へ返す，次に身八ッ口の標を前後合せて脇縫をなす。

○摘み衿の時は裾より60cm(1尺6寸)乃至65cm(1尺7寸)上まで單衣にして上は衿裏を附くるべければ摘み縫ふ時に裏の方に衿裏切を置きて三ッ衿の所も表裏とも足し切を正しく待針し裏衿の兩端は1cm折りかへしかくし躾を掛け置き三ッ縫ひとなす次に衿下を裏衿のある所まで三ッ折紬になし表衿幅よりも2mm狹く整へて紬ける次に裾口は1cm(2分5厘)の三ッ折紬けになす，次に袖附をなし袖附の縫代及び袖振脇縫の縫代等折戻しの始末をして脊縫脇縫，縫込み多き所は皆耳紬けをして終る。

○此の仕立幅 注意すべきことは袖附，身八ッ口等何れも4cm(1寸)返縫ひをなししつかりとすくひとめの針留をなす。

○上仕立も縫方順序は並仕立に變ることなし只縫目を一層丁寧に袖附，脇縫等縫代の多き所は初めの縫目より3mmの所を稍初めより大きな針目にて縫ひそれより兩方に開きて其の端は耳をかくして表に紬け附ける尙裾の褄先きは額縁になすことあり(額縁の仕方は單衣上仕立の所に記載あり)

○本裁男物單衣長襦袢裁方，積方



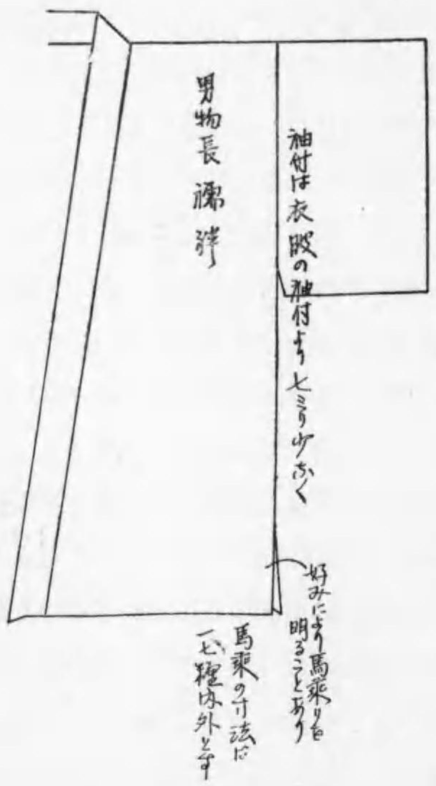
積　方

袖丈×4＋身丈×5＋15cm＝用布

45.5cm×4＋142cm×5＋15cm＝907cm用布
└(衿先縫代衿肩廻り，衿の天接代)

{總用布－(袖代×4＋15cm)}÷5＝身丈

{(907cm－45.5cm×4＋15cm)}÷5＝142cm身丈



袖の振を人形になさずして女物と同じにすることあり仕立方順序は女物と變りなき故之を省く。

第四節　本裁女物袷長襦袢

○本裁女物袷長襦袢

仕立上寸法は單衣襦袢と大差なし。

○袖の縫方種類

1. 表裏同じ布にて引き返しになすことあり。
2. 表を並幅一布を用ひ仕立上り寸法より多き丈を裏

袖に廻す仕方。(大名袖と云ふ)

3. 袖口部分表布裏返り多ければ爲め惡しとて表裏とも並幅を用ひ袖口の方に1mm半の枇を出す仕方。

○身頃の種類　單長襦袢に同じ。

○裾の種類

1. 表用布長き時表身丈を長く裁ち身丈の寸法より多きだけ裏に引き返す仕方。
2. 前と同じく表身丈を長く裁ち裾にて摘み縫裾合枇を出し多き分を裏に返す。
3. 裾に枇なしの突き合になすことあり。
4. 裾に3mm乃至4mmの枇を出す，餘り枇の多きは見苦し。

○裾布(シヅ)の種類

1. 表布と同じ共切を用ふることあり。
2. 別布にて後前身頃とも普通縦布にして丈30cm(8寸)位附ることあり衿の裏は高さ76cm位(2尺)まで附けることあり。
3. 半幅の横切を用ふることあり。
4. 並幅の$\frac{1}{3}$位の横切を用ゆ常着には之にて事足る。

○裁方及び積方

表は單長襦袢と同じにつき省く(但し袖布表裏同布にてなさんとする時は袖丈の8倍を要す。)

○裾布(シヅ)を引き返し又は摘み縫ひ裾合せなさんとする時は表身丈は裾布分を長く裁たざるべからず。

○裏　裏布の都合にて袖裏身頃裏を同一布になすことあり又別布になすこともあり例へば紅白絹を身頃裏にし袖のみ表と同じ地質チ

リメン類を用ひ又身頃裏を新モスとして袖裏を本モスなすが如し然れども身頃袖共紅白絹を用ひ身頃袖共に新モスを用ふる場合も少ながらず。

○身丈は裾布の丈長き時は表身頃丈に5cm (1寸2分5厘) を加へたるものより裾布丈を減じたる長さにてよろし裾布の幅の布の半幅又は$\frac{1}{3}$の幅なる時は表身頃丈に桃の2倍を加へたるに長さを身丈とす。

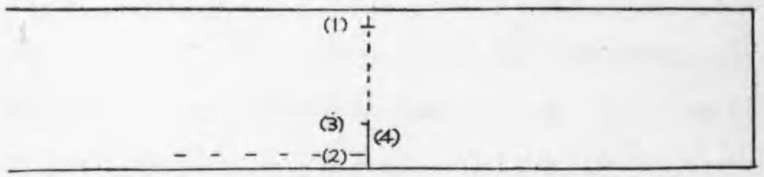
この場合は裾布をかぶせて用ゆるなり。

○別衿仕立の時は身幅充分にして困ることなけれど成るべく摘み衿の時は表裏共布幅廣きものを選ぶされば肩幅の不足することあり又衿幅餘り狹くて見苦しきことあり衿肩明，肩幅，衿幅等充分考慮して其の上衿肩明に鋏を入ること肝要なり。

○裏の布表に比して幅狹き時は肩幅の縫代を定めてそれより肩幅を計りそこを脊縫にして衿肩明を定め端よりそこまで切込むをよしとす故に裏衿表衿幅に比し5mm乃至1cm位狹まき事往々あり此の際は裏衿摘み縫ひをせず只裾布のみ附けて差支へなし。

幅　34.5cm (9寸1分) の布を以て摘み衿長襦袢の裏身頃

衿高切方説明



(1) 幅の端より1cmに標して肩幅の縫代となす。

(2) 肩幅の標より30cm(凡8寸)を計りて脊縫の標とす。

(3) 脊縫の標より向ふへ仕上衿肩明きに標をなす。

(4) 布の手前端よりその標まで鋏を入れる。

○裾布の裁方

(8寸)　並巾 120.(3尺2.) を以て

30. 後	〃 前	〃 前	〃 後

裾布の長さの4倍30cm×4＝用布

別衿狹衿の時に多く用ふ。

並巾 210.(5尺5寸5分) を以て

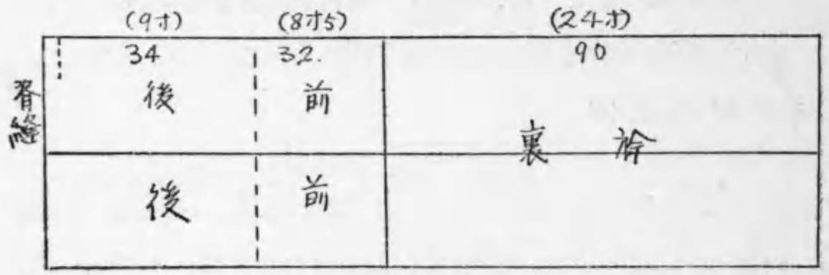
(8寸) 30.				(2尺4寸) 90.
後	前	前	後	衿裏

別衿廣衿の時に多く用ふ，裾布と同じ布にて取る衿裏を普通竪裾布と云ふ。

裾布の長さ×4＋裏衿丈＝30cm×4＋90cm＝210cm

(總丈－裏衿丈)÷4＝裾布の長さ(210cm－90cm)÷4＝30cm

○別衿廣衿仕立にして裾布半幅の横切を用ふる時並幅156cm (4尺1寸) を以て



仕立後幅＋脊と脇の縫代＝後幅　仕上前幅＋脇と衿附の縫代

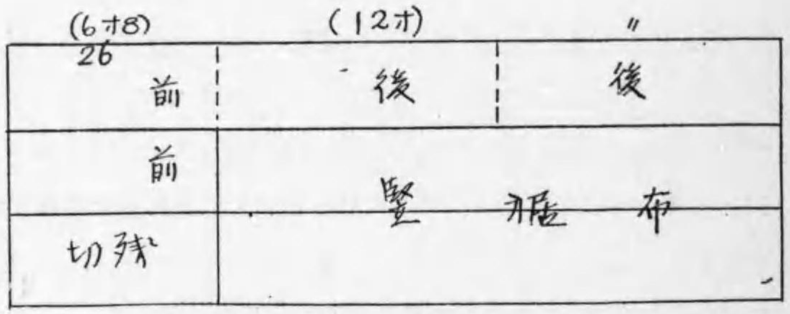
仕上後幅＋仕上前幅＋縫代×４＋裁切裏衿丈＝總丈

30cm＋28cm＋2cm×4＋90cm＝156cm用布
後　前　背及脇衿の縫代　衿裏

摘み衿にして裏衿の半幅は廣ければ衿幅の一方で縫こむか或は幅を表に揃へて切つてもよろし。

○摘み衿の $\frac{1}{3}$ 幅裾布の裁方

並幅116cm(3尺7寸)を以て

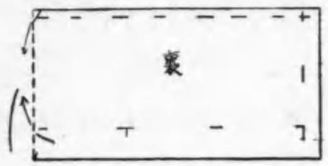


後布幅長過ぎれど脊と脇で縫込む。

90cm＋26＝用布
竪裾布　前裾布

○本裁女物袷長襦袢仕立方

袖標入方　仕立上寸法より表布幅廣く裏へ折返す仕方(大名袖)



仕立上袖幅に袖附のキセユトリを加へたるもの

袖丈　表裏同じ地質の時は3mm弱裏丈を詰めるなれど裏表布の地質に依りて一定せず。

仕立上袖幅より表布の裏へ返りたるを引きたる寸法

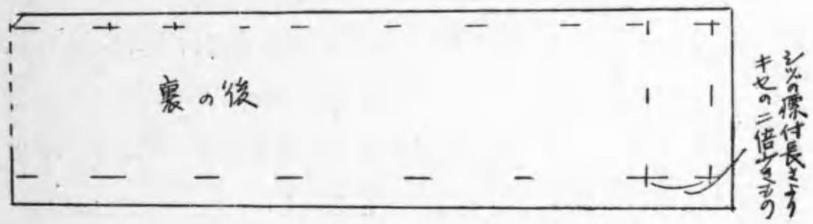
表布の返り多ければ多い程裏袖幅は狭くなる。

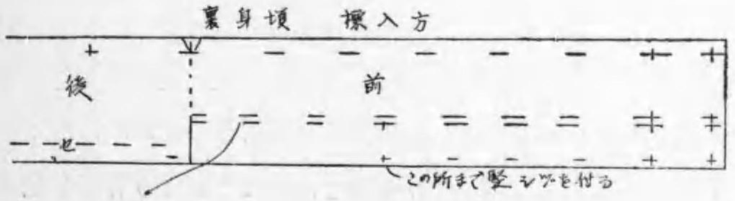
裏袖幅の出し方第二法

仕立上袖幅×2＋(八ッ口縫のキセ＋袖口縫キセ)×2－表標付－バイの幅＝裏袖標附幅

表身頃は單衣長襦袢に同じ前後の差の附方も同様なり。

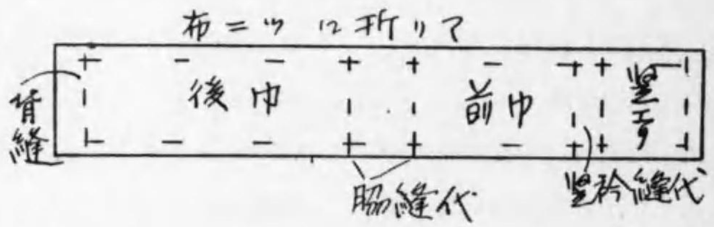
裏身頃　裾布は上よりかぶせる方よしとす。



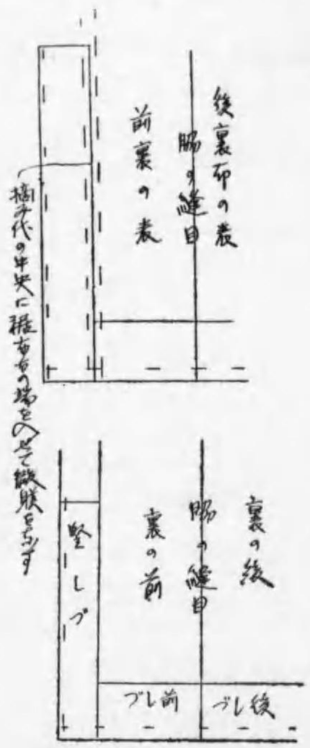


裏布幅狭まき時はこゝ標を省きて衿摘みをせず竪シヅを前幅の標に合せて縫ひ衿綴じをなして後竪シヅの上を絎けつける。

半幅或は$\frac{1}{3}$の幅にて長く續きたる裾布の標入方



（注意） 表地縮緬類の時は標附をなす前に地直しをよくし裏布との釣合を後になりて狂はぬ様確かになし置くこと肝要なり。



縫方　簡易な所は省く。

袖　表裏縫合せたる所には平躾を用ひても又隠躾にてもよろし平躾なれば後に取り去る。

布表裏引返しの時はまづ振りを縫合せ3mmのキセにて裏に折りをつけ後縫目を合せて袖下を四ッ縫になす都合で縫目を合せて裏表別々に縫ひ後に綴を入れてもよろし。

袖口留は單襦袢に同じ。

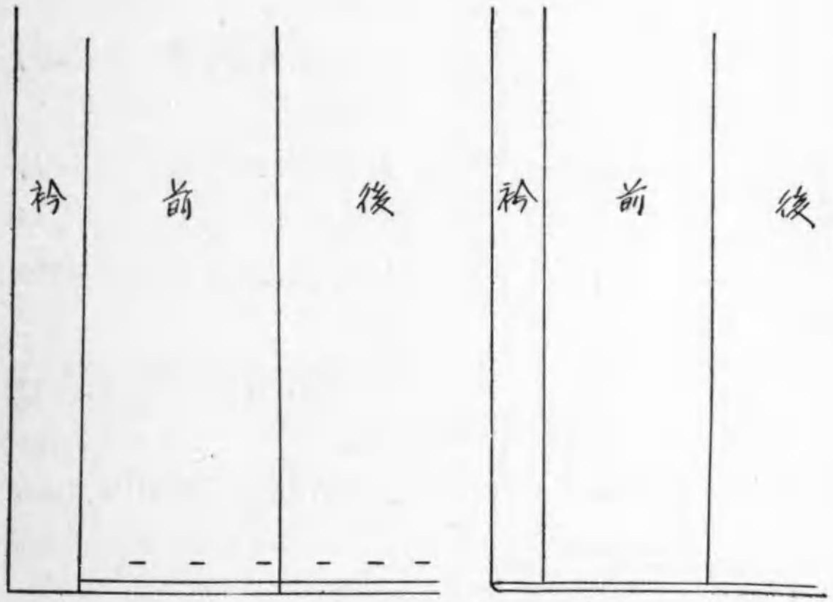
身頃表は單襦袢に同じ。

裏　通し裏の時は表に同じ裾布をつくる時は先きに裾布をつけ2mmのキセをかけ平躾をかけてそれより脊脇を縫ふこ

の方法をなす時は脊綴ぢ脇綴ぢが仕易くかつしつかり出來る。

裾布の破れた時簡單に仕かへるには身頃の脊脇を縫ひ次に裾布の脊脇を縫ひて後前身頃より後身頃と縫ひ合せその折は裾布の方に返して躾をかける。

次に竪裾布の上端を身頃の標と合せて縫ひきせをよくして裾の標を合せその外に躾をなし衿摘み代の中央にシヅをのせ假躾をして後衿摘みをなす。

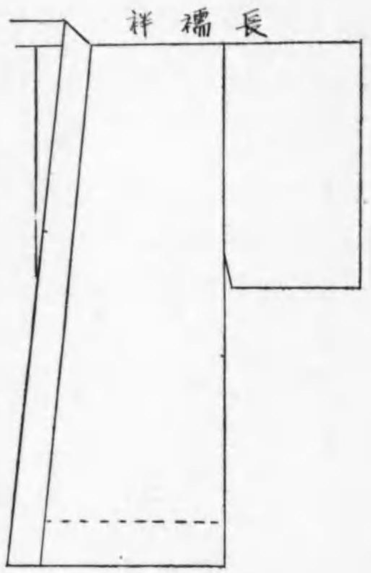


衿の部にも出枇を出す時は表裏にも衿摘みして後裾を合すればよろし。

出枇は身頃にのみ出し衿は突き合せになすが本當なり此の場合身頃のみ裾合せしてキセをかけ出枇を定めて躾し出枇の山より3mm先きにて衿先きを縫ふ。

枇綴じの位置は裾合せキセの山より5mm上とし數は前幅に3針後幅に4針とす。

第五節　男物袷長襦袢



本裁男物袷半襦袢及び長襦袢

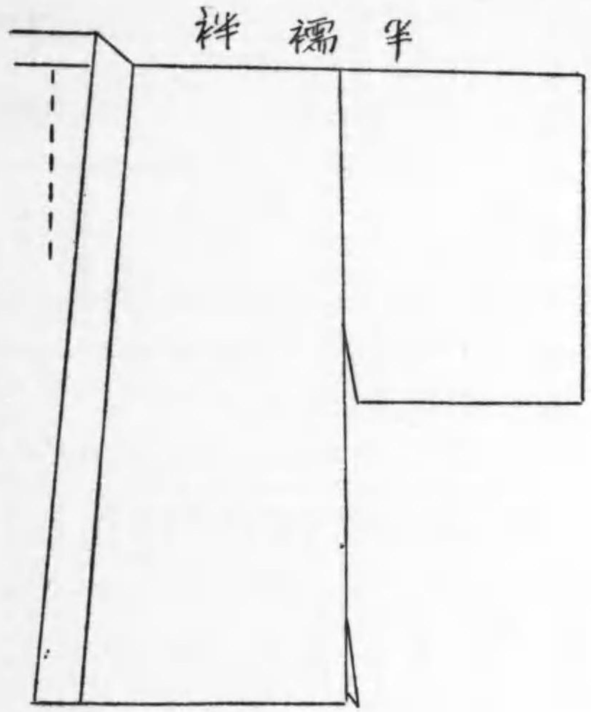
普通仕立上寸法

1. 袖丈着物袖丈より8mm(2分)短かく。
1. 袖附着物袖附より8mm(2分)少なく。
1. 袖幅着物袖幅より3mm(1分)狹まく。
1. 身丈着物丈より4cm(1寸)短かく。
1. 衿肩明着物より2mm少なく。

1. 後幅　30cm(8寸)乃至32cm(8寸5分)
1. 肩幅　着物肩幅より3mm多く裄は着物と揃ふ故袖幅にて詰めしだけ肩幅にて出す。
1. 前幅　28.5cm(7寸5分)乃至30cm(8寸)
1. 馬乘　半襦袢に限り12cm(3寸1分)乃至13.5cm(3寸5分)
1. 衿幅　5.7cm(1寸5分)
1. 裾の表布裏へ返り一定せざれども10cm(2寸5分)内外とす。

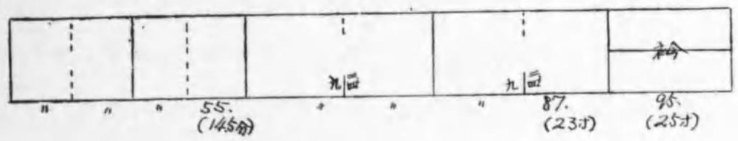
仕立上身丈+15cm=衿丈　80cm+15cm=95cm

(袖丈+身丈)×4+衿丈=總丈　(55cm+87cm)×4+95cm=66.3cm



{總丈−(袖丈×4+衿丈)}÷4=身丈

{66.3cm−(55cm×4+95cm)}÷4=87cm身頃丈

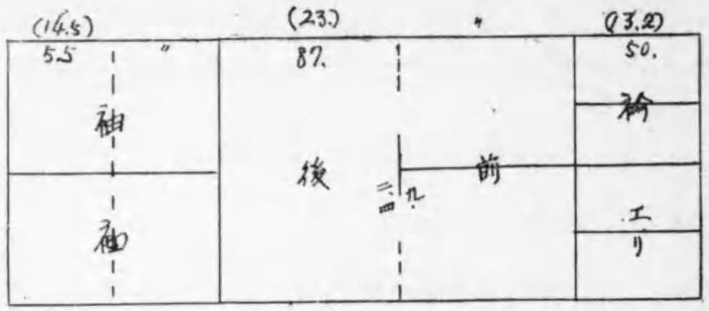


2尺幅物334cm(8尺7寸)を以て

(仕立上身丈+15cm)=衿の分

(80cm)+15cm=50cm

衿肩明は並幅物と同じ明きで脊縫をなす。

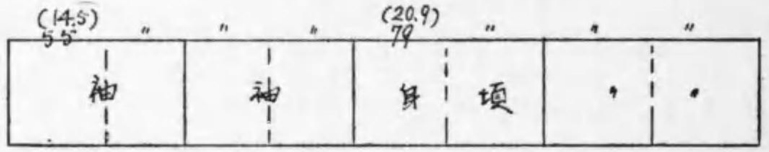


(袖丈＋身丈)×2＋衿布＝總丈 (55cm＋87cm)×2＋50cm＝334cm

{總丈－(袖丈×2＋衿布)}×2＝身丈

{334cm－(55cm×2＋50cm)}÷2＝87cm

並幅536cm(1丈4尺1寸)を以て半襦袢裏の裁方

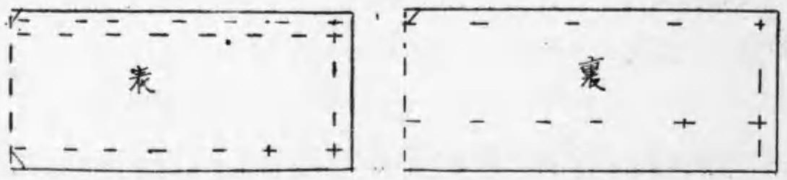


仕立上身丈80cmならば標附身丈81cmなり。

87cm－81cm＝6cm表の返る分　81cm－6＋2×2＝79裏身丈

長襦袢は身丈半襦袢より長きを要し從つて衿丈も長きを要すれどもその裁方及び積方理法は半襦袢に同じ普通並幅物にて表布950cm(2丈5尺)を要し裏は並幅物にて750cm(2丈)内外を要す。女物と大差なし表は布幅一ぱいに標を入れ多き丈袖口にて裏に返す。

標　入　方

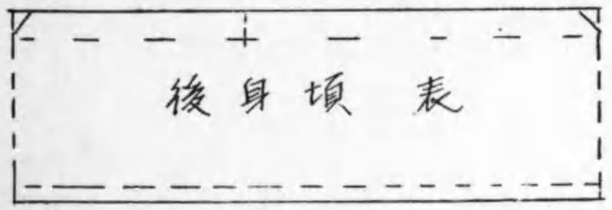


身　頃　標　入

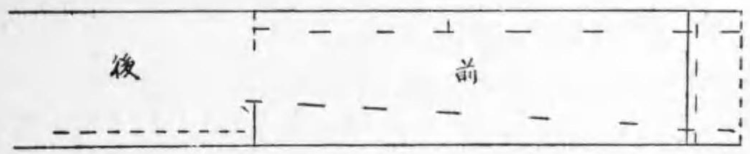
脊縫をして身丈寸法を定め長きだけ裏に折返す。

表身頃の上に脊縫衿肩明きを揃へて裏をのせ胴接ぎの標入る圖。

胴接ぎの標を待針にて押衿肩明きより後身頃を上にして折り表裏合せて8枚行後幅袖附の標入る半襦袢の時は是等の外に馬乗りの標を入る。



後身頃の標を下にうつして表裏共後身頃を左にはねて前身頃を出し前幅を定めて衿附の標を入る。



縫　　方

袖　表裏袖口の方を縫合せ裏に返して躾をかける袖下の縫目を合せて表の人形より裏の人形まで別々に縫ひ後綴ぢを入れて表に返す

身頃前後胴接ぎをなし其の縫目は裏に返して躾をなす。

脊縫を裏表ともよく合せ綴ぢを入れる。

脇縫ひをなし後の縫込みに折り戻しを附けて中綴ぢを入る。

袖附をなす表は袖にて身頃をはさみて留め折りは袖に返す裏は折りを身頃に返す裏袖附の留は裏袖より針を出し身頃脇縫の上の縫込を折りたるまま裏の方より少し抄ひ向ふの袖を縦に針をかけ身頃袖の順に歸り結び留をなす。

衿附表のみに縫附後裏に綴ぢてもよし三ッ衿布を入れ衿先きを縫ひ衿紐けをなす後掛衿をかける裾は表布の裏に返れる時は裾綴ぢをせず。

第四章　單　　衣

第一節　一ッ身單衣

初生兒より5，6歳兒まで着用す。

普通仕立上寸法

袖　丈	(袖丈の短かき濶袖)15cm(4寸)乃至21cm(5寸5分)
元祿袖	25cm(6寸6分)乃至28.5cm(7寸5分)
筒　袖	17cm(4寸5分)乃至23cm(6寸)
袖　口	13cm(3寸5分)乃至17cm(4寸5分)
袖　附	13cm(3寸5分)乃至17cm(4寸5分)
袖　幅	15cm(4寸)乃至25cm(6寸5分)
身　丈	70cm(1尺8寸5分)乃至95cm(2尺5寸)
衿肩明	3cm(7分5厘)乃至4cm(1寸)

後　幅	1ばい
前　幅	1ばい
身八ッ口	8cm(2寸1分)乃至10cm(2寸5分)
衽下り	10cm(2寸5分)
衿　幅	3cm(7分5厘)乃至4cm(1寸)
褄　下	17cm(4寸5分)乃至25cm(6寸6分)
紐　附	肩より衿附通りにはかりて17cm(4寸5分)乃至25cm(6寸5分)

肩揚をなす時の肩幅脊の中央より後幅の半分後の袖附終りより前袖附終りまで糸は2重にして。

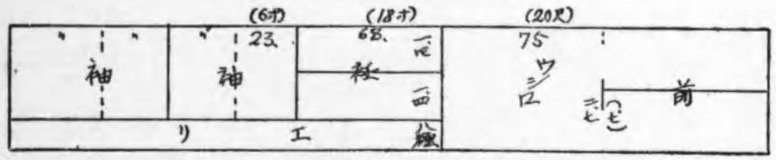
腰揚　揚の部分多少に依りて一定せず揚多き時は上より摘まぎれば揚山下りて見苦しく揚少なき時は上に過ぐれば又形惡し故に揚の多少によりて加減を要すしかし普通寸法は身丈の中央とす。

裁方及び積方

並幅1幅より袖と衿と衽とを取るは衽幅除りに狹まきのみならず袖丈のみ除り長く之又よろしからず。

模樣に注意して向き模樣の時は後身頃に正しき方を持ち行く。

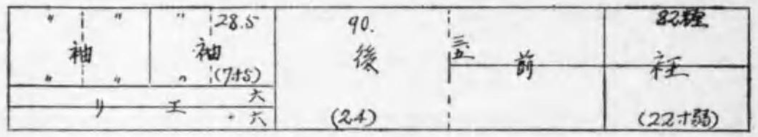
(1) 並巾310cm(8尺2寸)を以て一ッ身單衣の裁方



此の裁方は衿を接ぐことなく衽幅もさして狹まくなく1,2歳の幼兒に多く用ひる　　袖丈×4＋身丈×3－衽下＝總用布

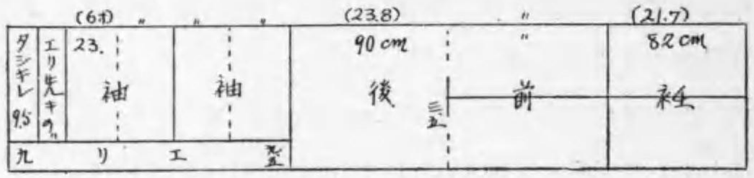
23cm×4+75cm×3−7＝310cm總用布　（總用布−袖丈×4+衽下）÷3＝身丈(310cm−23cm×4+7)÷3＝75cm。

(2) 並幅376cm(9尺9寸3分)を以て一ッ身單衣の裁方（元祿袖）



此の裁方は衿裏布を要す。積方は（1）と同じ。

(3) 並幅373cm(9尺8寸5分)を以て一ッ身單衣の裁方（筒袖）



此の裁方を最も多く用ふ。

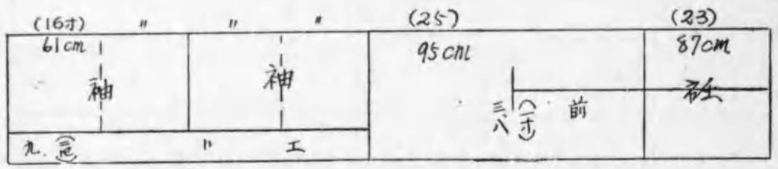
身丈短かきか或は袖丈長き時は衿の足し切1本にて足ることありされど普通2本を要す。

袖丈×4+身丈×3−衽下+衿足切×2＝用布

23cm×4+90cm×3−8×9.5cm×2＝373cm

{總尺−(袖丈×4+衿の足布×2)+衽下}÷3＝身丈

{(373cm−23cm×4+9.5×2)+8}÷3＝90cm



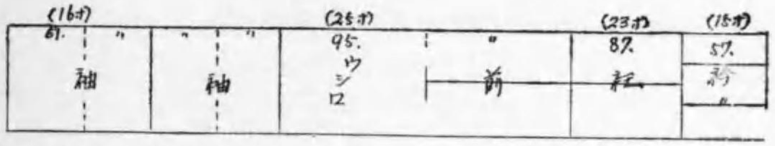
(4) 並幅521cm(1丈3尺8寸)を以て一ッ身單衣(濶袖)

袖丈×4+身丈×3−衽下＝總丈 61cm×4+95cm×3−8＝521cm

(總丈−袖丈×4+衽下)÷3＝身丈

(521cm−61cm×4+8)÷3＝95cm

(5) 並幅573cm(1丈5尺3寸)を以て一ッ身單衣（別衿濶袖）



長袖の濶袖にして袖口の返り少なき時は格好惡しき故に袖幅を並幅で取る此時衿丈の見積方

（身丈−衿下+11cm）×$\frac{2}{3}$+1,5cm＝衿丈

(95cm−23cm+11cm)×$\frac{2}{3}$+1.5cm＝57cm　衿丈

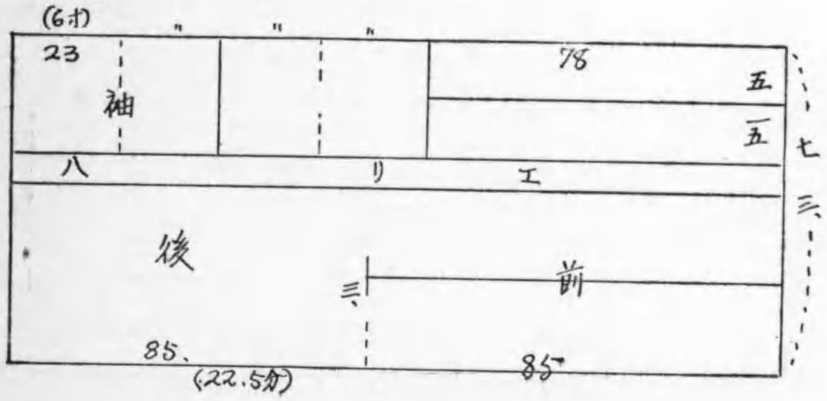
袖丈×4+身丈×3−衽下+衿丈＝總丈

61cm×4+95cm×3+衿丈−8＝578cm

{總丈−(袖丈×4+衿丈)+衽下}÷3 身丈

{578cm−(61×4+57cm)+8}÷3＝95cm

(6) 二幅物170cm(4尺5寸)を以て

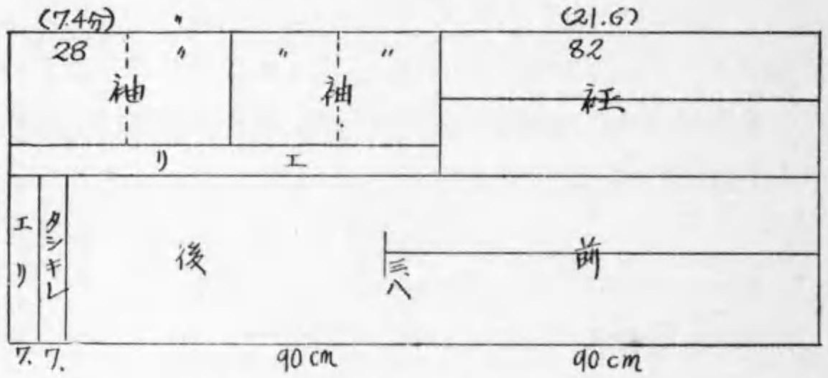


この裁方は最初より袖丈を幾何と定め難し故に衽下を取りて殘りを4分したるもの袖丈をなる。

(170÷2+8cm)÷4=23cm袖丈

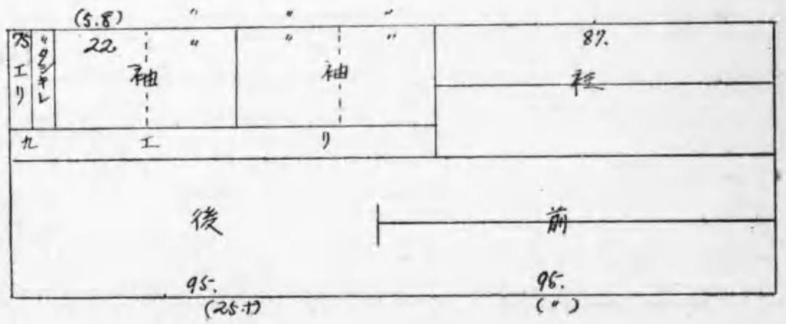
身丈×2=總丈85cm×2=170cm用布(總丈÷2+衽下)÷4=衽丈

(7) 二幅物194cm(5尺1寸)を以て(元祿袖)



衽幅を廣くなさんとする時は衿の足し切を袖丈身丈の實係により種々考慮を要すされど概して云へば袖丈長くせんとする時は身丈の端より之を取り身丈を長くせんとする時は袖丈の端より取る。

足し切の分だけ裏衿を要す。

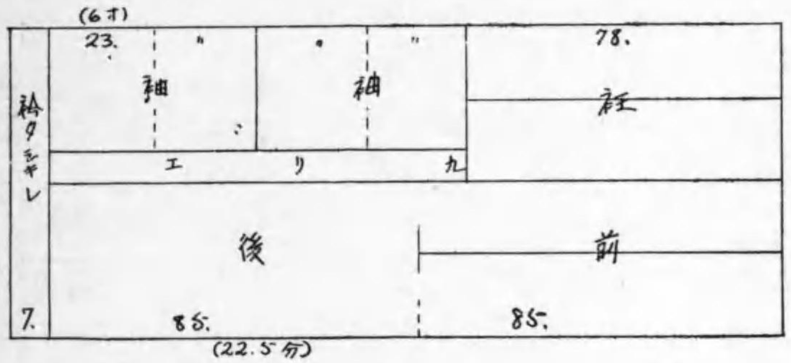


袖丈×4+身丈−衽下=總丈　28×4+90−8=194cm

(總丈−衿足切幅×2)÷2=身丈　(194cm−7×2)÷2=90cm

(8) 二幅物190cm (5尺)の布を以て(身丈長くして袖丈短かくする時)　身丈×2=總丈　95cm×2=190cm

(9) 二幅物177cm(4尺7寸)を以て　(用布短かき時)



身丈×2+衿の足し切布幅=總丈　85cm×2+7=177cm

(總丈−衿の足し切幅)÷2=身丈　(177cm−7)÷2=85cm

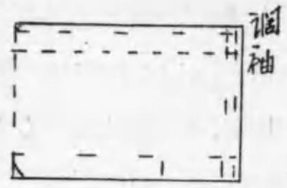
肩當布は並幅にて38cm(1尺より1尺3,4寸)55cm位とす尙居敷當を續けて裾まで附けることあり。

肩當居敷當續き

裾まで續ける時

後身頃と同じ丈

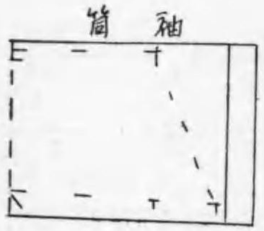
紐は並幅95cmを以て二本となすを普通なれど裝飾的でなく信に實用的にのみ附くるのは半幅の布にて90cmにてもよろし

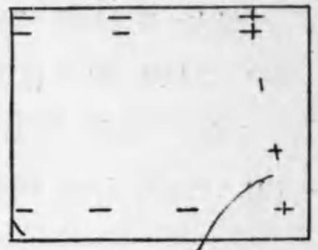


標附方

一ッ身の袖幅は大抵布の片方裁目なれど新らしき時は其の裁目の方を袖口に耳を袖附になす。

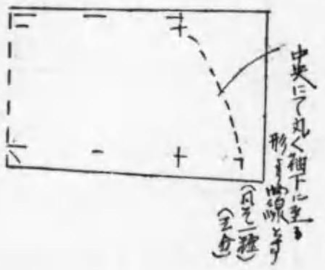
筒袖

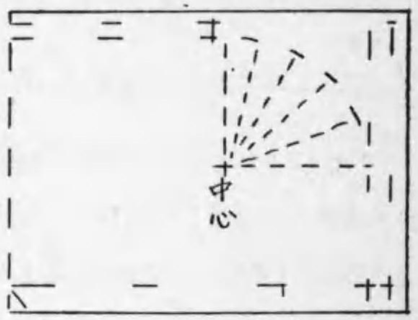




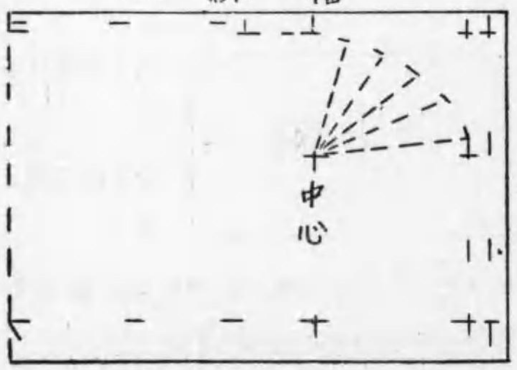
袖丈短かくして袖附と同寸法の場合袖下にて8cmあける。

袖丈短かき元禄袖





元禄袖

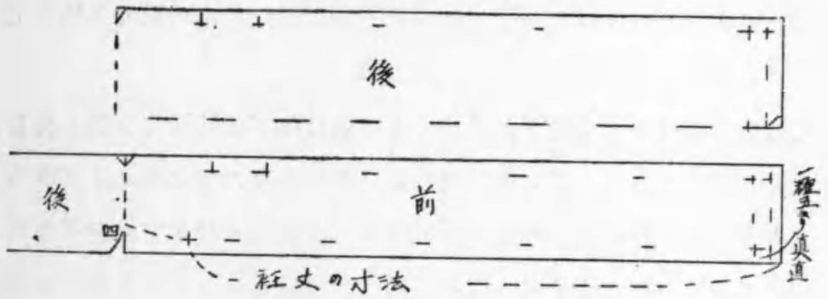


袖丈短かき時は自然半徑短かくなる故に袖口の標よりに直丸味を附ける。

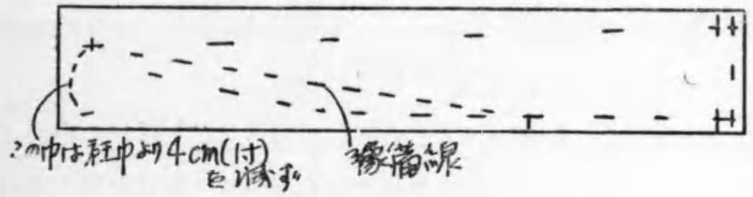
←袖口の標より下に2cm又は3cm下りそれより袖下までの長さを½徑としたる¼の圓なり

この丸味は大抵11cm内外(3寸内外)とす。なほ袖丈長き時は袖口下の眞直の所を2,3cm以上長くしてよろし。

身頃の標入を四ッ折りの圖後布を上にして



衽標入



衿附のふくらし方

先づ衽先きの標の所にて2mm間を置きて標を入れそれより褄下の標まで豫備線を引く次に衽先より15cm下りたる所にて衽幅を5cm乃至7cm位の所に標を入れ其の標を通じて適宜丸く形よく標を入る。

衿丈のはかり方は衿肩明きと肩廻りの弛み代5mm(1分5厘)を加へ更に衽下りの寸法と衽下より褄下の寸法を加へてこれを2倍して衿丈を定む。

衿幅の狹き時は先きに裏衿を縫合せ其の折は裏へ返し隱し躾をなす。

縫　　方

袖(筒袖)　表より3cmの縫代標通り幅標の間を縫ひ返して袋縫になす又後袖の縫代を多くなして置き後袖の縫代深き部分内袖の裁目を包みて絎けつけてもよし袖口は後袖の縫代を4cm程折り戻して隠し躾をなして後袖口を三ッ折り絎にす。

元祿袖　袖口下より袖下を縫ひてまづ袖口明下後袖縫代を折り戻し隠し躾にておさへ後丸味の縫しめにかかる丸の標の初めより終りまで小針に針目を揃へて四度繰りかへて縫形を整へて絲を引きしめる（此の際丸味を引きしめる絲は普通縫ふ絲よりは別絲にて稍太く且つキシック絲を用ふる方困難少し。）

濶袖　袖附の方の縫代を１ばいにして袖幅寸法の餘つた分は袖口の方へ廻し其の分は裏へ返して絎け附る。

肩當及び居敷當　表身頃と共色の絲にて肩當及び居敷當の中心と身頃の中心とを合せ中に絲を忍ばせて表裏小さき針目を出し大針に綴ぢ附ける次に肩當の幅と表布との肩當とを比べ肩幅の幅狹まき時は表共色絲で耳絎けをなし置き幅充分なる時は後に袖を附け終りにて絎け附ける故に其のままかり躾をなし置く。

（注意）　縮緬の如き伸縮し易き地質の時は肩當居敷當を通しになすをよしとす。

脇　縫　左右の脇明の所抄ひ留の針留をなして縦縫を終らば2mmのキセを定めて兩方とも前布に折りを返す次に後身頃の縫代の折り戻しを附けて身頃に絎け附ける。

普通綿布は耳絎けに絹布類上仕立物は折り絎けになす。

衽　附　成るべく幅を廣くなさんとする時又は地厚の時は袋縫にせ

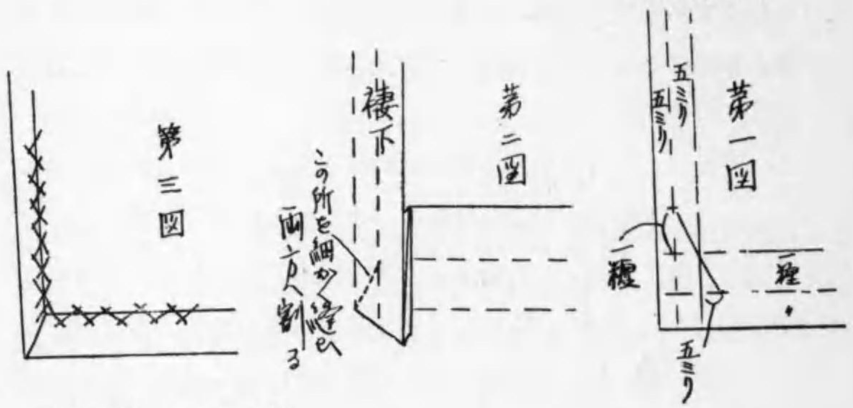
ずとも但し此の時は裁目故縫絲を以て卷縫をなす丁寧に仕立つる時布地上物の時は袋縫となす初め身頃衽とも4mmの縫代にして表より縫ひ身頃の方に折りをつけ次に裏より身頃の標を衽附の標を合せ縫ふ。

衿附，衿絎　まづ衿の中央山標と脊縫とを合せて待針し衿肩明左右とも衿布の方少し弛み自然に丸味をつく次に衽下より4cm位までも心持衿布を弛める位にしてそれより褄下の標と衿布丈の標まで布を平に衿先，縫ひ初め縫終り共4cm返し針して抄ひ留をなす。此の際衿肩廻りは小針に其他は普通にてよろし縫ひ終らば衿布の方に折りつけ三ッ衿芯を入れ（之に衿芯は一身に限り衽先き迄入れるをよしとす）衿先終りより3mm先きを縫ひ衿絎けの縫代にて包み表に返す此の時留をなし衿附けの兩端は何れも絎け戻しをなす。

裾絎及び褄下絎　褄下は3mmの三ッ折り絎けになし裾絎けは第1圖の如く1cmに折り次に第2圖に折り褄下の絎け山を裾口の絎け山を角の所にて行き合せて絎け行く布地厚き時又上仕立の時は額

縁になすことあり。

額縁標仕方



地質厚きセルネル等の如きを最も丁寧に仕立る時第3圖の如く額縁になして千鳥掛になすことあり。

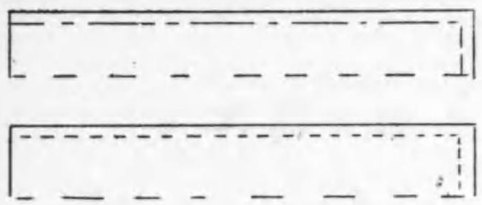
裾下の紵代は5mmの三ッ折り紵け裾口は1cmの三ッ折り紵

袖　付　袖山と身頃山とを合せて待針し次に左右とも袖附標に待針をなし縫初と終りには4cm戻し針をして抄ひ留をなし極細かく縫ふ次に1mmのキセをつけ袖の方へ返し袖附終りの身頃縫込みを折戻りし落附までにかくしを入れ次に肩當の縫込みを折りて袖附の縫代に紵け附けを而して後身八ッ口袖振り等共に耳紵け又は縫代先きを5mm折りて紵け附けてもよろし。

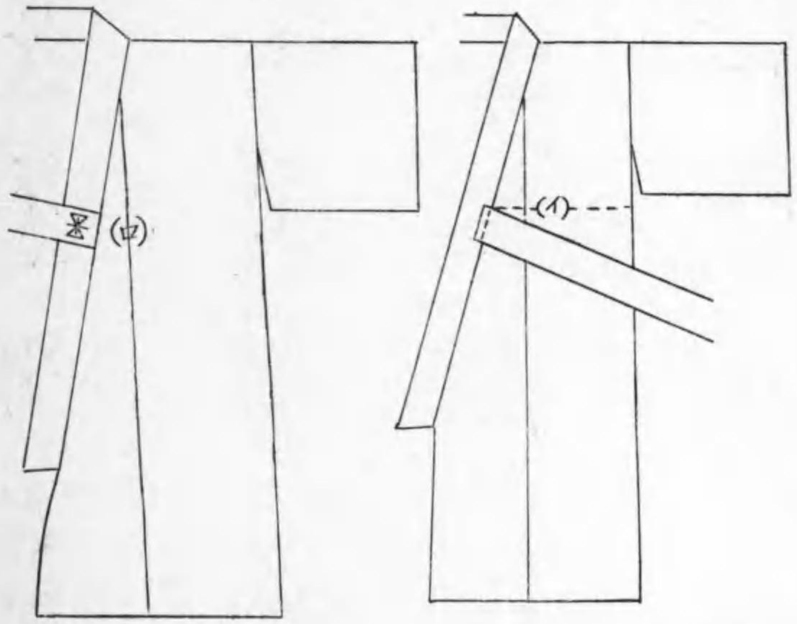
紐　附　紐切は常着ならば並幅四ッ割幅にて長さ76cm(2尺)位とし晴着殊に產着等の場合は前記したる通り並幅の半幅布にて長さ95cm(2尺5寸)を標準とす。

縫方は表を中にして縦を二ッに折り一方の横と縦を5mmの縫代にして縫ひ折りは初め横次に縦と一方へ折りて表に返す帶兼用の

時は輕く鏝をあて落附かせ後兩面躾をかける



此の躾絲は色の配合を考へ絹絲2本を以てす

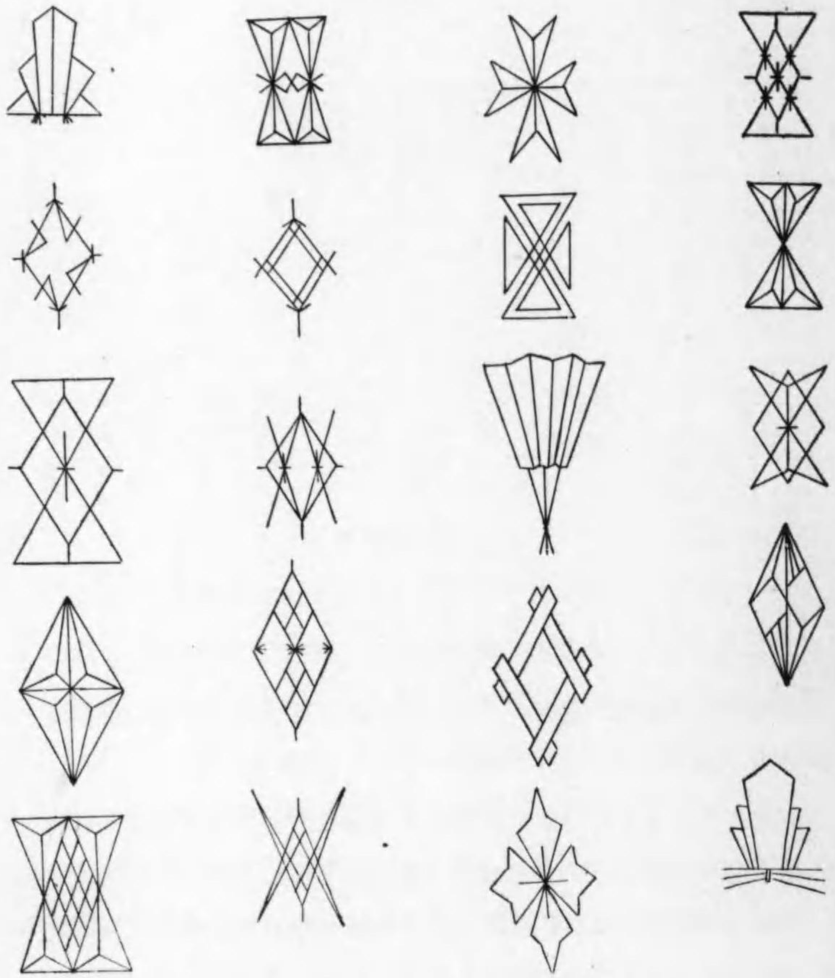


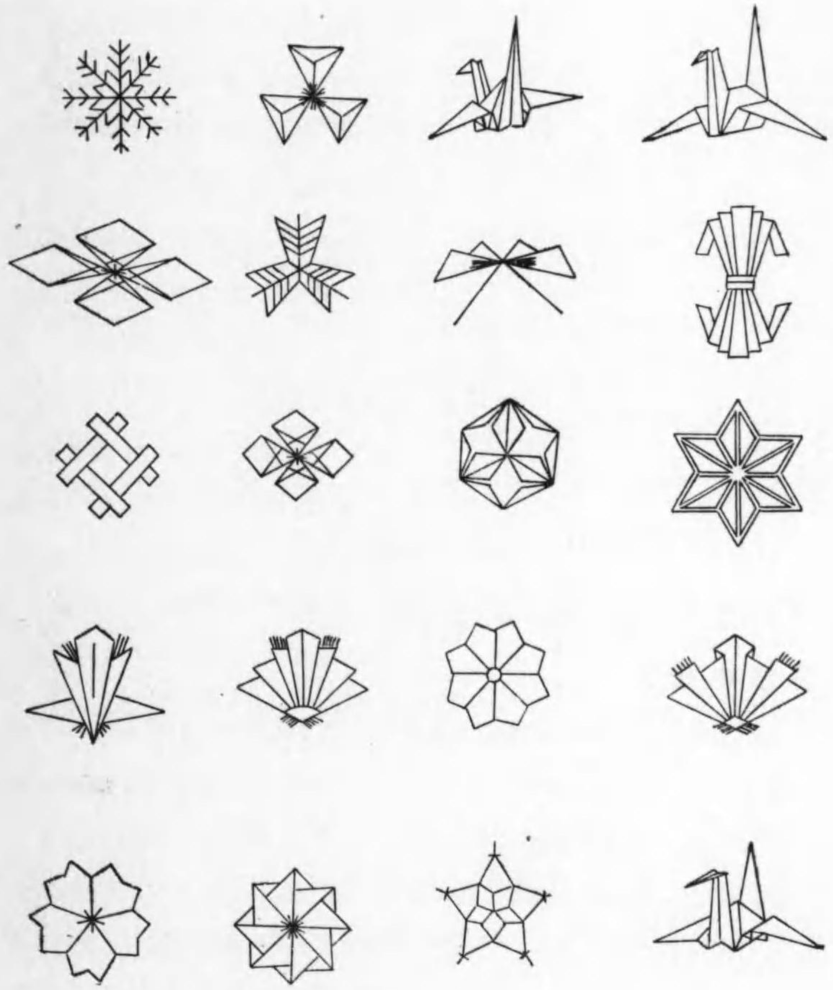
紐の位置は脇明の眞直より下に紐を附け男子ならば紐の縫目を下に女子は上にして附ける習慣あり。

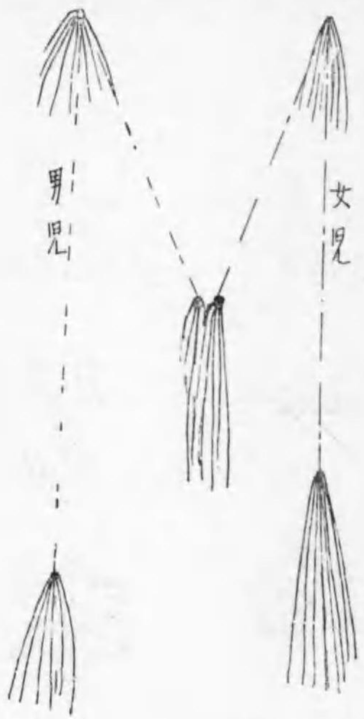
紐飾りをなすには厚紙にて紐幅の寸法に依り長方形の芯紙を造り之を紐の縫殘したる一端に1cmの縫代を殘して押し入れ紐飾をなす絲は紐に配合よき色を撰び2本の絲を以て絲の撚れざる樣好みの飾りをなす身頃に縫附けるには（イ圖）の如くしつかり返し針にて縫附け（ロ圖）の向きに返し上下横の三方は紵けつける。

守　縫　一ッ身の脊の中央に守縫をなす常用などに必要なけれども

紋の飾縫







宮參り出產祝ひなどの衣服には必ずこれをなす。

守縫は五色の絲（赤黑靑黃白）にて衿附けより 30cm 下りたる所に圖の如く眞直に 7 針斜に 5 針縫ひ此の際男兒は雌針女兒は雄針を表に出す習慣あり而して上には輪にて 15cm（4寸）位殘し丸結して下にたれ中央の絲は 50cm(1尺)位長く殘して斜に縫ひたるも同じく殘し置くものとす。

脊　紋　一ッ身には脊の中央衿肩明きより 3cm下りたる所に飾り紋をなすことあり主に御祝着のみになして通常着等には餘り多く用ひず。

肩揚の仕方

普通標準の裄は着丈の½なり着丈75cmなれば肩裄は37cmと云ふが標準なれど實際は着用する子供について計るをよしとす肩揚は前に記したる通り肩幅の中央を揚の山となす後前とも袖附の留まで雄針雌針にて(特に肩山の所は小針にて)縫ふ。

但し後は終りまで揚の寸法通り眞直に縫ひ前は袖附の中間まで眞直にそれより下終りまで揚の寸法の½位斜になす（前は胸をかき合せる爲に割方狹まくなればそれを補ふ爲に揚を少なくなす）

腰揚の仕方　揚山は前記したる通り標準は丈の中央なれども揚の深

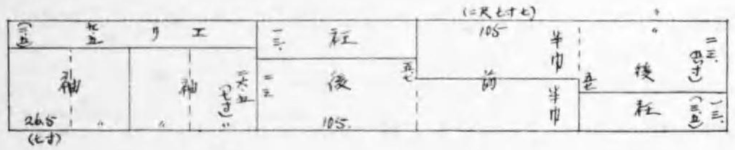
さによりて上げ又下ぐるを良とす卽ち揚の深さ多ければ揚山を丈の中央より適宜上げ揚の深さ少なければ下ぐ又衽の幅にて裾の方幅廣き時は襞を取り且衽衿の間にて自然に斜に縫ひ込むをよしとす絲は肩揚と同樣2本にして針目も大針小針にして縫目の所と初と終りは一針返して縫ふ。

肩揚腰揚の位置は仕立上の形の上に影響するものなれば適宜位置を定め恰好よくかつ着易くすること肝要なり。

第二節　三ッ身單衣

三ッ身裁は長着として都合よきものにあらず一ッ身に比して後身僅かに廣くなすの長所あれども兩面物にして前幅は一ッ身と同じく衽幅は至つて狹く片面物にありては前幅も半幅になすを得ず故に子供に着せて前のよく折合はぬ缺點ありのみならず用布を小幅に裁斷する故に他日これが運用上不經濟なれば此の裁方は餘り好ましからざれども前を折合すの要なき羽織類にはよく用ふ寸法は一ッ身の大きなるにほぼ同じ。

並幅兩面物を以て三ッ身單衣の裁方



筒袖及び元祿袖の場合衿丈少し不足につき別切を下前衿先きに接ぐ。

積　方

袖丈×身丈×3＝用布　26.5cm×4＋105cm×3＝421cm

{用布－(袖丈×4)}÷3＝身丈　{421cm－(26.5cm×4)}÷3＝105cm

並幅片面物434cm(1丈1尺5寸)を以て三ッの裁方

袖丈×4＋身丈×3＋衿幅×2＝用布

52cm×4＋105cm×3＋9.5cm×2＝434cm

{用布－(袖丈×4＋衿丈×2){÷3＝身丈

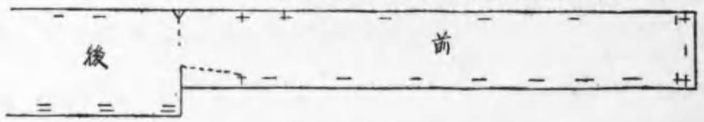
{434cm－(25cm×4＋9.5cm×2)}÷3＝105cm

(布幅－5)÷2＝前幅　前幅と衽幅とは等し(36cm－5)÷2＝15.5cm

前幅＋5＝後幅　15.5cm＋5＝20.5cm

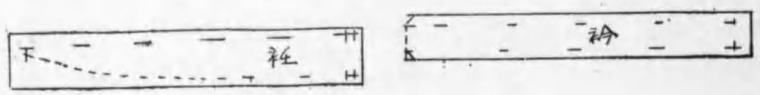
標附　袖及び後身頃は省く。

衽附を袋縫するの除裕なし故に前身
↓頃の裁目を細かく巻き縫ひをなす



↑
單衣物は背を
袋縫になす

↑
この衿肩明及び衽下りの關係一ッ身の如く斜に
ならず逆にならぬ樣肩に7mm切込を入れたり。



第三節　四ッ身單衣

6, 7歳兒より12, 3歳兒まで着用す。

普通仕立上寸法

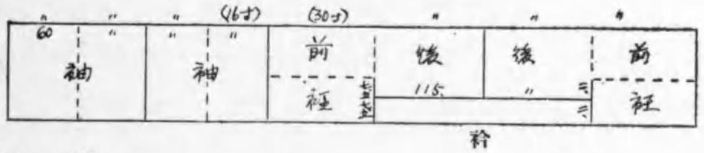
袖　丈

袂	袖	64cm(1尺7寸)内外
元 祿	袖	32cm(8寸5分)内外
筒	袖	25cm(6寸5分)内外

袖　口	15cm(4寸)乃至19cm(5寸5分)
袖　幅	28.5cm(7寸5分)乃至30cm(8寸)
袖　附	15cm(4寸5分)乃至21cm(5寸5分)
身　丈	110cm(2尺9寸)内外
衿 肩 明	6cm(1寸6分)7cm(1寸8分)
後　幅	21cm(5寸5分)乃至23cm(6寸1分)内外
身八ッ口	10cm(2寸5分)
前　幅	衿肩明より3mm廣く下裾口まで眞直に
衽　下	13cm(3寸5分)乃至15cm(4寸)内外
褄　下	30cm(8寸)乃至40cm(1尺5分)内外
衿　幅	4cm(1寸)乃至4.5cm(1寸2分)

裁 方 積 方

並幅7m(1丈8尺4寸)を以て四ッ身の裁方

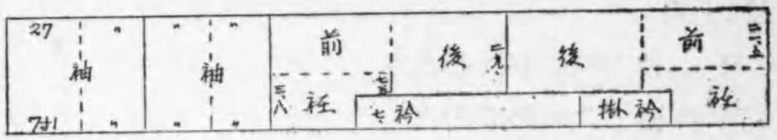


(1) 積　方

袖丈×4＋身丈×4＝用布　60cm×4＋115cm×4＝70cm

(用布－袖丈×4)÷4＝身丈　(700cm－60×4)÷4＝115cm

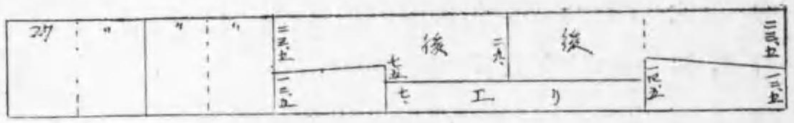
(2) 同上裁方　(元祿袖)



普通前の如くなれど衽上の縫込多く掛衿短かければこの裁方の如く衽上まで衿を續けて裁ち落すことあり。

積方は前と同樣なれば略す。

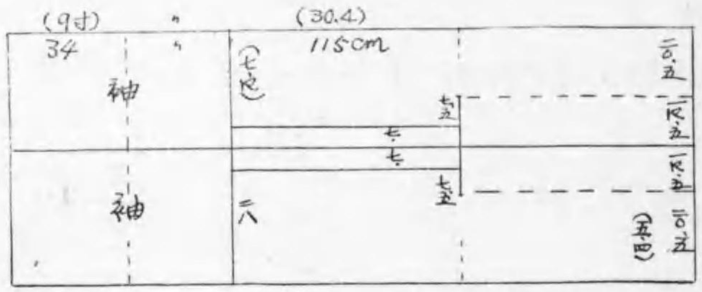
(3) 並幅550cm(145寸)半反を以て四ッ身逆衽の裁方



用布に關する積方は前と同じ。

衽幅を下にて2cm狹まく裁ち切る其の狹きま方を逆に衽上に縫附ける前の裁方に比し前幅にて2cm廣くなる多少身幅廣くなし着心地よき長所あれど布を小さく裁斷するの短所もあり。

(4) 2幅物294cm(7尺9寸)を以て四ッ身裁方



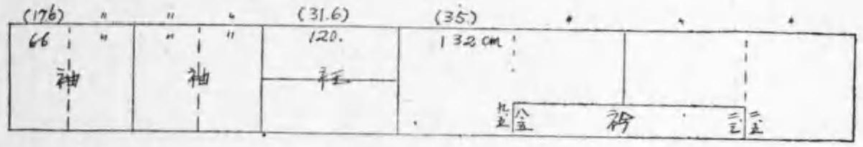
此の裁方は下前にて衿を接ぐ

積　方

袖丈＋身丈×2＝用布　(34cm＋115cm)×2＝298cm

(用布－袖丈×2)÷2＝身丈　(298cm－34cm×2)÷2＝115cm

(5) 並幅912cm(241.5)を以て別衽の裁方



此の裁方は四ッ身を本裁の中間に用ふる裁方なれば身丈を長く又衿幅も少し廣く裁切つて脊縫を少し縫込み置くを良とす。

積　方

袖丈×4＋身丈×5－衽下＝用布

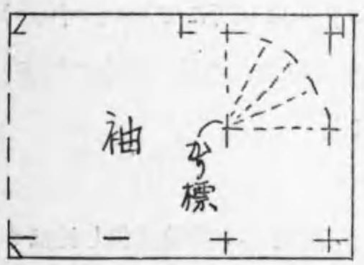
66cm×4＋132cm×5－12cm＝912cm

{用布－(袖丈×4＋衽下)}÷5＝身丈

{912cm－(66cm×4＋12cm)}÷5＝132cm

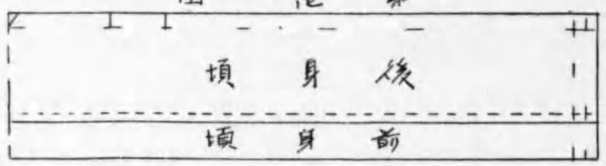
標　入　方

袖(元祿袖)　まづ中表にして兩方揃へ常に輪を左に裁目を(袖下)右に袖口を向ふに袖附になす方を手前に正しく置き寸法の通り標す。

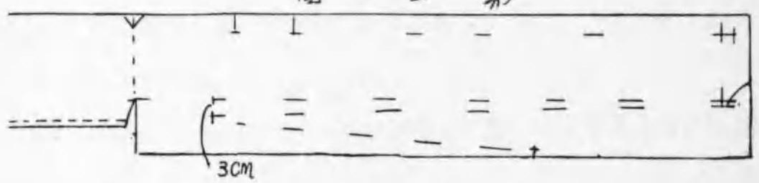


袖の丸味は圖の如く袖口標より2cm乃至2.5cm下りたる所より袖丈の寸法を計り其の寸法丈袖口下より手前に標し次に中にも同寸の假の標して假標を基點に4箇所程計りそれを通して丸味を角立たぬ樣標す。

身　頃　後布脊を表より初め3cmの縫代にして裏に返し二度縫をして後身頃を上に衿肩明の方を左に脊縫を手前に布を四ッ折りに揃へて正しく置く(第1圖)肩幅袖附身八ッ口後幅丈と標を入れ次に



第壱図



第二図

第2圖の如く後布を取りよけて後布の幅袖附身八ッ口等の標を通して衽下り前幅衽幅褄下と標入す前幅は衿肩明より3mm(1分) 手前まで肩幅を計り其の寸法にて眞直に裾まで標入す衽幅は褄下の繰代を取り裾にて1cmの摘み縫代を取り上衽下りの所にて3cmの摘み縫代に標し裾口の標より斜に標を附す。

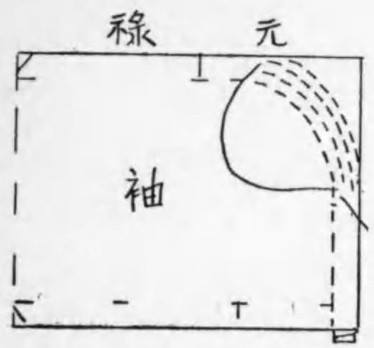
衿附の標は衽下の所にて2mm弱に標し之は衽附のキセを見込んで附けるものなり次に劍先より20cm下りたる所にて5cm(1寸3分)乃至7cm(1寸7分)位深く繰り廣げ加減に角立たぬ樣衿下まで標す。

衿丈の度り方は一ッ身の時と同樣故省く。

同　縫方及び順序

1. 袖　2. 肩當及び居敷當　3. 脇布　4. 衽縫　5. 衿縫（但し衿はさきに衿裏を縫合せおく）6. 褄下の三ッ折繰け及び裾の三ッ折繰け　7. 三ッ衿芯入衿先縫，衿繰　8. 袖附　9. 肩當繰け附及び八ッ口振の始末　10. 肩揚腰揚

袖先づ外を表に3mmの縫代で縫ひ裏に返して標通り待針し袖口



明きの所に4cm戻し針抄ひ留の針留をして丸味の所では特に針目小さくして縫ふ，圖の如く縫目より5mmの所を丸味の始めより終りまで下縫より稍ゝ針目大きく5mm宛間を置きて3回縫ひ前袖の方へ折りを返して縫込みの落附く程度先きの絲を順に引き角立たぬ樣襞を取りて落附かしむ。

其の外は一ッ身と同じ故之を省く。

第四節　本裁單衣女物

普通仕立上寸法

袖　丈	50cm(1尺3寸2分)乃至75cm(2尺) （老人）　（若い人長いところ）
袖　口	23cm(6寸)
袖　附	17cm(4寸5分)乃至30cm(8寸) （若い人帶を高く締る人爲に）（老人）
袖　幅	30cm(8寸)乃至32cm(8寸5分)
衿肩明	9.5cm(2寸5分)乃至10cm(2寸6分5厘)
肩の繰越し	2cm(5分)
身八ッ口	11cm(2寸9分)乃至3cm(3寸5分)
後　幅	28.5cm(7寸5分)乃至30cm(8寸)
前　幅	23cm(6寸)25cm(6寸5分)
裄	61cm(1尺6寸)63cm(1尺6寸5分)
肩　幅	裄の寸法によりて肩幅を定むまづ裄より袖幅の寸法を減じ其の殘りを肩幅となす。

衽　　下　23cm(6寸)

褄　　下　68cm(1尺8寸)乃至80cm(2尺1寸)

衿　　幅　狭衿5.6cm(1寸5分)

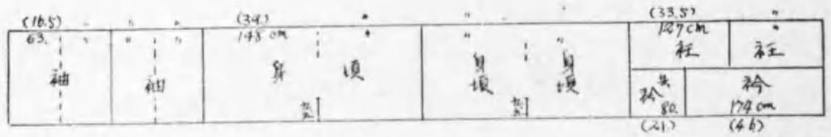
バチ衿　衿肩廻り5.6cm(1寸5分)衽下の所にて6.5cm(1寸7分)

衿の先きにて7.5cm(2寸)

廣衿11.5cm(3寸)

袂の丸味　2cm(5分)乃至7cm(1寸8分5厘)

(1) 並幅一反1100cm(2丈9尺)を以て本裁衣服の裁ち方



総丈－(袖丈×4＋衽下×2)÷6＝身丈

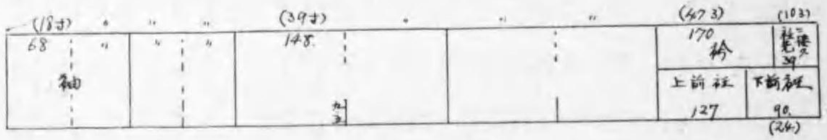
(1100cm－63cm×4＋21cm×2)÷6＝148cm

身丈－衽下＝衽丈　148cm－21cm＝127cm

身丈－(褄下＋15cm)×2＝衿丈　148cm－76cm＋15cm×2＝174cm

衽丈×2＝衿丈＝共衿丈　127cm×2－174cm＝80cm

(2) 並幅1035cm(2丈8尺6寸)を以て袖丈68cm(1尺8寸)の衣服の裁ち方

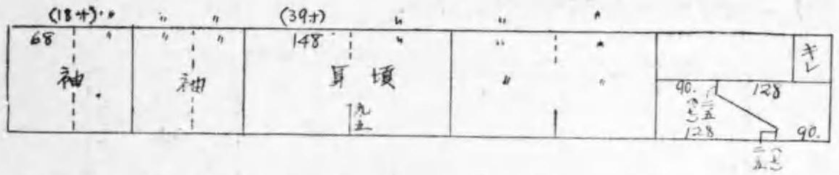


袖丈長き爲に下前衽に衿先きの切を接ぐ故に共衿なし。

{総用布－(袖丈×4＋下前衽)＋衽下}÷5＝身丈

{1085cm－(68cm×4＋90cm)＋20cm}÷5＝148cm

(3) 並幅1035cm(2丈8尺6寸)を以て鈎衽の裁方（両面物に限る）



{総用布－袖丈×4＋褄下)＋衽下}÷5＝身丈

{1085cm－(68×4＋90cm)＋20cm}÷5＝148cm

鈎衽裁は一反の反物を以て袖丈長する時身丈餘り短かくなり不都合の場合に用ふる裁方にして前の下前衽接ぎの裁方に比し出來上つた形の上に於て下前にもせよ一見接ぎ目もなくかつ地質厚きものなど衿の中ごろごろせずよく落付など長所あれど片面物にて裁ち難く衽布を上下かへることも出來ず又衽附と褄下とをかへることもなし難く且つ衽附の歪み適當を失し之等皆鈎衽の短所なり止を忘ざるの外好ましき裁方にあらず。

(4) 並幅1115cm(2丈9尺4寸)を以て身丈 袖丈共に長くする時の裁方

衿は幅を三分す

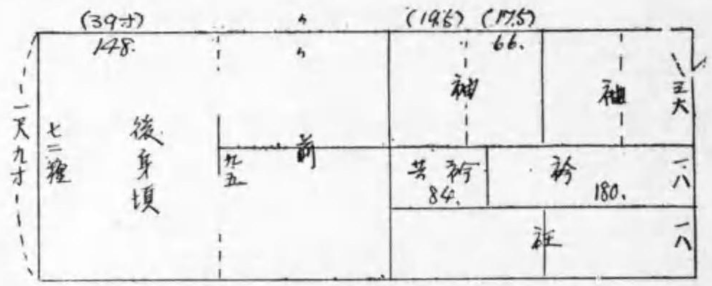
{総用布－(袖丈×4＋衿丈)＋衽下}÷5＝身丈

{1115cm－(72×4＋65cm)＋21cm}÷5＝157cm

此の衿は衿を三ッ接ぎ合す 折は兩方とも中の布へ 5mm のキセを掛けて返すなれど唯接ぎたる丈にては落付なき故中の衿布に別切を入れて重ね接ぎし其上より共衿の如くしてかける方よろし。

並幅を三分したれば衿幅狭まし故に裏衿を要す。

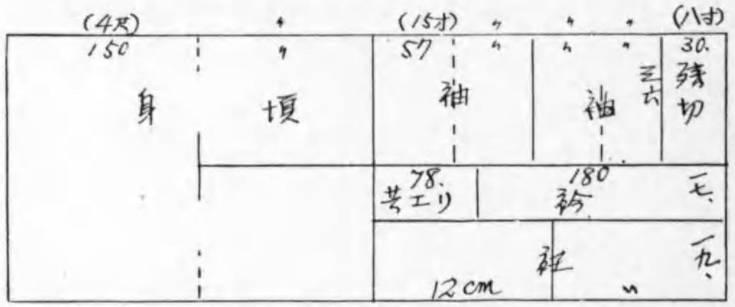
(5) 二幅物560cm(1丈4尺8寸)を以て



右の裁方は袖丈の2倍と衽丈が匹適する時最も都合よし袖丈が長くなる程身丈短かくなり衽先きの縫込み多くなりて不都合なり。

(總用布－袖丈×4)÷2＝身丈　(560－66cm×2)÷2＝148cm

(6) 二幅物560cm(1丈4尺8寸)を以て



殘り切は居敷當とす。又袷衣の時など殘切幅を4分して袖口布ともなす。

(總用布＋衽下×2)÷4＝身丈　(560＋21×2)÷4＝150cm

男物單衣

普通仕立上寸法

袖　丈　51.5cm(1尺3寸5分)乃至53cm(1尺4寸)

袖　口　26.5cm(7寸)

袖　附　42cm(1尺1寸)乃至44cm(1尺1寸5分)

袖　幅　32cm(8寸5分)乃至34cm(9寸)

袂丸味　2cm(5分)

身　丈　139cm(3尺6寸5分)内外

衿肩明　9cm(2寸4分)

後　幅　30cm(8寸)

前　幅　26.5cm(7寸)

衽　下　21cm(5寸5分)

褄　下　61cm(1尺6寸)乃至64cm(1尺7寸)

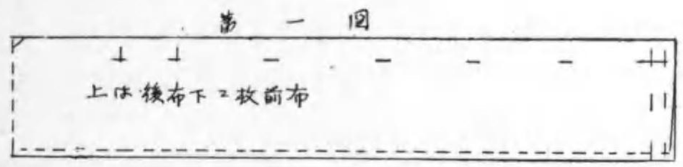
衿　幅　5.8cm(1寸5分)

腰揚の位置肩山より50cm(1尺3寸2分)乃至52cm(1尺3寸7分)

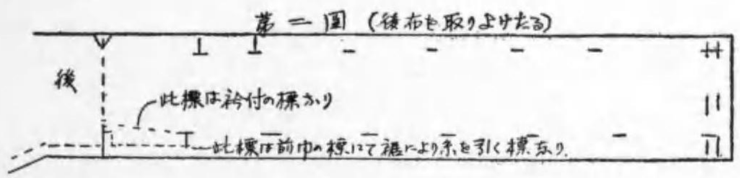
前腰揚は後より4cm(1寸)下げる。

裁方は女物と同じ唯袖丈の長短相違あるのみ故に省く。

女物標入　(袖は省く)

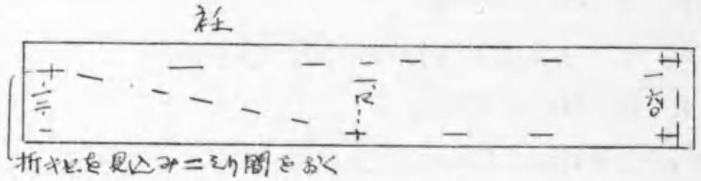


まづ脊縫終らば衿肩を左に脊を手前にして正しく四ッ折りに後布を上に平らにおく次に袖附身八ッ口肩幅後幅身丈の標をなすこと第一圖の如し。



第一圖に標したるは全部前布に通し置く。

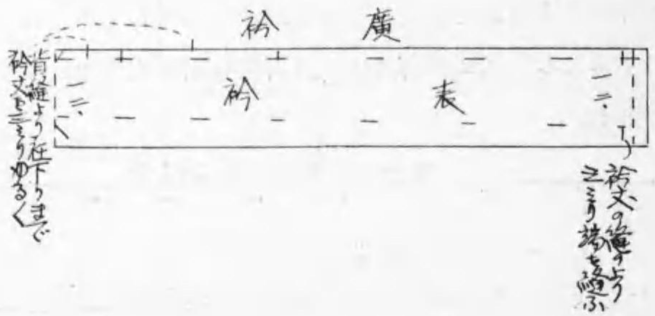
並幅衽の標入方は寸法に依りて一様ならず卽ち後幅 30cm(8寸)前幅 23cm(6寸)の時は裾口卽ちにて 23cm(6寸)に標し衿肩明にて切つてある端より 3 mm手前の所に標しそれと裾口の標とを通して定木なり又絲を引きて前幅の標を附ける又後幅 28cm(7寸5分)前幅 23cm(6寸) の時は裾口で前幅の標入し衿肩明きの所にて先きと反對に 3mm向ふに標しそれと裾口の標を通して前幅の標入をなす。



衽丈は前の衽下より裾口の裁ち揃へたる寸法と同様。

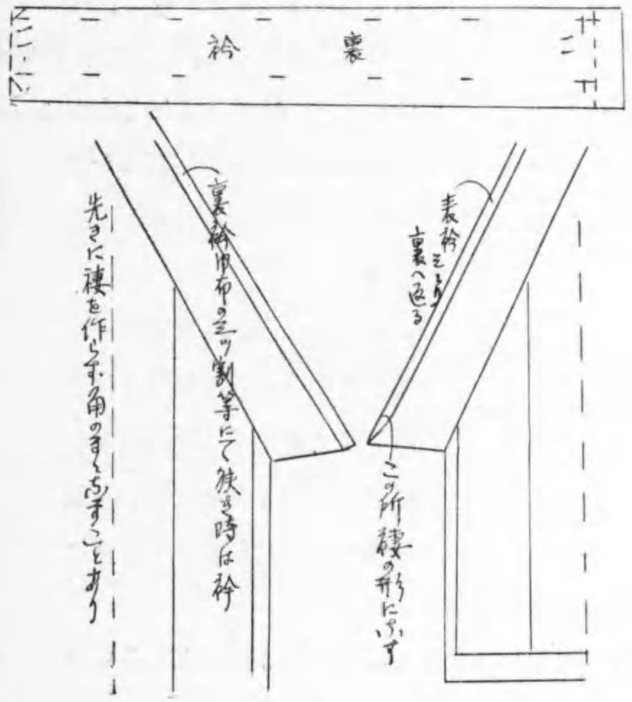
相褄幅は衽幅（裾口）より 2cm(5分) を控へ上の幅相褄幅より又2cm狹まく裾口を通して定木か又は絲を引いて斜に標入す。

以上を普通標準として衽及衿の標入をすれど褄下の高さ或は低さに依りて相褄幅相違を來すことあり故に裾と上の標準を定め之をつなぐ方相褄幅の如何に係はらず格好もよく便なり。

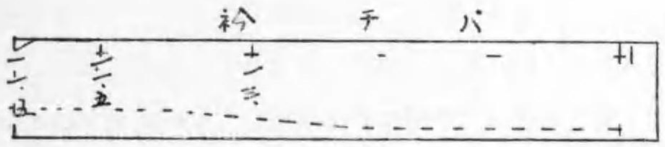


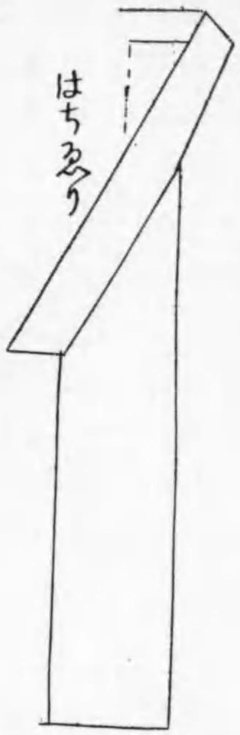
褄先の縫方　上仕立物又は布地の厚きものなど額縁になす前に記せし故省く。

衿の標入



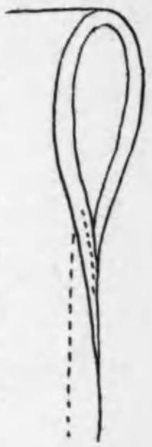
衿肩廻りの幅5.7cm(1寸5分)肩より衽下の所にて6.5cm(1寸7分)衿先にて布幅一ぱい 8cm(2寸1分)裏衿の方(衿紐の方)のみにて歪す。





縫方　注意事項

袖口下縫代整理　袖の左右に別るるは袖口下及び袖下の折目の異なるに依る袖口を右手に手前に折りを附ければ左袖となり向ふに折れば右袖となる故に左右何れにも折りをつけ縫代の上になりたる方即ち後縫代を後へ折戻しておさへ折りをはつきりなすこと肝要なり。



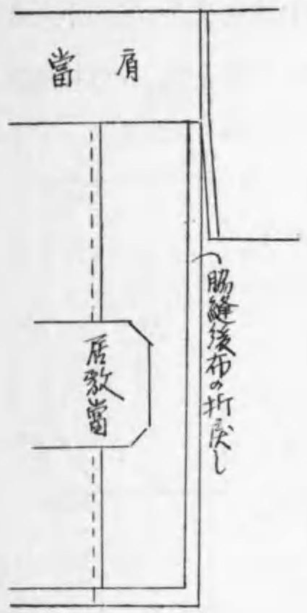
袂の丸味の如きも單衣なりとて折りをうやむやになすはよろしからず正しく後縫代を折戻すはやがて袷綿入等の袖縫の基となれば最初より確實に了解すること必要なり。

袖口絎方　袖口絎初め終りは袖口明き際より凡そ3cm下より初め又3cmに終る。袖口絎代幅は地質によりて一定せず特に耳太きものを除きて5mmを標準とす。

特に上仕立薄物など撚り絎をなすこともあり。

八ツ口絎　常着用は耳絎になせど上仕立は折絎となす布幅狹くして却て見苦しき時は針目に注意してきれいに耳絎となす。

肩　當　肩當の端は二ツ折にして伏縫をなすが普通なれど上仕立の場合は三ツ折絎になす肩當を附ける場合一所に四ツ縫ひをすることあれどやはり表身頃と別々脊縫をなして後に身頃の脊縫に綴ち



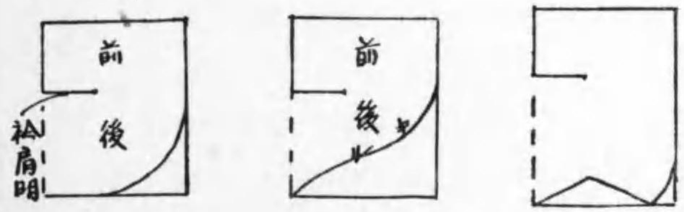
附くるをよしとす。

肩當布を身頃脊に綴ち附け袖附の方に耳絎にしておいて袖附を3枚縫ひになすことあれど之は洗濯より布の伸縮表布と肩當布と一様ならざる時不都合あり故に肩當布は袖附終りて後上より絎け附くるをよしとす。

布幅廣く脇縫込多き時は後の縫込み折戻しの落付まで或は裾口まで折り戻す

薄　物　肩　當

絽紗明石上布の如き地質薄きもの脊伏せのみにて肩當を附けぬことあれども衿肩廻衿附の邊を丈夫になさん爲に小さく附けることあり表布の殘り切あらば之を用ふ形は何にてもよろしけれど脊中に四角なる形うつるも見苦しく故に好みの形に切つて其の端は細くこまかく絎けて附けるもよし。



布丈は大抵30cm(8寸)位迄とす

居　敷　當

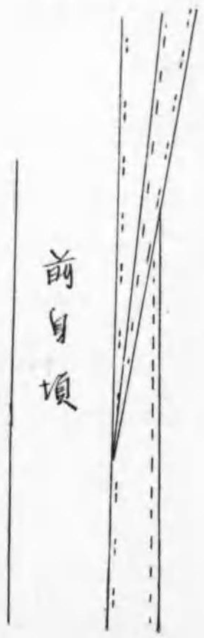
長さに依つて一定しがたきも普通裾口より30cm(1尺)上りたる所より上に附くるを標準とす四ツの角は4cm程折りて身頃に附くる

をよしとす折方は先きに角を斜に折り次に縦横眞直に折る中央は脊縫に大針に表に出る針目極く細かく出して綴ぢ附ける次に左右上の三方を袋の入らぬ樣氣をつけて表身頃に紮けつける。

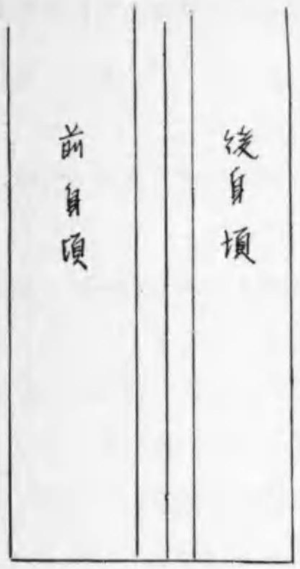
脊　　伏

脊の縫代及び縫目を隱す體裁よく尙脊縫の折目の亂るることなく肩當あらば其の下は省き裾紮の中も省く（裾紮の紮目高くなるから）長さは身丈によりて一定せず幅は4cm(1寸)を要す。

地質は餘り厚からぬ品を用ひ表の殘り切あらば利用するもよし脊縫をなす時に衿肩を右に持ち布の向ふに脊伏の布を當てて三ッ縫ひとす脊縫の縫代を包みて脊縫の絲のきわにて紮ける脇縫，縫込みの折り戻し。



縫込み少き時又は木綿物並仕立の時は後脇縫込みが袖附より落付く所まで折り戻して其の折つた端はかくし躾を入れ耳は前後とも耳紮になす。

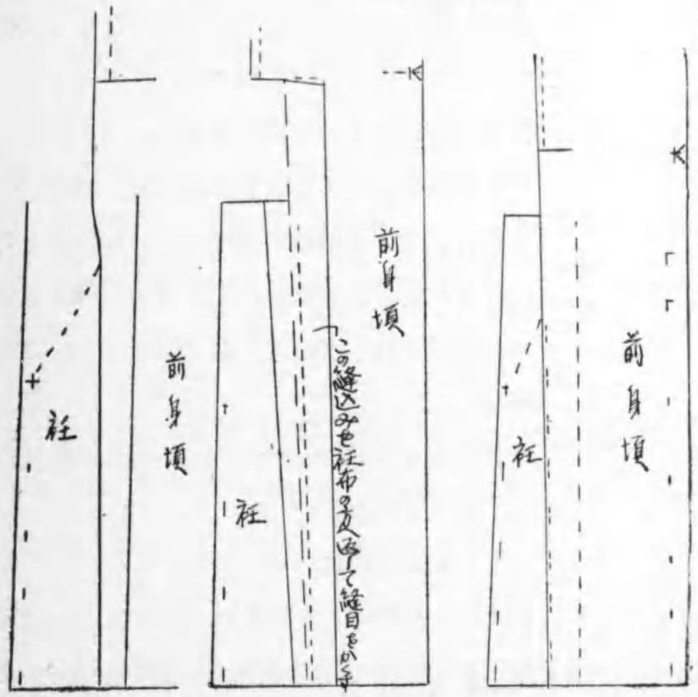


上仕立は裾にて1cm重ねて身頃八ッ口まで斜に脇縫の針目より少し大きく後へ折り戻す。兩方の耳は伏せて身頃に紮け附ける。

衽　　附

並仕立の時は衽の標と前身頃の衽附標を合せ縫ひ身頃縫込みの先きは耳紮になす單衣地質の如何にかかはらず常に針目に特に注意し表裏とも縫目の見える所など細かくかつ美しく縫ふべし。

上仕立の場合



前身頃衽附の標より1cm縫込みによりたる所折り山とし衽附の標と衽布の標とを合せ三ッ縫ひになす。

折は並通

の衽に返し身頃の縫込みを縫目の上にかぶせて衽布の方に落付かせ布の端を伏せて衽布に絎け附ける。

衿　　附

廣衿の場合　まづ掛衿を下衿に縫附ける（但し掛衿は仕立上後掛けることもありいづれにてもよろし）

表衿の天標と身頃の脊の縫目と裏衿の天標とを揃へ針を指し漸次に下に向つて針を指し三ッ縫になす縫終らば前の多くの縫込みは皆表衿にてくるみ衿先きは終りより3mm先を縫ひ留めをなして其の縫目は裏へ返して綴ぢ附け表に返して衿先を褄の形に作り衿肩廻りに衿芯を入れて裏衿は5mm控へて躾す後裏の色絲を以て絎ける裏衿幅狭くして端まで表布の返る時は衿先を縫ふまでに衿絎の方合標を合せて上へ5cmばかり縫ひ裏布に折りをつけキセを正し後衿の折山を定めて衿先を縫ふ。

バチ衿の場合衿の天標を身頃の脊の縫目を合せ廣衿の時の要領にて縫附三ッ衿には芯を入れ衿先を縫ひ左上前の衿先を留め次に右下前の衿先留をなし其のまま絲を切らずして裏の縫目に絎け附ける。

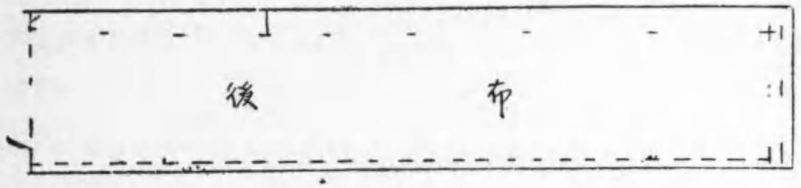
男物標入袖　（袖下は最初表より3mmの縫代にて縫ひ裏へ返して正しく整へて標入す。）

後身頃を上にして四ッ折りて正しく整へる。

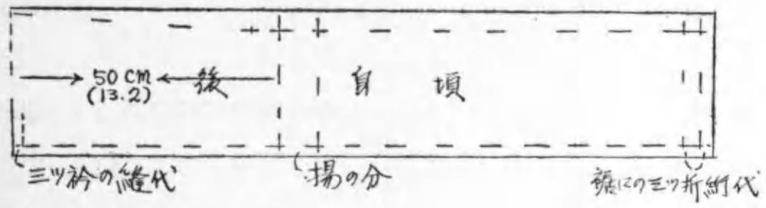
仕立上寸法＋三ッ衿の縫代＋揚のキセ＋裾口の三ッ折絎代＝標入寸法　例へば身頃裁切寸法150cm（3尺9寸5分）として仕立上身丈

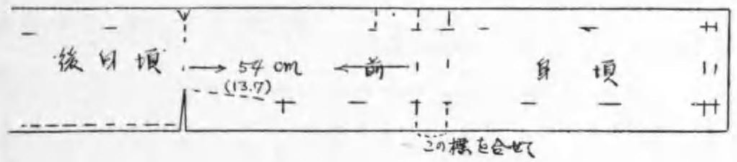
137cm（3尺6寸）とせば137cm＋1cm＋.3mm＋2cm＝140.3cm

身丈標入寸法，故に150cm－140.3cm＝9.7cm腰揚の寸法。



後の腰揚の位置は身丈の長短に依りて一定せざれども普通肩より50cm（1尺3寸2分）乃至52cm（1尺3寸7分）の所を普通とす前身頃の方は後より4cm（1寸）下げる。





衽　衽丈を計るには揚の部分を摘みそれより衽下の所より裾口までの寸法に揚のキセ3mm（1分）を減じたるもの衽丈なり。

身頃の方揚多き程衽布長く自然衽先きの縫込み多く始末困難なれば衿肩まで届く様の事あれば衽にも揚をして差支へなし其の位置は前身頃の位置より4cmを下げてなす。

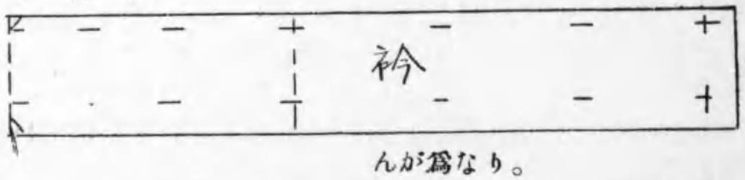
まづ掛衿の丈一ばいに標入して其の寸法より7mm(2分)短かく本衿に標入すこれは掛衿先に3mm(1分)餘のキセを附ける爲なり。このキセ少きは見苦し。

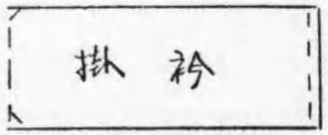
縫方　(袖は省く)

腰揚　縫目は細かく1mm(5厘)のキセにて下に折り附ける上物は隠し躾を入れされど常着等丸洗ひするものは隠し躾をなす。

後身頃揚は後幅標より一針先きまで縫ひあとは殘しおく習ひなれど之は縫揚より上の脇縫に於ける後縫込みを折返さんが爲なり。

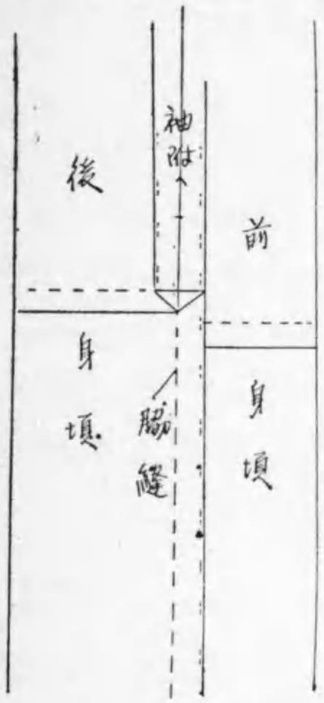
衿 標 入



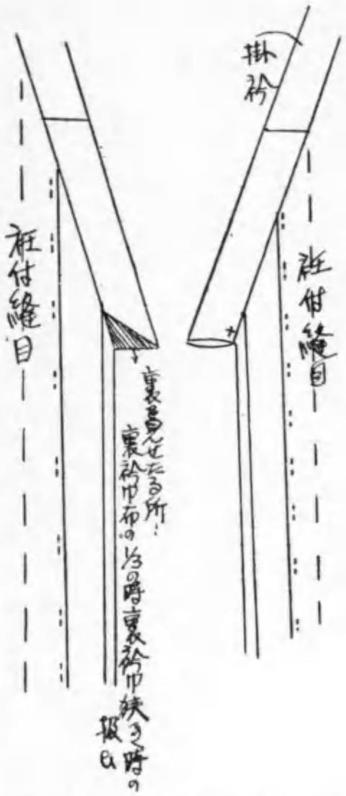


されば縫揚の深さと脇縫の縫込みと殆ど等しきか或は脇の縫込みに比して揚の方多き時は都合よけれども之に反して脇の縫込み多く縫揚の深さ少き時は折返し難し故

に此の場合縫揚は全部布の端まで縫ひ脇の折返しは女物と同様になす。



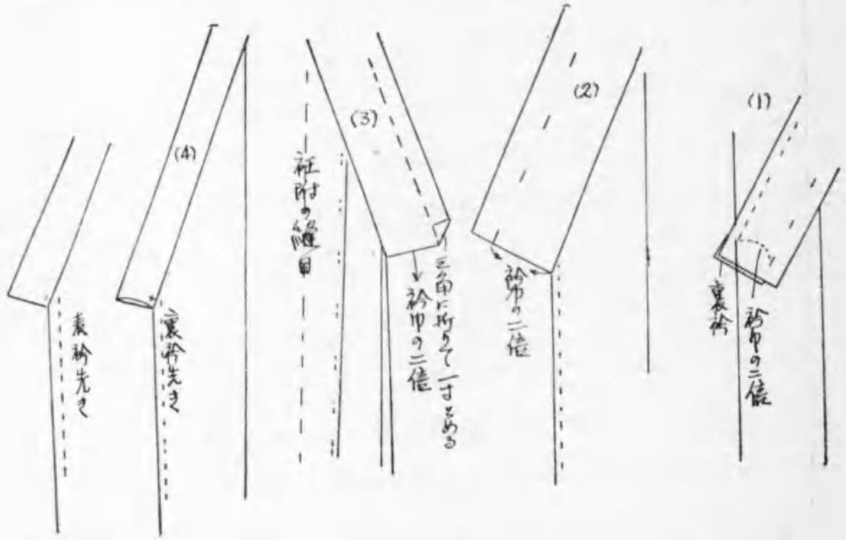
薄物或は上仕立の時は縫揚脇縫込みの如何にかかはらず布の端迄縫ひ女物の如く裾口まで折返す。縫揚の深さ相當にありて三角に開く時は揚より下は脇縫込み前後二枚共一緒に前身頃に耳絎になす。



衿　男物にも裏衿全部つけ衿をしつかり仕立てるのが本意なれど往々全部附けぬことあり兩衿先きに30cm(8寸)位の裏衿をつける。裏衿を附ける時は裏衿全部或は衿先きのみに附けるに係らず先づ褄下の始末をしてそれより表衿と裏衿にて身頃をはさみ三ツ縫になす。此の際最も注意を要する所は肩廻り衿先きの終りの所なり衿先きの衽の布縫代多きは衿先き縫ひ及び留めに差支へを生じ最も見苦し。

衿先きを縫ふ時は衿先きの終りより3mm (1分)先きを縫ひ衿幅の二倍の標より一針多く縫ふ其の間心持裏衿布を引き加減にして縫ふかくせざれば表に返したる時裏ゆるみて見苦し。

衿先き縫ひ終りたれば其の折は裏へ返し留めて裏縫目に綴ぢつけるかくして表に返し下圖の如く 1, 2, 3, 4 の順序に折る。



衿先きの留方

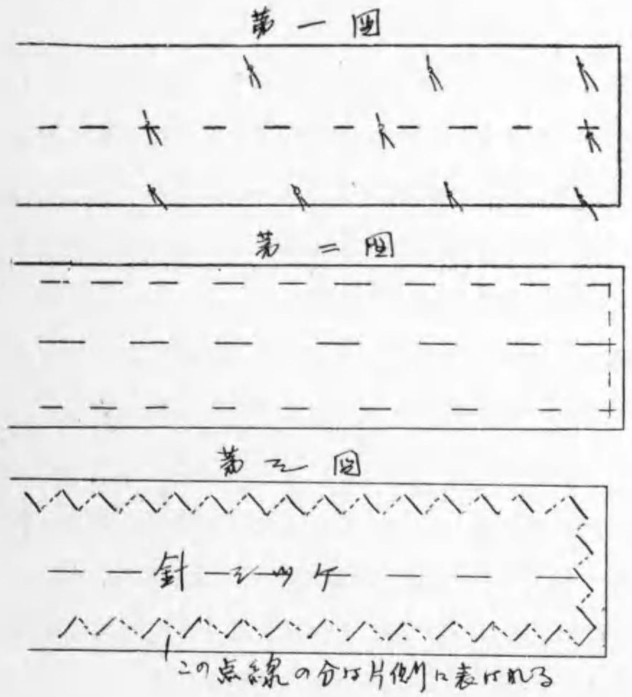
以上の如くして折り方落付かば衿先きの終りより 4cmの所より針を指し衿先き終りより 7mm 幅の絎ける山より3mm所の裏へ一先づ針を出し衿先きの方へ 3mm の針目を出し表衿先きへ針を通し逆に上に針目を出して裏の絎ける方へ針を通す而してさきの針目を十の字に絲を表はしてそれよりは衿幅の山より 1mm 内を裏衿のキセ山を抄ひて本絎に絎ける。

第五章　帶

第一節　各種帶仕立につきて

帶地は概して地質堅く耳のつれたるもの多し故に最初兩耳幅の中央との釣工合とを調べ鏝アイロン濕り布或は耳の切込み等を以て地直し整理すること肝要なり。

帶をたくみに仕上げるには表布の整理と共に芯布をも丁寧に吟味するの要ありもし經濟上古芯等を用ゆる時は充分よく皺をのばし兩耳は仕立上寸法の通り裁斷し兩端は表の布地に依りて一定しがたきも適宜の弛み餘裕を加へて裁斷す經濟上折返す事あれども仕立上り宜しからず。



鯨帶（一名腹合帶）

異なりたる二枚の布にて作り幅の兩方に縫目あるを云ふ丈は 385cm (1丈) を普通とすれど 300cm(6尺) の丈にする

こともあり幅は好みに依り一様ならず狹まきは270cm (7寸) より廣きは320cm(8寸5分)にもなす新らしく仕立つる時5mm程廣くなして仕立かへる毎に少しづつ狹める方（耳及び端のアタリ）をかくす譯なれば後の爲によろし。

長さの端は織出し又染出しの線あり繻子織りの如く幾線もある時は新らしき時とても全部線の有る丈出すは見苦し普通文字の所より２線位の所が端の角になる樣縫ふ方よろし。

２枚共よく地直しして垂れと手を間ちがわぬ樣各表を中に布の眞中に平躾をなす（第一回）次に兩方の耳に平躾第二圖の場合もあり又地質に依りて（第三圖）の樣に斜に躾を掛ける。

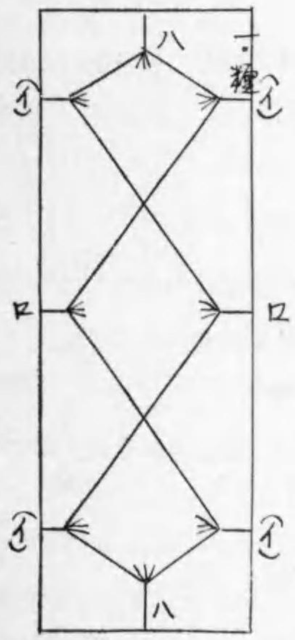
以上出來上りなば丈幅の標を入れ四方を小斜に縫ふ中央にて帶幅だけ殘し置く。

針目は地質に依りて一定せざれども地質厚きもの又は上仕立になさんとする時は一針進みては３mm 進みて半分返し成るべく針を直角に運ぶこと肝要なり。地質薄きものは4cm程進みては半針後へ返し掛針して縫ふ兩端の四角は特に注意を要す布の縫代重なる故仕上げの幅に不同を來し注意怠らば見苦し。

薄地の絞りの如きものはのび易き故に新モスの如きものを裏うちし兩耳兩端とも初めに躾を掛けそれより表布合せて躾をする。

全部縫ひ終りたらば折は地質の厚き方に折り同じ地質ならば色濃き方に折り横を折て縦を折り一針とめる其上に裁斷せる芯布を帶布カッチリに乘せ地質に依りて一定せざれども大抵帶側 40cm (1尺) に對して1cmの弛みをつけ加減をよく調べて縫目の1mm半の所に綴ぢ附ける。

終りて中央殘し置きたる所より表に引き返し兩端を引合せて芯をよく落付かせ端より5mmの所に平躾をかけてアイロンをかける。但し兩端には返し躾とす。



仕上げの疊み方は帶丈に依りて五ッ折又六ッ折普通(1丈)の時は七ッ折とす何れにしても垂れの端を上にして飾り綴ぢをする折方はまづ帶全體の丈を計り五ッ折りなれば五で割り正しく端より屏風疊みとなす六ッ折りの時も七ッ折りの時も同樣六等分又は七等分にして屏風疊みとなす飾り綴絲は御祝用などの時は必ず紅白二色の絹絲を用ふ。

飾綴の仕方は圖の如く(イ)は深さ 2cmにして端より 10cm (2寸5分) 入りたる所。(ロ) は疊みたる丈の中央にして深さは (イ) と同じく2cmなり。(ハ)兩方ともに帶幅の中央にして深さは4cm。

初め以上の寸法に依りて綴ぢ堅く絲をシッカリしめて結び絲の先きを少し長く殘しおくそれより飾り絲を長く途中不足なき樣通して圖の如く掛け初めの絲端と結び置く。

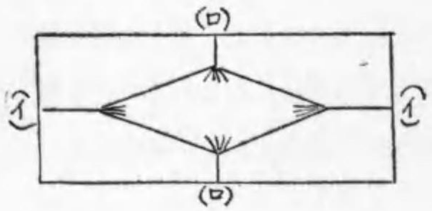
半　幅　帶

並幅物を二ッに折りて三方を縫ひたる帶なり長さは使用者によりて一定せざれども300cm(7尺9寸)位より340cm(9尺)位とす主として子供用なれども又大人の羽織下に用ゆること多し。

まづ地直しをなし表を内に二ッに折り耳に鏡をかける次に輪の方より計して幅の標を入れ鯨帶と同樣に縫ひ中央30cm殘しおき芯の幅仕立上幅に裁斷したるをやはり鯨おびと等しく適宜に弛み加減して綴附表へ返し其他皆鯨帶と同樣。

帶は如何なる帶にても縫目に折り鏝を掛ける事なし皆平鏝のみにて掛針して爪にて折を附す。

仕立上飾綴の仕方



上圖の如く

(イ)は帶幅の中央深さは4cm

(ロ)は丈を疊みたる中央深さは2cm

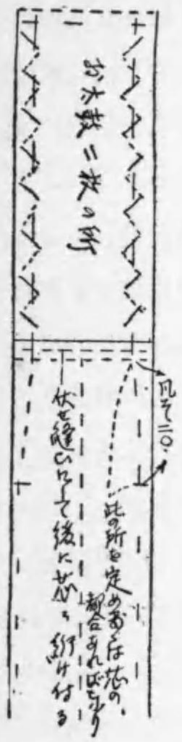
(イ)(ロ)之より絲を通すこと鯨帶と同樣

第二節 名古屋帶

胴體に卷き附くる所は半幅にして後にておたいこに結ぶ所は普通鯨帶の如く作りたるを云ふ手の先30cm程半幅にせず幅廣くすることもあり。

普通の帶地一本にては丈少し不足なり廣く垂れの先に似寄りの切又他の切を接いでもよし大抵丈けは仕立上り350cm(8尺5寸)なれば殘りは皆垂の裏へ廻す故おたいこの分は115cm(3尺)内外となる。

長さに就ては用ゆる人に依りて一樣ならず年若き人は手を長く取るを以て手の方長きを要し又肥滿せる人も長きを要す。やせた人の長きに過ぎるは始末に困る故適確なる長さは用ゆる本人が都合よき



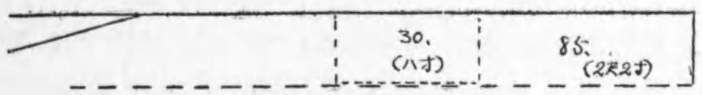
樣他の帶にて締め試みて定む。半幅の方短か過ぎて廣き方長きは締める點より何等差支へなきも之に反して半幅の方長過ぎ幅廣き方短過ぎるは締められずその邊特に注意を要す。

お太鼓の分二重になすときは一重のそれよりは35cm(9寸)餘長くすなほ手の方も20cm(5寸)程半幅にせず廣くすることあり此の際もやはり廣くする丈の倍丈布長く要す。

仕立方　標入方

幅廣き方普通寸法310cm(8寸2分)として半幅の方其の半分となる其の半分の方少し幅狹く感じ出來る丈廣くなさんとする時圖の如く二重の所お太鼓の終りの所より半幅の方凡20cm(5寸)の所標を入れそれまで斜にそれよりは手の方へ眞直く布幅一ばいの半幅となすことあり。

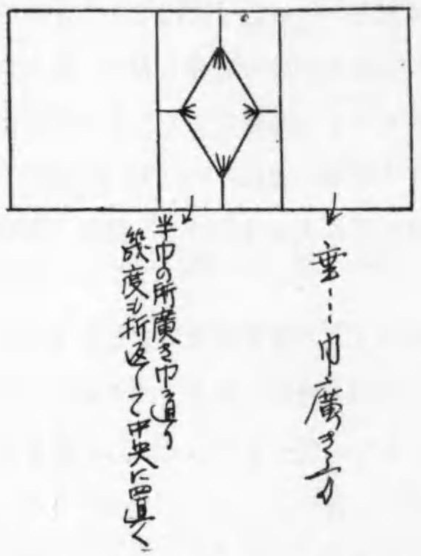
ポケットは附置く方使用上便利なり其の位置は使用する人々に依りて一定せざれども大抵第一に卷く胴の眞前に來る樣にするがよし大抵手の方端より850cm(2尺2寸)内外の所より30cm(8寸)を適當とすポケット切の幅は帶幅より一分控へ置く。



縫　　方

先の圖の如く鏡終らば折返したる所お太鼓の所を兩方とも鯨帶と

同樣に縫ふ終りて半幅の方にうつりポケツあらば縫合せ其の折はポケツの方へ返すそれより半幅の部分を全部縫合す。縫目の折は廣い所はお太鼓の裏の方へ兩方とも返し用意せる芯を綴附ける。芯を綴附くるには一番垂れの端の所に芯布を凡そ 8cm (2寸) 折戻し表布の縫目を折返しの芯と續ける芯とにて挾み綴附けるお太鼓の處終りたれば半幅の所は縫目を中に兩方芯の幅にて挾み綴附けポケツの所に至らば向ふ手前と別に芯を綴附けて終る最後に半幅の所 30cm(約1尺)毎に輪綴をして垂れの二重の終りの處より手をさし入れ垂れの端の兩角を摘みて引き出す次に半幅の方其處より漸次引出して表に返す。



よく引き合ひて芯を落付かせ躾して今引返したる垂れの終りの所は芯に細かく絎附ける終らば半幅の所より廣幅になりたる所とポケツの終りとに閂留をなす。

丁寧にアイロンを掛け圖の如き疊み方をなす。

第三節　丸　帶

儀式用丸帶は普通鯨帶より丈幅ともに長くして廣し丈は 380cm (1丈) 以上415cm (1丈1尺) あり幅は鯨帶より2cm乃至3cm廣く仕立てる。概して地質堅き故に多くは耳を切るか裏より布を引張つて強き鏝又はアイロンにて幾回も地直しをなす。布の兩耳縫ふべき

所少し弛く延びた位で丁度よろし。

內表にして幅を二ッに折り布のねぢれぬ樣に注意して躾をかける次に仕立上寸法に 2mm のキセを加へ縫標を入れ半返しに縫ひて折は片返しになす。(半返しに縫ひて縫目を開き仕立てる方法もあれど今は餘り用ひず。)

地質厚き時は幅丈ともに兩端角にて少し擴げるをよしとすキセは横は 5mm縱は 2mm として角はシッカリ留める中央にておび幅だけ殘し明けて置く。

芯は鯨おびの時と同樣仕立上幅に兩耳とも裁斷し丈も弛みを程よく加へて丈夫なる絲を以て丁寧に綴附ける輪の方は表の共色絲にて表に針目目立たぬ樣に輪綴ぢをなし此の絲は永久に殘し置く。

帶地薄物（紗絽の如きもの）にして表より透き見ゆるものは芯にも注意し2枚芯を用ひ芯と芯とで縫代を挾みて綴ぢつけることあり全部終らば四角を內にさし込み置きて殘し明けある所より手をさし入れ引き出して表に返す。兩端を引き合せて芯を落付かせ指先にてキセをよくし 5mm の所へ躾を掛け返したる所は極めて小針に縫ひたると同じ位の針目にてキセのあると同じ內側を絎け全體にアイロンをかけ七ッに折り疊み飾り綴ぢをなす。(飾り綴ぢの仕方は鯨おびと同樣)

第四節　男　帶

丈380cm(1丈)乃至390cm幅10cm內外

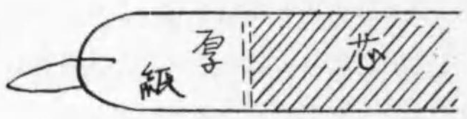
概して地質厚くかつ堅きを以て女物と同樣兩耳を延ばし丁寧に地直しをなす。

表を内に幅二ッに折り縫代1cmとして標す。芯の幅は標入帶幅より2mm減じたるもの。丈は表丈より少し長くする。

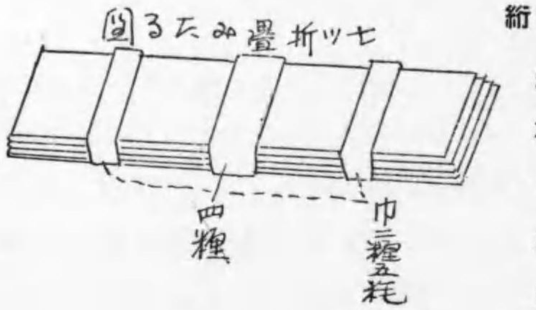
仕立方に縫仕立と絎仕立とあり兩端何れも縫ふ方きれいに仕上りてよろし。

縫　仕　立

先づ表を中に眞中より二ッ折り布のねぢれぬ樣に注意して假綴ぢをなし出來上りの帶幅2mm廣く輪の方より計りて縦の標を入れ次に布目の歪まぬ樣に注意して兩端の標を附ける。



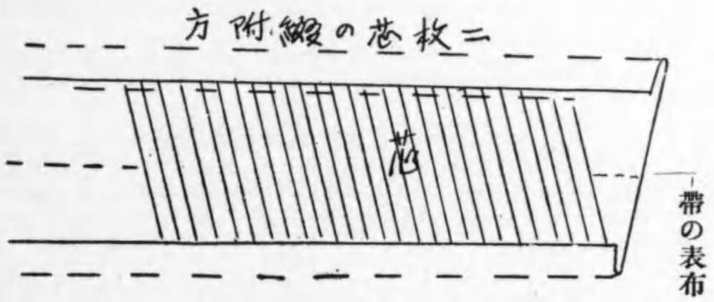
次に兩端を10cm殘して他は一針拔きに縫ひて2cmのキセをかけ表に返してキセを正し芯の端に厚紙を圖の如く縫ひつけ（厚紙の幅は正しく芯の幅を揃へ）其厚紙に帶の丈の紐をつけ之を先づ帶の中に通して芯を中に送り全部入りなば兩方より引き合ひて芯を落付かせ10cm殘し置きたる所より裏を出して横を縫ひ角をとめ芯を綴ぢつけて表に返しあけたる所は極めて小針に絎ける仕上げのアイロンをかけ七ッに疊み中央を4cmの幅の強き紙にて兩端も10cm入りたる所を2.5cmの幅の紙にて封をなす。



絎　仕　立

縫仕立の時と同樣まづ布の伸縮皺折目等を正し兩耳は鏝にて十分伸ばしおく。次に表を中にして二ッに折り仕立

上の帶幅に縦の絎標を入れ其の標の通り裏へ折りをつけ鏝をかけて折目を正しくする。



芯の拵しらへ方　2枚芯の場合上圖の如く一方の幅の折り山に芯が屆く樣にして一方の芯は表布の絎代だけ控へて斷つまづ表布に芯布をのせ少し芯布をまるめ（女帶の時と同樣）表布の共色にて極く細かく目立たぬ位の針目を表に出して綴附ける兩端は全部縦も凡そ5cmばかり小針に半返しに縫ひ其の縫目に芯を綴附けて表に返し角を整へ動かぬ樣に鏈をかけ極く小針に絎ける終らば鏈を去りアイロンをかけて仕上をなす。

第六章　袷　　衣

第一節　小裁及び中裁物袷衣

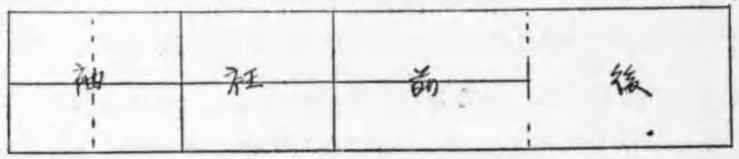
仕立上寸法は單衣と同じ袖口の出袵2mm裾出袵4mm内外表裁方も單衣と同じ裏は通り裏あり又胴裏と裾廻しを附けることあり小裁の時に限り裾廻しに縦布を用ゆる場合と横布を用ゆる場合とあり可成は縦布をよしとす。

一ッ身衿通し裏の裁方

袖丈は表と同じ身丈及衽丈は表の丈より出枇の2倍長くす表の衿幅狭く裏衿を要する時は袖幅より取りたる布の幅を二分して用ゆ。

袖丈×4＋表の丈より1cm長き身丈×3－衽下＝總用布

大名袖とて表布多く返りたる時は裏袖は半幅にてよきことあり。

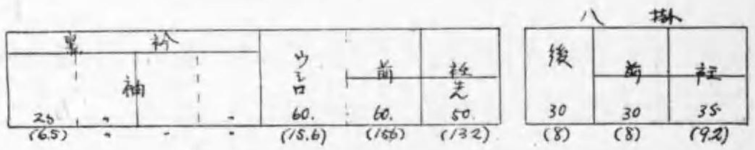


袖丈×2＋身丈×3－衽下り＝用布

此の際は裏衿は別切を用ふ。

洗濯をして縫替へをする場合裾口汚れ見苦しくなり其の時の爲を思ひて裏身丈及び衽丈を表身丈に比し出枇の2倍以上長くすることあり此の時は肩にて縫上げをなす。

一ッ身衿衣裾廻附裏の裁ち方



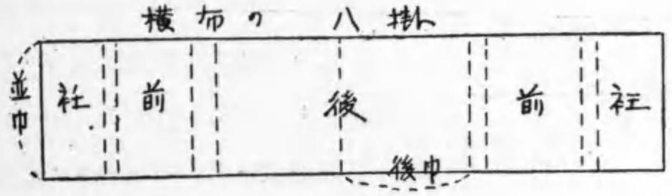
表身丈－八掛の丈＋出枇及び胴接縫代＝胴裏丈270cm
（7 cm）

表裁切身丈90cm袖丈25cm と假定せば其の八掛の丈は幾何であるか。

後布丈×2＋衽布丈＝95cm八掛布用布
（2尺5寸2分）

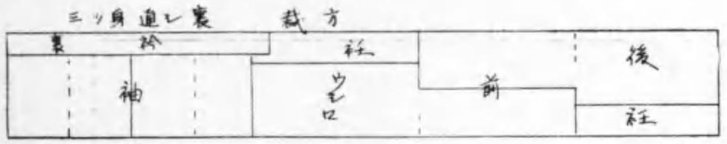
一ッ身又三ッ身四ッ身に限り裾廻し横布を以てなすことあり。

此の場合に於ける用布の積方



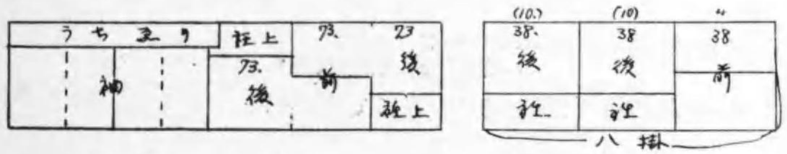
（後幅＋前幅＋衽幅＋20cm）×2＝用布
└脇衽及び裄下の縫代

身丈は表身丈に出枇の2倍を加へたるもの



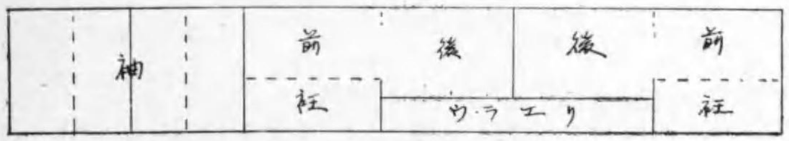
積方　袖丈×4＋身丈×3＝用布

三ッ身衿　裾廻附裏の裁方（表身丈105cmと假定す）

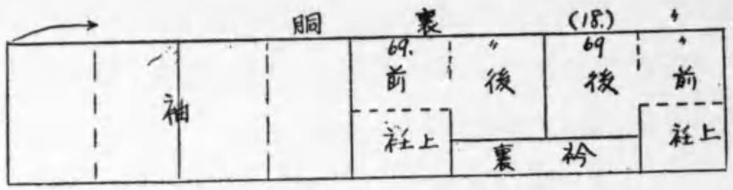


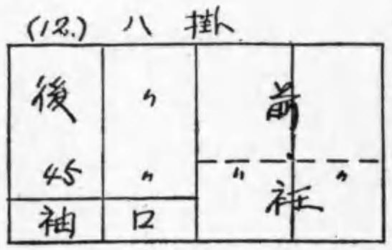
表身丈－裾廻丈＋6cm＝胴裏丈　105－38＋6cm＝73cm

四ッ身衿　通し裏裁方　表身丈より出枇の2倍長くする。



（袖丈＋身丈）×4＝用布



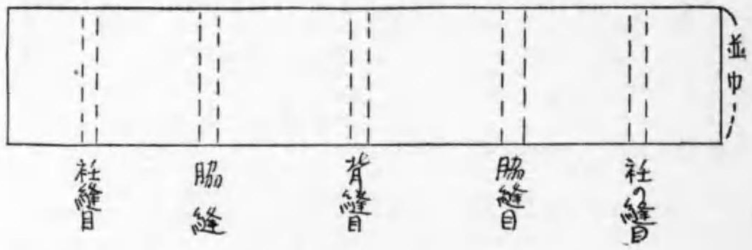


四ッ身袷衣　裾廻附裁方　表身丈108cm (2尺8寸5分)と假定す。

表身丈－裾廻丈＋6cm＝胴裏丈

108cm－45＋6＝69cm

四ッ身の八掛に横布を用ゆること多し。



(後幅＋前幅＋衽幅＋8cm)×2＝用布
└—背縫ひ脇縫及衽縫代裾下の縫代等

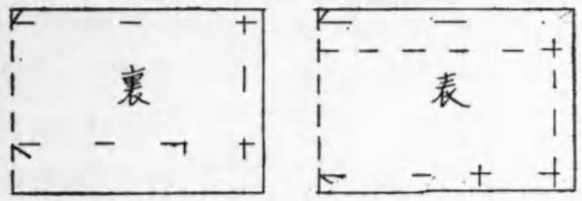
標　入　(大名袖)表布を袖口の方にて裏に返したるもの。

仕立上寸法

1. 袖　　丈　21cm(5寸5分)
2. 袖　　幅　20cm(5寸3分)
3. 袖　　附　15cm(4寸)
4. 表の布袖口にて返る分3.4cm(9分)
5. 裏袖幅　17.5cm(4寸6分)

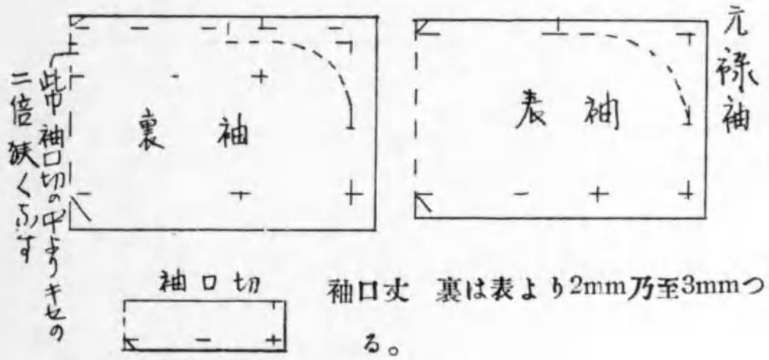
仕立上袖幅＋振口のキセ＝標入袖幅

標入袖幅－表の返り分＋袖口縫合のキセ＝裏袖幅



縫　方

1. 表袖口の天標と裏袖口の天標を合せ袖下の方も標を合せて縫ふ其の折は裏に返す。
2. 振口表裏合せて縫ふ其の折は裏へ返す。
3. 袖下振りの縫目を合せ袖口下の縫目を合せ縫ひ終りて綴ぢを入れる。



袖口丈　裏は表より2mm乃至3mmつめる。

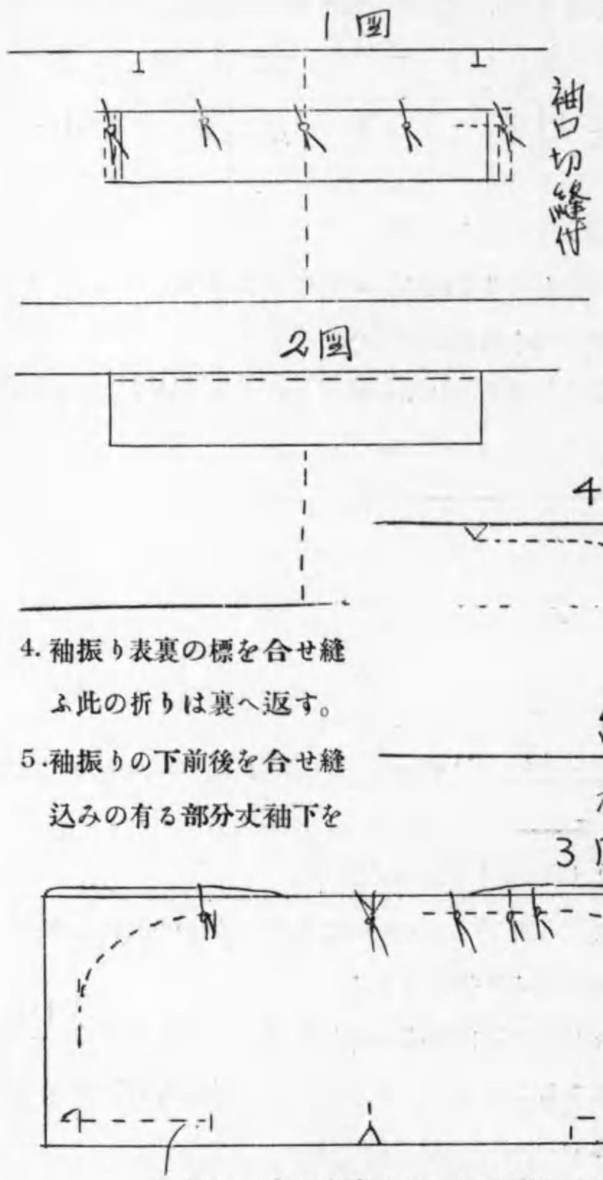
袖　丈　裏は表より2mm乃至3mmめ詰る。

袖裏幅は八ッ口より袖下へは表袖幅より2mmひかへ袖口より上は袖口の方にて袖口枇の2倍廣くする。

袖口布縫附の時袖口切端は廻し掛けにするか又地厚の時は折らず其のまま千鳥にておさへてもよし常着用ならば廻し掛けの代り折り伏せ縫をする。

縫　方　まづ裏袖に袖口切を掛ける。(1圖)

2. 袖口切の端と袖裏との端を揃へて並縫する。(2圖)



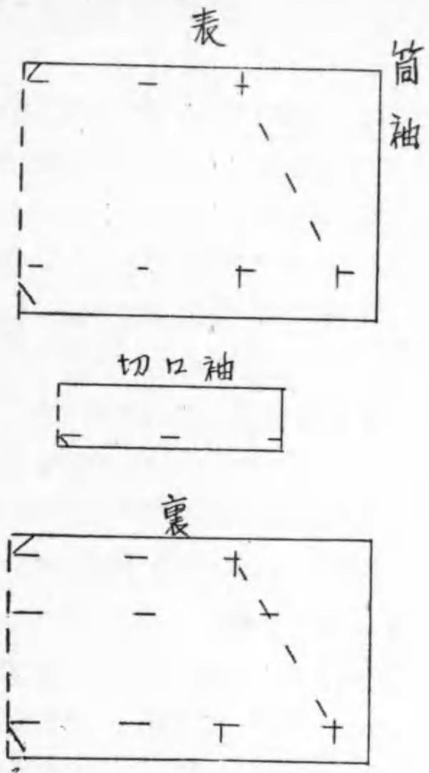
3. 表袖の袖口天標と裏袖口の天標を合せ待針し袖口明きより裏袖は4圖の如く表裏合せて縫ふ其の折りは表に返す。

4. 袖振り表裏の標を合せ縫ふ此の折りは裏へ返す。

5. 袖振りの下前後を合せ縫込みの有る部分丈袖下を縫ふ。

袖振り一方の表裏にて一の表裏をはさみ2本の絲を以て留めをなす。其の1本の絲を切りて1本はとして續けて其のまま袖下を縫ふ。

6. 次に袖口表裏縫合せたる所一まづ表に返し袖口の形を正す。



仕　立　方

留切，要所留め所には留切を入るるをよしとす地薄くして織目の密な出切ありし時1cm四角程に切りて用意しおけば使用の場合便利なり。

筒　　袖

1. 袖口を縫ひ合せ（表をゆるく）2mmのキセにて表に折りをつける。

袖口明き裏は表より3mm詰める。

袖幅　袖口上は表より出袵の2倍廣く袖口下は表より3mm詰める。

2. 袖の天標を中央に左右にひろげ振り口を左右とも縫ふ此の折りは裏に返す。

3. 出袵を定め左右の袖各々注意して袖口留めをなし振下の縫目を前後よく合せ振口の縫ひ込み丈別々に縫其處まで袖口留めより四ッ縫ひになす。

袖　口　留

袂袖，元祿袖は同一方法なりまづ留切を通

し表前袖，袖口縫合せ端縫絲より2mm下（殆どキセの山）より針を通す。

次に後袖の表裏を極めて淺くキセ山に通す。

次は前裏袖なり袖口縫合せ縫絲端の 1mm 深き所に針を通して小針に後裏後表を通しさきの針の下に返り留切を通して絲を締めるスルスルと絲動かばそこにて極めて堅く結ぶ。

袖口留より下縫ひ留たる絲１本を 4cm程長さに切り他の１本にて縫ふ(絹絲にて留めたる時は結び目がゆるむことあり注意を要す)

袖口下は留め際より四ッ縫ひになす中間にはさまれたる後袖の折戻しを長くせざれば出來上りに袖口いがみ見苦しい故に此の際一方掛針を用ひ布を引張りて折戻しの形を正しくし針目も正しく一針拔き（向ふに拔き手前に拔き）にして縫ふ。

袖　附　留

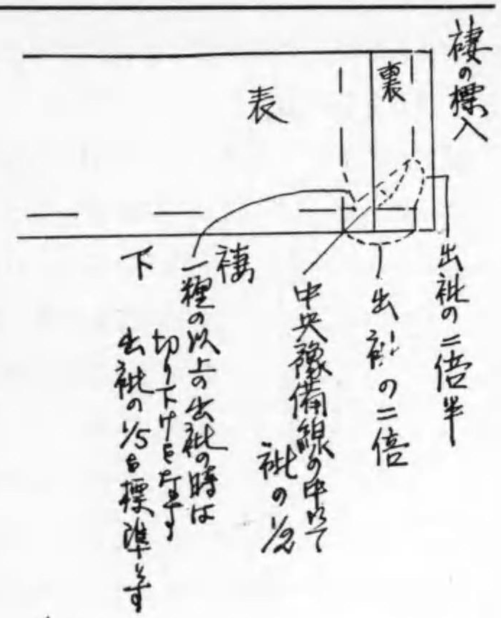
袖附の折りは表は袖に裏は身頃に返す。袖の天標と身頃の天標とを合せ待針して袖附左の方を先きに留める此の際身頃袖附明きと袖の袖附明きの調節を計り双方正しくまづ留切を通し表袖振口のキセ山近き所に通し次は表身頃のみ身八ッ口のキセ山を少し抄ひ次に裏袖振りキセ山を極く少し抄ひ最後に身頃八ッ口のキセ山を縱に小針に抄ひ次に先の順序を逆に表袖に歸り留切を通して結ぶ次に縫ひ始めの方右の留めも同樣にして絲を結び１本の絲は4cm程長く殘して切り１本殘した絲にて縫ふ。

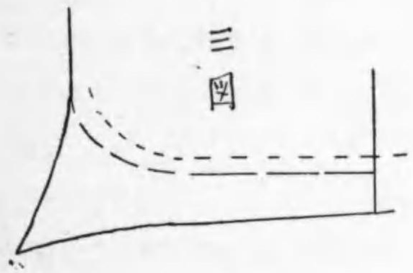
袖附は肩山にて 5mm 位の縫代に折戻し縫ひ始め縫ひ終りは身頃の縫代極く淺く特に針目細かく丁寧に縫ふキセは 1mm とす。

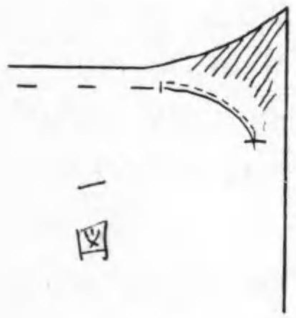
褄　縫　褄形は細き針を以て絹絲または眞綿を引きのばして褄形の 1mm 外を下縫ひをなす太き針を以て下縫ひをなさば針穴大きく

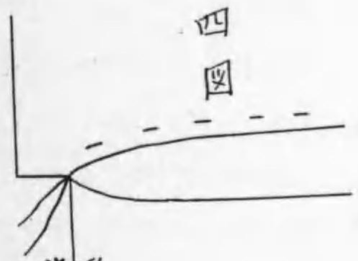
爲に縫絲ズルズル滑りて布を縮めるに都合惡し。

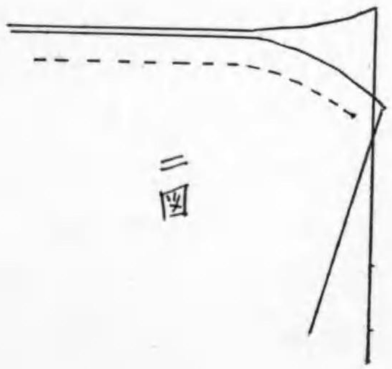
次に表の衽幅に比して褄形の丸き所卽ち布の斜になりたる所に於て布を斜に引き息を吹きかけて下縫絲を縮めて表の褄先き幅と同寸に縮める此の際鏝を使ふはよろしからず





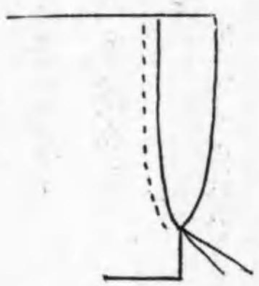






次に表裏縫合す始め終りは一針丈け返し針す表へ3mmのキセにて折りを返す。)

第三圖の如く表裏縫合せの縫目より又3mmの所にかくし躾を掛ける此の際地質に依り（縮緬類ならば）同じ所を絹躾絲を以て飾り縫ひをなす。かくて躾の時も飾縫の時も絲は4cm程長く殘し置き褄下を縫ひ終りて形を正し飾絲も躾の絲も引けぬ程度に褄先にて打止めをなす。



初めに打留をなす時は褄先褄下を縫ふ時差支へを生ずる故よろしからず。

褄先きは褄下の縫代の標よりも2mm淺き所を縫ひ褄先き丈折は表に返し其他皆裏に返して表に返す先きに褄をからげたる絲を引きて褄を整へる。

裾に含み綿又は芯布を入れることあり。

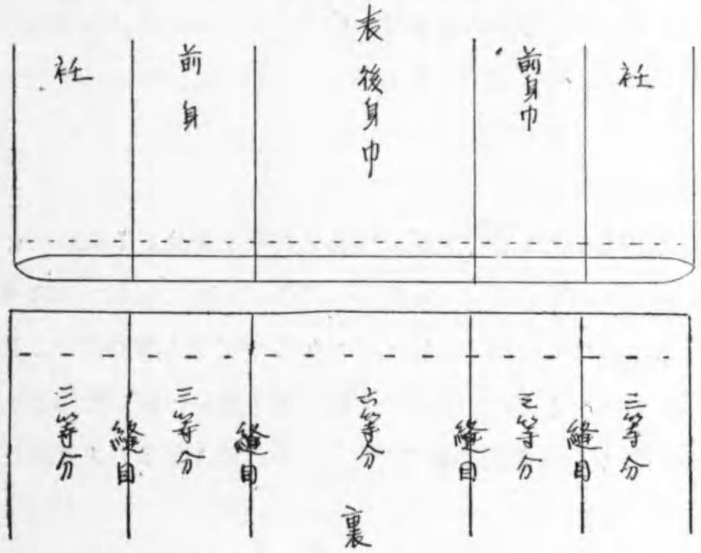
袷衣にて裾の出枇4mm位なりとも布地質に依り餘り薄くして見苦しきことあり故に薄く裾綿又芯を入れること多し。

綿は薄手の綿1枚を4cm位に手にてちぎり（決して鋏で切るべからず）裾の縫合せ終り3mmのキセにて表より躾かけ終りたらば先きに細かくちぎりたる綿を枇の山にて綿が七三に折れる樣ゆるく置き所々待針して表に返しよく枇に綿を行屆かせ躾をかける。

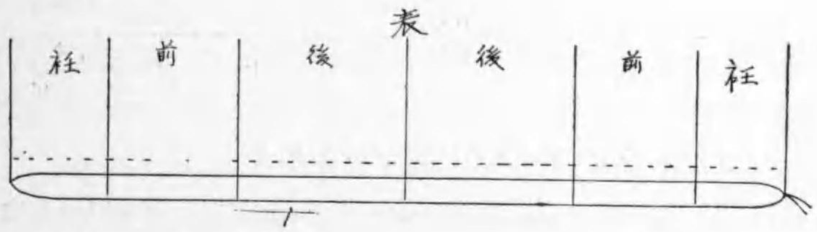
なほ當校にては好みに依り卷き綿を使用することあり仕方は綿を幅3cm程にちぎり薄く延ばして下に置き片方よりクルクル卷き不同なき樣掌にてよりて作る裾縫合枇の上にのせ綿をややゆるめに所々待針し表に返して躾をかける。

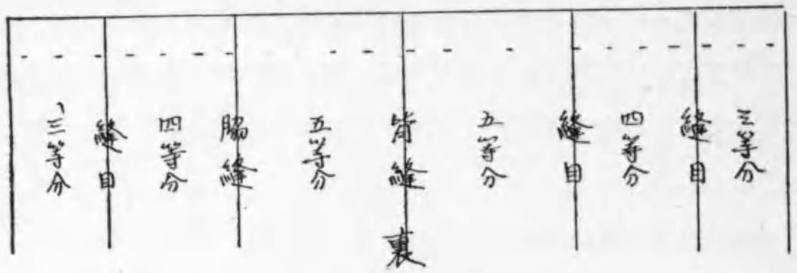
又綿の代りに芯布を使ふ場合は芯布は可成途中繼ぎ繼ぎのないもの軟き布にて幅3cm程を使ふやはり綿の時と同樣芯布の幅枇の山にて七三に折れる加減にて芯布をややゆるめて待針し表にて躾掛ける。

裾綴仕立上最後に裾綴ぢを入れる仕方は左圖の通り表は針目極く細かく裏針目の倍表に出す裏もごく小さい針目にて衽幅前幅は三等分卽ち3針後幅にては六等分卽ち5針の針目を出す。



四ツ身袷衣は留め等一ッ身と同一なれば省く只裾綴ぢの異る點のみを左に。





第二節 本身の袷衣

仕立上は男女とも單衣と同じ。

袖口出枇　2mm或はそれ以内

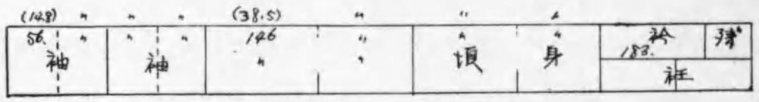
裾の出枇　4mm内外

裁方表は單衣に同じ。

裏裁方男物は通し裏を普通とす裏は共衿を要せざる故に衽を半幅になし衿は入用な丈の衿丈の半分に天接ぎの縫代を加へたる丈を並幅にて取り幅二ッに切りて中央にて接ぎて用ゆる又は要する衿丈の$\frac{1}{3}$に縫代加へたるものを並幅にて取り其を幅三ッ割して用ふ用布總丈の都合により表と同様裁ち衿丈の餘分は殘り切としても差支へなし。

(1) 並幅1060cm(2丈8尺)を以て男袷裏の裁方

表と同様にして衿にて餘すもの

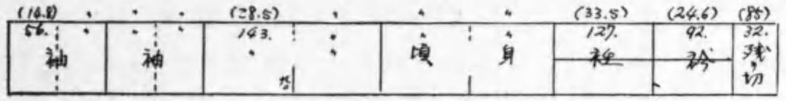


(總用布－袖丈×4＋衽下×2)÷6＝身丈

(1060－56×4＋19cm×2)÷6＝146cm身丈

(2) 同並幅1060cm(2丈8尺)を以て男袷裏の裁方

身丈を定め衿は半幅にて天接をす。



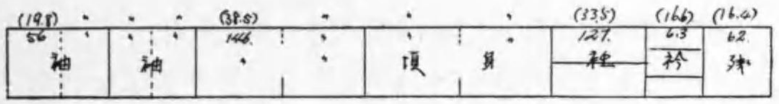
總丈－(袖丈×4＋身丈×5－衽下＋衿の分)＝殘り切

1060cm－(56×4＋146×5－19＋98cm)＝32cm

總丈之より多き時は殘り切多くなる。

(3) 同並幅1060cm(2丈8尺)を以て男袷衣裏の裁方

身丈を定め衿を三ッ割幅となす。



1060cm－(56×4＋146×5－19＋63cm)＝62cm殘り切

183÷3＋2＝63cm要する衿丈
(衿丈)　(接縫代)

女物裾廻し

女物袷衣及び綿入は通し裏になさずして胴裏裾廻しとを別布にてなすを普通とす常着類には金巾新モス等にて通し裏にすることあれど之は例外とす。

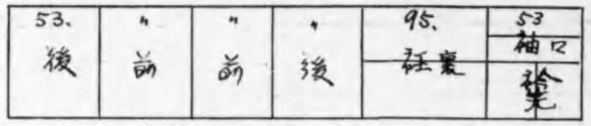
裾廻布の地質に依つて袖口布は別布を以てなすことあれど多くは裾廻しの布を以て袖口切も取る衿を廣衿に仕立つる時は衿先切を要し又狹衿にても衿先き丈に裏衿をつけ廣衿の如く仕立他は狹衿になす故に上物の時可成衿先き切を要す。

並幅360cm(9尺5寸)を以て裾廻し裁方

裾の高さ×4＋衽裏の高さ＋袖口切＝用布

53×4+95+53cm=360cm

{總丈−(袖口切+衽裏丈)}÷4=裾廻丈



並幅 705cm(1丈8尺6寸) を以て袷廻2 枚の裁方

裾丈×8+衽裏×2+袖口切+衿先×2=用布

53×8+95×2+53 +19cm×2=705cm

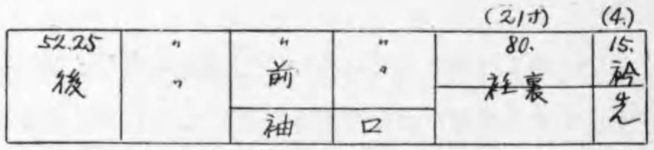
{總丈−(衽裏×2+袖口切+衿先×2(}÷8裾=丈

{750cm−(95×2+53+19cm×2)}÷8=53cm

並幅304cm(8尺)を以て用布短かき時

{用布−(衽裏+衿先)}÷4=裾廻丈

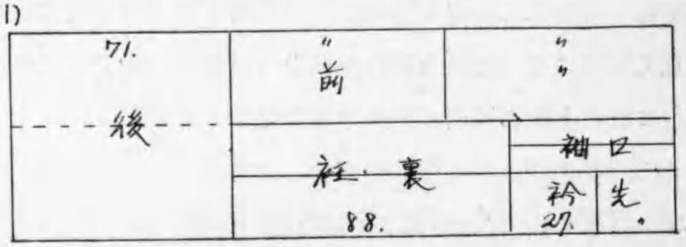
{304cm−(80+15cm)}÷4=522.5cm



前裾より袖口切を取る時は裾丈52cmより短かからんをよしとす。

二幅物213cm(5尺6寸)を以て裾廻し裁方

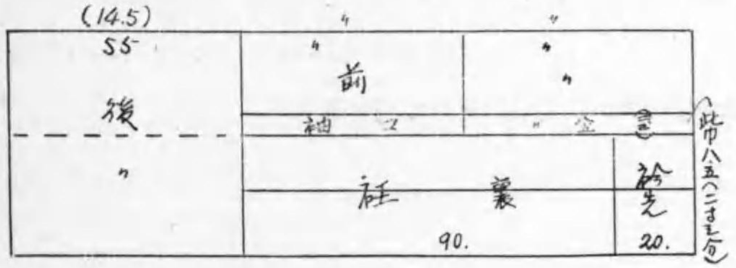
(1)



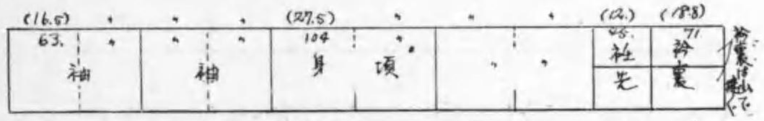
(衽裏+袖口切)×$\frac{3}{2}$=用布　(88+54)×$\frac{3}{2}$=213cm

(2) 二幅物165cm(4尺3寸5分)を以て裾廻し裁方

裾廻丈×3=用布56cm×3=165cm



並幅の布を以て女服胴裏の裁方



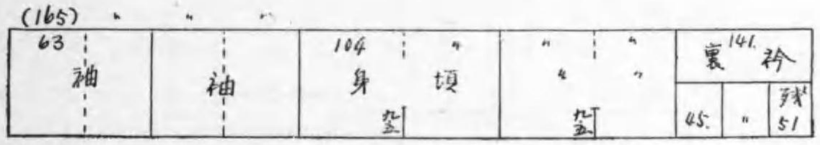
袖丈は表の袖丈に等し表身丈−裾廻丈+出袱及胴接縫代=胴裏丈

表衽丈−衽裏丈+11cm=衽先　129−95+11cm=45cm

(袖丈+胴裏丈)×4+衽先+裏衿=用布

(63+104cm)×4+45+71cm=784cm

並幅809cm(2丈1尺3寸)を以て胴裏の裁方　裏衿接ぎなし

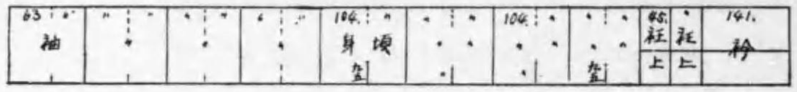


(袖丈+胴裏丈)×4+裏衿丈=用布

表衿丈−衿先×2+11cm=裏衿丈

(63+104cm)×4+141cm=809cm　182−26×2+11cm=141cm

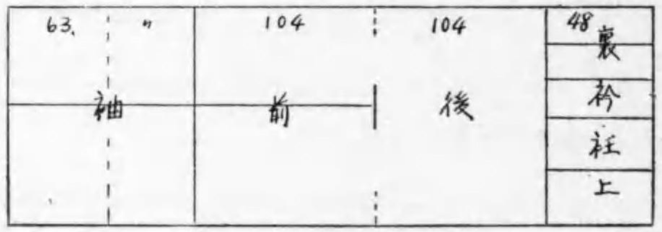
並幅1567cm(4丈1尺4寸)を以て胴裏2 枚の裁方



(袖丈＋胴裏丈)×8＋衽上＋裏衿丈＝用布

(63＋10cm)4×8＋45×2＋141cm＝1567cm

二幅物382cm(1丈1寸)を以て胴裏裁方



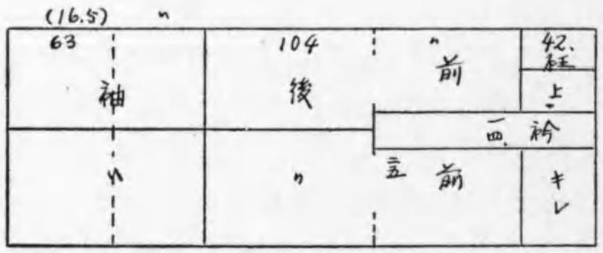
要する裏衿丈を三分して幾何か縫代を加へ裏衿丈とす。

要する裏衿丈÷3＝裏衿切

(袖丈＋胴裏丈)×2＋裏衿の分＝用布

(63＋104cm)×2＋40cm＝328cm

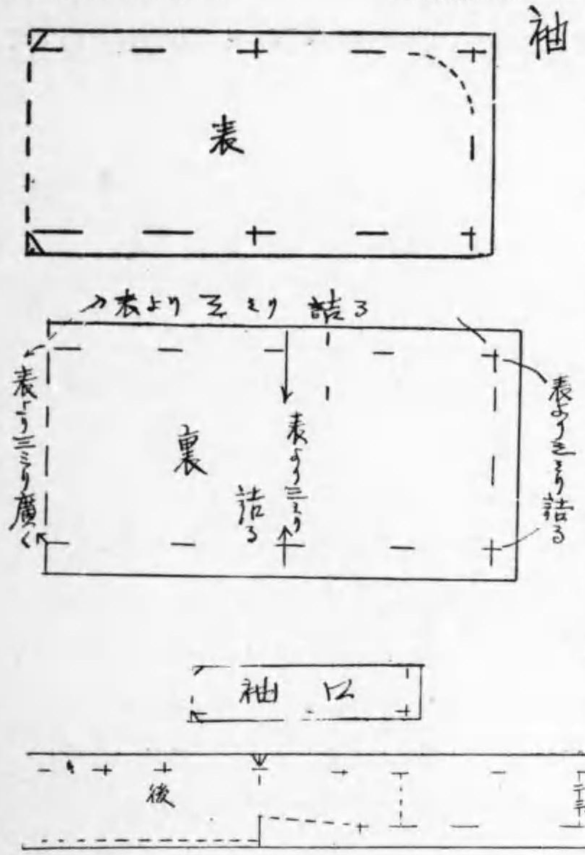
二幅物376cm(1丈)を以て



(袖丈＋胴裏丈)×2＋衽上＝用布

(63＋104cm)×2＋42cm＝376cm

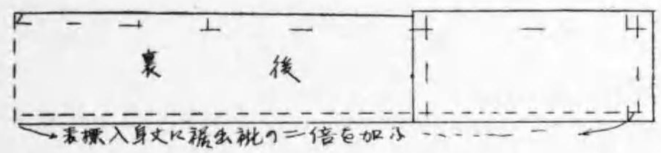
本身女物袷衣標入



普通袖口明きにて表を2mm多く故に縫ひ合せの時表をゆるくなす。

袖丈も3mm裏は詰るなれど地質によりては一定せず即ち縮緬類の如き表布に裏は紅絹白絹の如き場合は表布ダル性質なれど裏の方を3mm或は地質に依りては5mmも長くする事あり

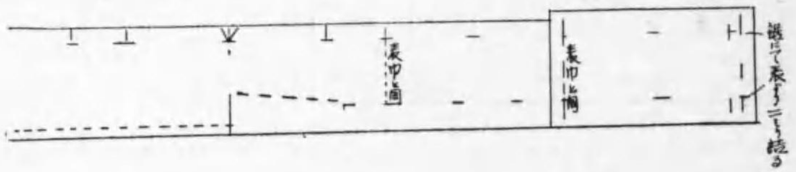
前幅衽附標入れた後身八ッ口幅と裾より上へ裾廻り丈の高さの所計り記憶におく。



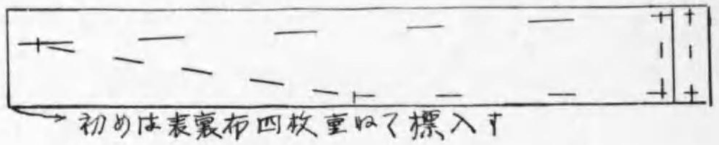
胴裏布幅と裾廻布幅等しからざる時は脊縫の手前にて揃へ脇の方にて差をつけおく。

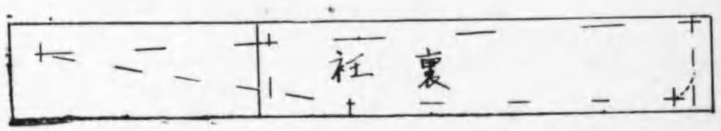
衿肩明は表と同じ　胴接ぎのキセ代は見積らず。

後　幅　裾のみ合縫をなす故に2mm表より詰める（布地質に依りては一定せず）



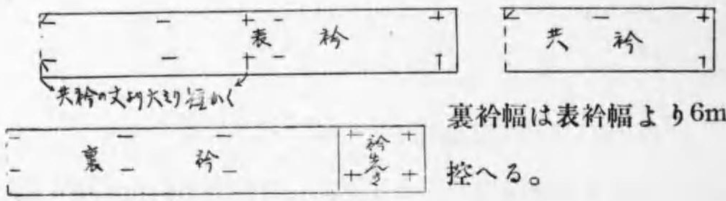
身頃及び衽も胴接ぎはキセの見積りなし故に縫目を極く細かにしてキセなしに折りは胴裏に返す。





衽胴接ぎをなす時標と標とを合せて縫ふ。

表裏共重ねて標入れる。

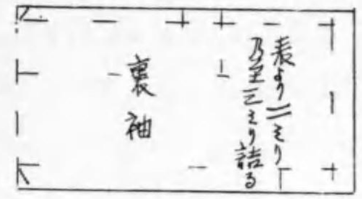


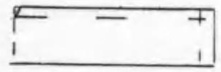
裏衿幅は表衿幅より6mm控へる。

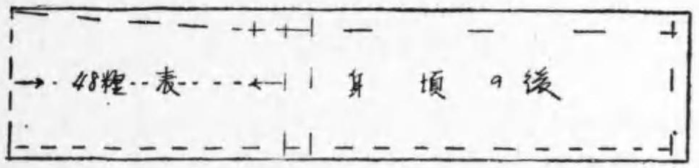
男物標入

袖口明及丈女物と同じ

袖口出枇の二倍廣く





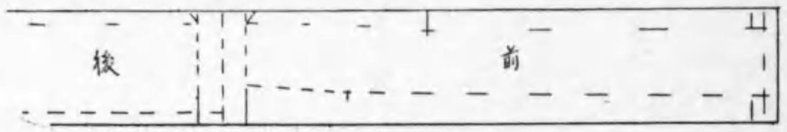


仕立上身丈寸法＋三ッ衿縫代＋キセ代×２＋裾合の折キセ＝標入身丈寸法　假に140cm仕立上寸法とせば140＋1.2＋.3＋.3mm＝141.8cm　身丈－バイの標附－標入身丈＝揚の分　表身頃腰揚の位置は肩山より後は48cm乃至52cmまでを普通とし前は後の揚より4cm下げる。

表標入身丈に裾出枇の2倍を加へ揚のキセ2mmを減じたるもの

を裏身丈一ばいの標より上に計りて標入れする。

裏身丈長き時は表の如く腰にて揚げることあれどよろしからず圖の如く肩にて縫ふ方がよろし。

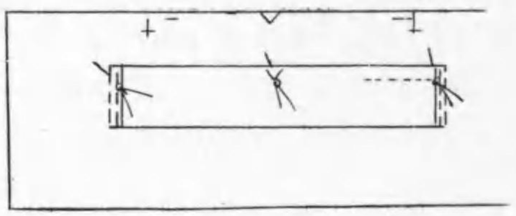


衽及び衿は省く。

女物袷衣仕立方

袖口布縫

袖口布の下端は常着は伏せ縫になし上仕立物地薄きものは廻し縫をなす。又地厚きものは端折らずして其のまま縫ひ附けて後に千鳥掛けをなす。袖口表裏縫合せ方は元禄袖と同様なれば省く。



袖口下　留め際より四ッ縫になす。此の際後袖口下縫代折戻し方に注意して袖口をスラリと仕立ざるべからず。

袖振り縫

袖口表裏合せ縫ひ終りたらば前後とも表裏振りを合せて袖附まで縫ふ此の折りは裏へ返す。次に袖下を後袖と前袖との縫目を合せて開きて縫代のある丈縫ひ袖口下より四ッ縫ひになす折りは表に返す落ちつかせて振りは裏布は表より1mm控へ躾す。

表身頃　單衣に準ず。

裏身頃

まづ胴接をなす（標を合せて）針目極めて小さくしてキセをなし折りは胴裏に返すを普通とすれど胴裏の縫込み15cm以上もある時は裾廻しの方へ返すことあり。

後身頃の胴接は脊の方は布の端より縫へども脇の方は脇幅の標より5mmの所にて留め置く。脇縫の折戻しに便ならしめん爲なり。

前身頃の方は布の端より端まで縫ふ。

衽附衿附

衽附に限らず脇縫其他縫合すべき所はまづ縫出すさきに標を山に布の表を外にして折りを附ける方よろし待針を指すにも運針をなすにも針目横向く事なく縫ひ安し。

裾合せ

表裏の縫目をよく合せ待針して脊，脇，衽の各縫目にては一針返し針目大きく縫ふ3mmのキセをかけて表に折り返す躾をなして綿或は芯布を入る此の際縮緬類の如き地質のものは飾り縫をなす綿及び芯の入れ方四ッ身の時と同じ故省く。

中綴ぢ

裾の始末終らば脊縫より順に中綴ぢをなす。即ち表の縫目と裏の縫目をよく合せ其の縫目より2mm内を4cm位の針目にて綴ぢる。脇縫の綴ぢは後身頃の縫込み折戻しに注意を要す。

褄下縫

中綴ぢ終らば褄先の形を整へ躾絲を以て褄をからげ表を内に表の褄下標は其のまま裏褄下の標は3mm縫込む様待針して左褄は表

より右褄は裏より何れも褄先きより縫ひ折りは裏へ返す。
表に返して褄先きを整へ躾す。

身八ツ口縫

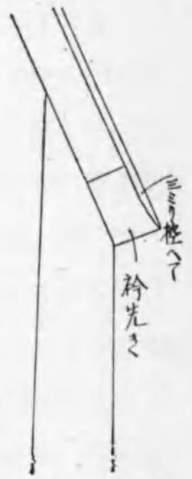
留めは脇縫キセの山近き所にてなし縫合せは幅の標より 2mm縫代を少くし標を以てキセ山となす。然らざれば袖附の時標合はずして困る。

袖附留

留めの仕方は一ツ身四ツ身と同じ表縫目は袖に裏は身頃に折りの返へる様に。

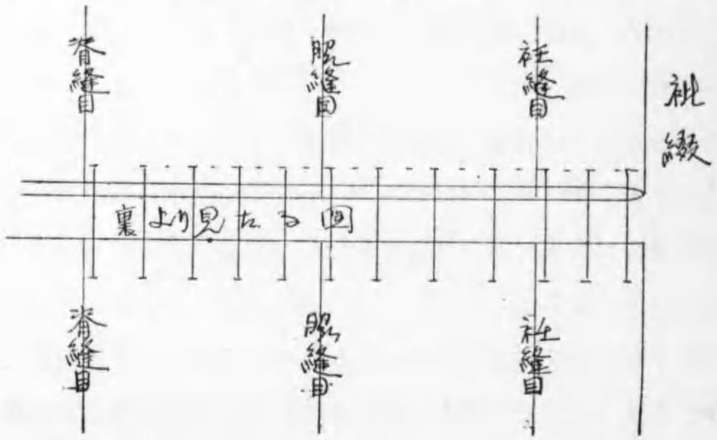
衿　　新

衿の中綴ぢを入れ三ッ衿芯を圖の如く入れ廣衿ならば圖の如く表衿より裏衿幅 3mm 控へ衿先は褄の形になして細かく新ける



狹衿，バチ衿は單衣の時と同じ故省く

廣衿の場合三ッ衿の芯も身頃の衿附けの縫込みも全部表衿にくる



みて新け附ける。

裾　綴　入

裏衽幅は二等分し裏前幅四等分後幅は五等分表は其の中間及び裏と同所縫目は裏表共出す綴ぢの位置は裾合せキセの山より 6 mm 上りたる所絲は引けぬ様表裏に出す針目を小さくする。

男物仕立方

袖口布縫附

男物袖口布は八丈五日市等地質厚きもの多き故に口布の下端は折らず其のままにして千鳥掛けをなす。

縫　人　形

人形の所袖幅の縫込み充分に入る丈袖下を表裏別縫し其の外は皆袖口留めの絲1本は切り1本そのまま續けて四ッ縫とす。袖下の別縫につづけ人形を縫ふ表は身頃の脇縫と同じ理を以て後袖縫込を折戻し角を留めるこの折り方は人形を先きに袖下を後にす。
裏も同様に折戻して中綴ぢを入れる角に引き絲をつけ表に返す。

身　　頃

表腰揚の縫方は單衣と同じ裏肩の縫ひ揚は肩幅の方は布端より衿肩明きの標まで小針に縫ひ縫目は兩方へ開きおさへる。

袖附の留

表は單衣同様袖の方にて身頃を挾む。
裏は袖より針を出し身頃は裏側にて脇縫込みの折れた山際を通し向ふの袖を縦に抄ひ身頃を通し最初の袖に歸りて結ぶ1本は 4cm にて切り1本の絲をつづけ身頃をひろげ袖縫代を落付まで折り戻

して縫ふ故に折りは身頃に返る。

袵綴　女物と同じ故省く。

第七章　綿　　入

第一節　小裁中裁本裁綿入

仕立上寸法は袷と大差なし。

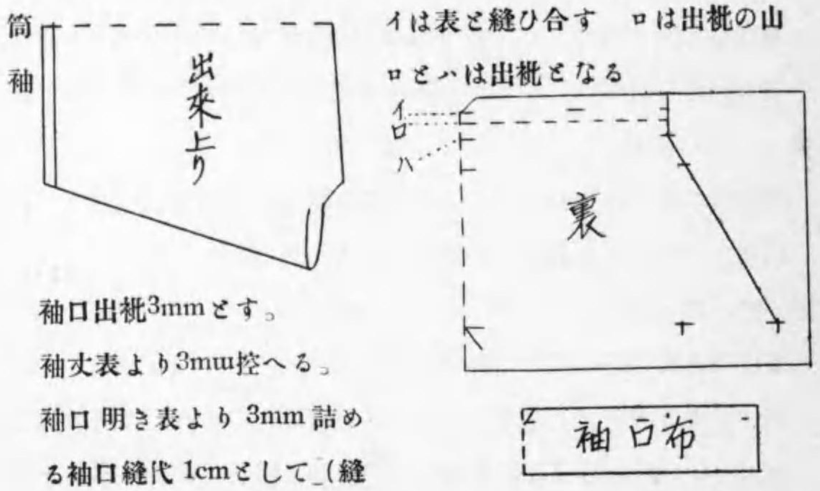
袖口，裾の出袵は何れも袷より多くする。

裁方，積方も袷と合じ。

標　入　方

表は袷に同じ裏は袖口，裾の出袵多きを以て其の積りせざるべからず。

袖布幅狭き時は袖口切を掛け出すことあり身幅は表裏の中間に綿を入れるを以て綿の厚みにより相當に加減して詰める。



袖口出袵3mmとす。

袖丈表より3mm控へる。

袖口明き表より3mm詰める袖口縫代1cmとして（縫ふ時はイの標卽ち1cmの縫代として）袖附より下卽ち振りは袷と

同樣表より3mm詰める。

表は袷と同じ故省く。

（綿入れは袖口振り等術仕立することあれど仕立上見苦しい故に大抵は縫仕立とする）

綿の種類及び取扱方

大別して木綿と眞綿となす普通着物に入るる木綿には中入れ綿と小袖綿（青梅綿）あり中入れ綿には厚作り薄作りとあり100匁を3枚に作りたるものより8枚に作りたるものまであり着物の種類及び着用者に依つて適當なものを選ぶ扱ひに關しては包み紙もせず風に吹かれて綿の質を惡しくなす樣の事あるべからず合せ目を開く時は丁寧にして綿を破らぬ樣にせざるべからず綿を切る時は手にて切り鋏は用ふべからず。

○眞綿には袋綿敷綿ふきとめ綿等あり袋綿は耳をのばし一方を鋏にて切り平になして後用ふ。

○敷綿は薄く四角に作りたるものにして四方に耳あり故に此の耳をのばすと共に全部をのばし和げて用ふ。

○ふきとめ綿は其のまま用ひ長き所は鋏にて切り繼ぐ所は繼ぐべき兩方を指にてボヤかし上より少しばかり眞綿の當綿をせば丈夫なり。

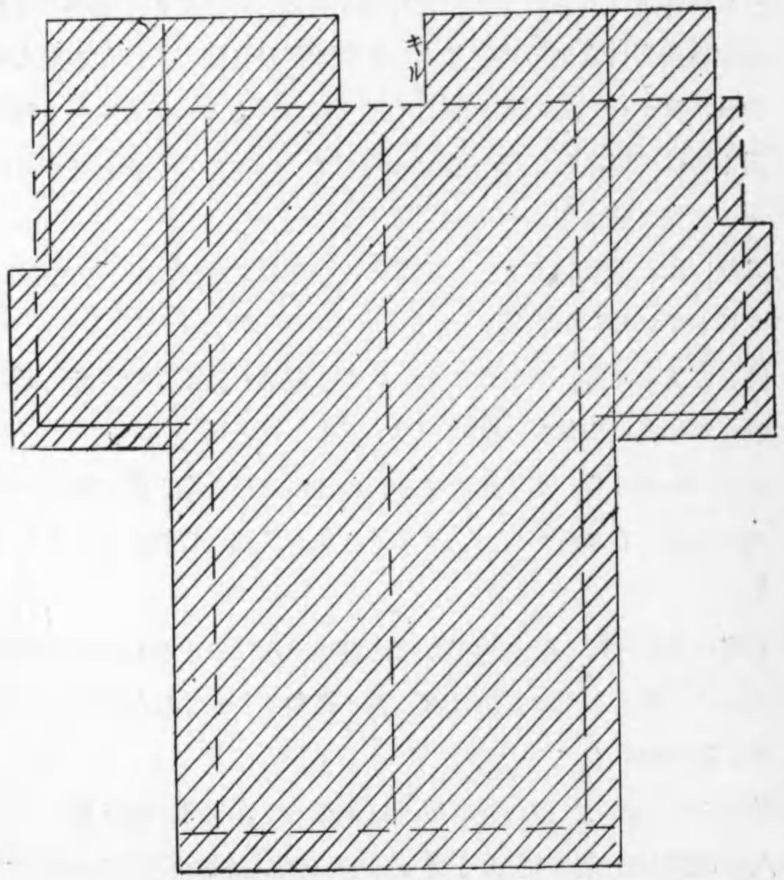
○衣服に綿を入れる時木綿ならば木綿綿のみにてよろしけれど絹布類に木綿綿のみ入れる時は布と綿と調和せずして都合惡く故に兩方に眞綿を引く。

○綿の入れ方綿入れ前に袖口振り口身八ツ口等を縫ひ含み綿をなす八ツ口振り口は袖口よりも薄くなす。袖口は縫ひ合せたる時2cm

半位の幅に綿をちぎり１枚に擴げ（中入れ綿４枚作り標準）裏側にゆるくあてがひ縫目の近くを躾絲を以て綴ぢつく綿の上より輕くたたきて出梳の山に綿が行屆く樣にし表に返して出梳を定めて躾す。

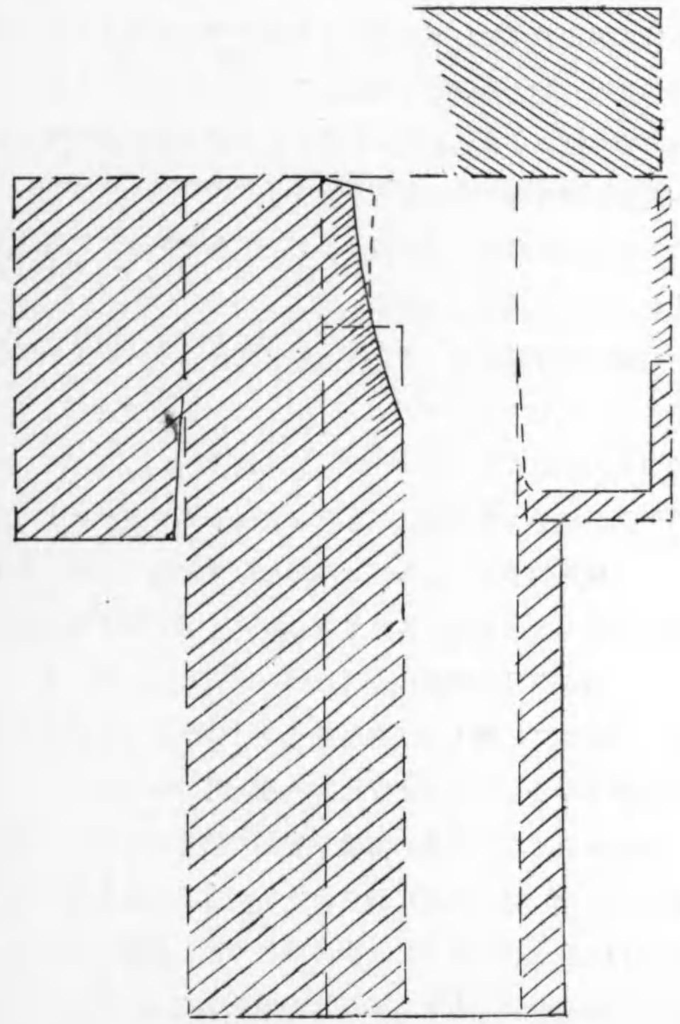
八ッ口振りの方の綿も袖口同樣裏に綴ぢつけ表より躾す。

○次に身頃全體に綿入れずまづ脊縫を表裏外に出し前身頃表と裏との中に折り入れて後身頃を上におきて疊む。



（１） 綿の幅中央を脊に合せ裾は4cm長く出し綿を開く肩の方布丈より長くともちぎるに及ばず。

（２） 出梳に依りて裾綿を加へることあり足し綿をするときは綿幅4cmにちぎり綿をひろげて梳山７分３分の見當にのせ先きの



綿にてくるみ布より少し長目にして七三に折り返す。

(3) 身八ッ口下際より綿の幅端までちぎり身八ッ口袖振りは含み綿と重ならぬ樣適宜にちぎりてよくす。

(4) 身八ッ口下際より綿を表身頃裏身頃との内へ折り入れる。

(5) 袖に綿の足らぬ所に足し袖口にも含み綿と重ならぬ樣氣をつけて肩山及び袖口下袖下の長き綿を内に折り入れる。

(6) 先きに袖のみ返し裏前袖を出す次に肩の折り入れたる綿と裏身頃の間に手を入れ脇の裾山左右を掴み肩の方に拔き出し裾を向ふに手を離して裏前身を出す。

(7) 裾綿を落付かせ後身頃の上下を引合せ正しくして前身頃は上圖の如く片前づつ入れる。

(8) 脇肩袖下袖口下より折り入れし綿を丁寧に引きのばし前身頃に綿を入れる。

袖口身八ッ口振り口等に注意して入れる。

(9) 袖の袂先き表の方にさし込み表より手を入れ袖下と袖口を大きく掴み綿をころころにせぬ樣にして注意して表に返すと同時に身頃も表より手を入れて表に返す。肩と袖下肩と脇を引き合ひて綿を落付かせ後殘りの片身も同樣にして綿を入る。

(10) 全部綿入れ終りなば再び脊丈及び脇を引き合ひて表裏の縫ひ目を綿を中にしてよく揃はしめ綿を落付かしむ。

綿入れ終りたれば裾の出褄をきめて假とじをなし。次に衽の中綴ぢをなし褄下は裏に綿を含ませかり躾して表裏合せ絎け次に衿綴ぢを入れ衿先きには少し綿を入れて衿絎けをなす。次に袖口縫ひ合せたる山より凡そ5mmの所をかくし綴ぢを入れ其の

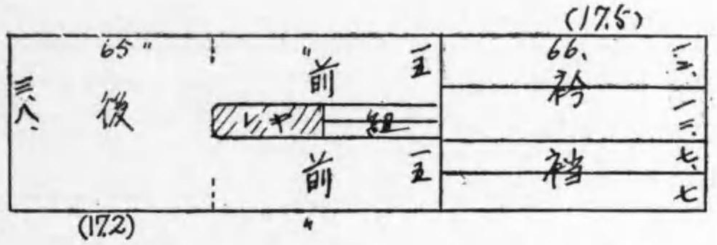
絲を切らずして袖口下及び袖下まで中綴ぢを入れる次に脊縫ひ目脇縫ひ目と中綴ぢを入れ最後に裾綴ぢをなす裾綴ぢの仕方は袷衣と同樣。

第八章 羽　　織

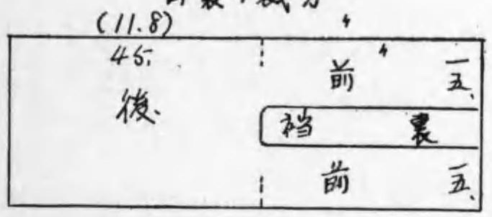
第一節 小裁(袖なし羽織)

仕立止寸法

並幅200cm(5尺2寸8分(の布を以て一ッ身袖無羽織の表裁方



同裏の裁方



身丈　55cm (1尺4寸5分)

内外

後幅　一ばい

前幅　一ばい

脇明　23cm(6寸)

前下り　1.5cm(3分乃至4分) 前下は附けざることもあり

襠　幅　上4cm(1寸)　下5.5cm(1寸5分)

紐　附　肩より19cm(5寸)

衿　幅　4cm(1寸)

位立上身丈＋衿肩明＋前下＋肩の繰越＋衿先きの縫代＝衿丈

55＋4＋2＋2＋3cm＝66cm(用布－衿丈＋前後の差)÷2＝前身丈

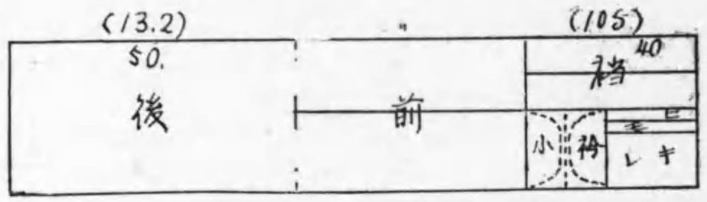
(200－66＋3cm)÷2＝69cm…前身丈

裏の積り方　後身丈×2＝用布

45×2＝90cm裏の用布

小裁羽織には一ッ身三ッ身とあれど未だ歩み得ざる幼兒には一ッ身袖無し（陣平）を多く用ゆるを以て着用せしむるには三ッ身裁ちの方形よく使用期間も長し三ッ身裁ちは長着としては長所少なかりしも羽織には極めて必要な裁ち方なり。

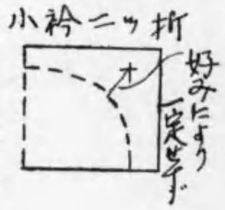
用布140cm(3尺7寸)の布を以て一ッ身陣平の裁ち方

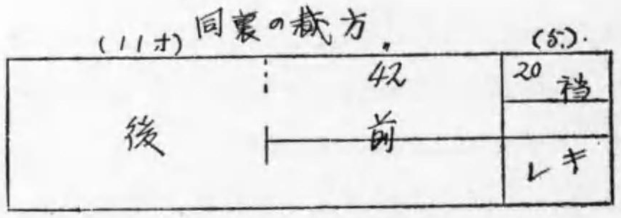


後身丈×2＋襠布＝用布

50×2＋40cm＝140cm

小衿は表裏と外に芯の布三枚を同時に標入す



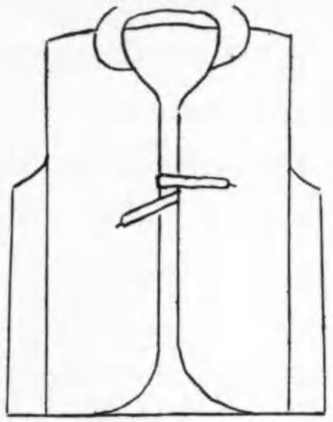


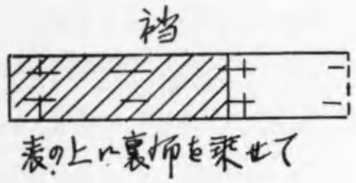
後身丈×2＋20＝裏の用布
（襠）

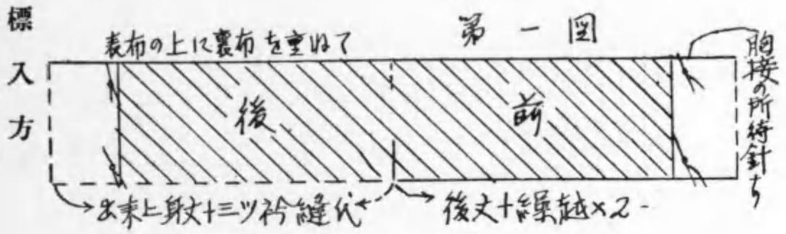
42×2＋20cm＝104cm

一ッ身袖無の仕立方(陣平)

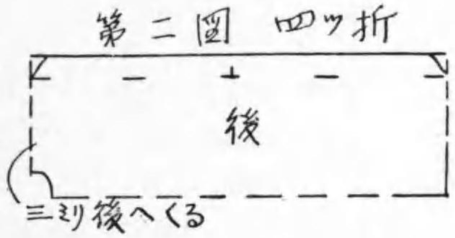
まづ前後とも胴接ぎして其の折は裏へ返す襠も標入通り表裏胴接ぎをなす身頃裾の後天標と襠の裾天標とを合せ待針

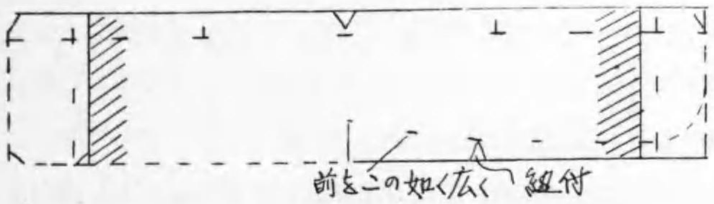






し身頃脇明きの標と襠上の標を表裏とも合せ後を先きに前を後に縫合せる此の折は何れも身頃に返す。前の





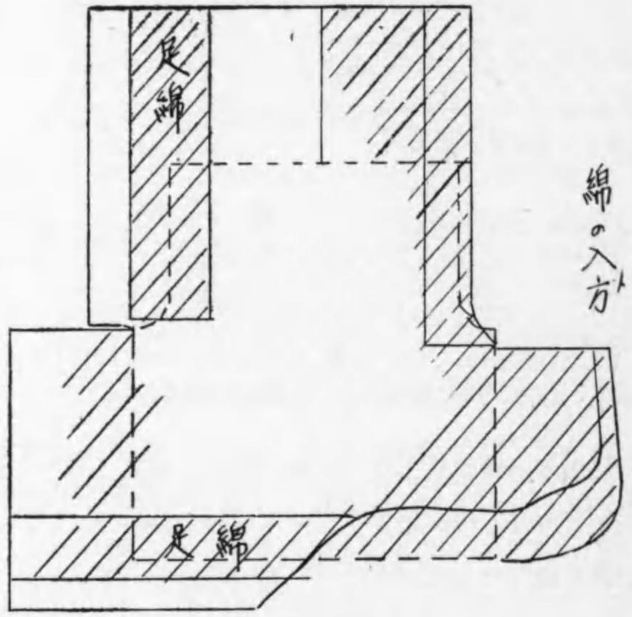
紐幅3cmにして幅一ぱいに縫ひ芯に綿を入れて丸紐となす。

裾丸味は表布の標は3cm出し裏の標は3cm縫ひ込んで元禄袖と袂

と同じく三回縫ひて程よく丸味を作り裏に返す。

襠上は3cm襠縫附終りより外を縫ひ表布の方に綿を躾絲にて綴ぢ附け表に返して躾す。

脇明の天標を表裏合せ表は幅標を3mm出し裏は3mm縫ひ込んで襠上の4cmの所まで眞直に襠上まで斜に縫ふ縫ひ初めに襠上にて



四ツ留をなすまづ留布を當て表襠附上の端より2mm下キセ山際より針を通し次に襠の表裏全く端より2mm下を通し次に裏襠衽附（表と同じ所）キセ山際を矢張り留め切を當て小針に縦に抄ひ襠の裏表，表襠附に歸りて結ぶ。此の折は裏に返して躾す。

表後身頃と裏後身頃にて前身頃挾狹みて疊み其の上に圖の如く綿を置く。

脇明と裾口には綿を少し多く入れる方格好よろし故に初めの綿は

身頃の裾口より5cm長くおき足し綿も5cmの幅にちぎり七三に折れる見當にて初めの綿にてくるみよく落付かす。此の際前身頃裾の丸味の形を作り何所も身頃より綿はやや大き目になし表身頃と裏身頃との間に折り入れ肩より手を入れて裾を綿と共に大きく摑み引き出す。

先きに折り入れたる綿を破れぬ樣のばし前身頃の裏に入れて襠上の所にて綿を接ぎ合して表に返す。

次に脇明きと裾口によく綿を行屆かせ假綴ぢ躾をなし前幅には表に綿を含ませ（少し足し綿を加へ）大針に表に極く小針を出してかくし躾をかけ裏は衿肩まで3mm控へ紐の位置に別に丸紮してある紐をシツカリ縫ひ附けて躾す。

小衿の縫方

小衿布の裏の布は縫ひ標を3mm縫ひ表布と芯の布とは縫ひ標を3mm外を天標を合せ待針し自然まる味の大小を合せる理故表及び芯の方ゆるみを生じるけれどまる味の中心斜の所にてゆるみの消える樣に極く細かに縫ふ。

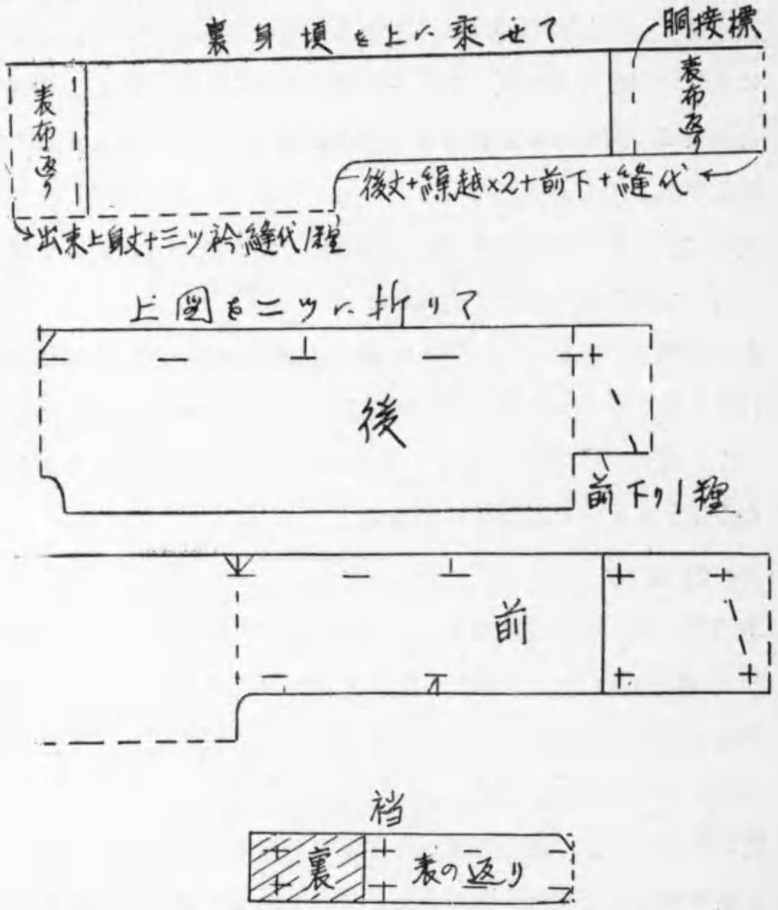
縫ひ終りなばまる味の所は袂のまる味を作ると同樣2,3回下縫ひの通り縫目より3mm宛間をおいて縫ひイセて裏の方へ返す。表に返して躾をす。

裏より表布3mm出枇の如くなる。

小衿の表の方を身頃の裏衿肩に宛て芯共に4枚縫ひになす表にて紮ける。

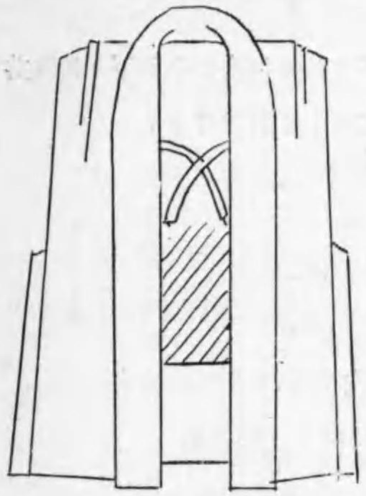
最後に後襠の縫目に中綴ぢを入れる（中綴ぢの仕方は綿入れ衣の時と同樣）

一ツ身袖無羽織の標入方



○羽織には前下り及び肩の繰越しをなすを以て前記裁方の如く後丈より前丈を長くせざるべからず。もし前後の差を付けぬ時には表裾の返り後よりも前短かくなりて形見苦しい故に少くも胴接にて前後揃ふ様になさざるべからず普通小裁は前後の差7cm或はそれ以上とす。

羽織の裁切衿丈を積ること大切なり子供の成長と共に身丈はのば



し得るも衿丈短かくて困る事なき様注意して裁たざるべからず。即ちその羽織をどれ位の身丈にまでのばすべきかを豫想してその身丈に適合するやうに裁ちおくこと肝要なり。

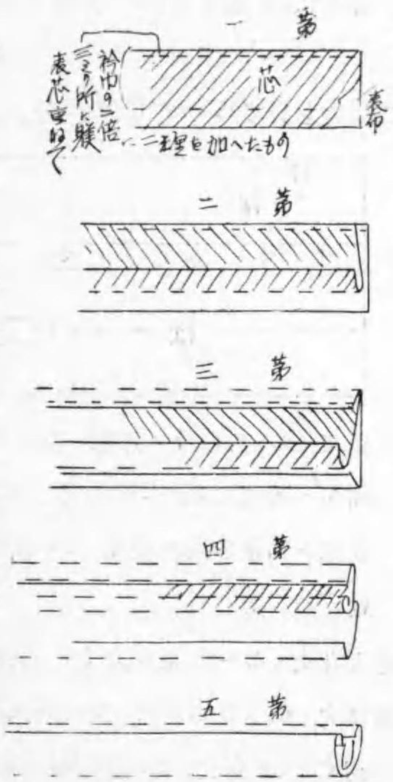
小裁物には衿芯を要す衿芯は表布の幅も丈も同寸とす。

第1圖の如く表衿に芯布を合端3mmの所に躾をかけ其端より芯布のつらぬ様ややゆるめて衿幅の2倍に2cm加へたる所に標す。

第2圖衿幅の2倍に2cm加へたる標を向ふに折る。

第3圖向ふの端1cmを折り返し其の折り目より手前表布衿幅の2倍より3mm減じたるものに内へ折り返す。

第4圖向ふより表の1cm折返したる所へ芯のみかさならぬ様折りて芯のみ躾をかける第五圖向ふより表の1cm折返したる所より3mm控へ表布即ち裏側衿になる所を合せる。

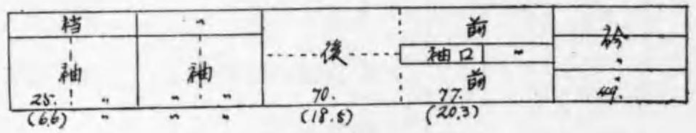


衿の折り方

仕　立　方

一ッ身袖なし（陣平と同様）唯前下と衿の相違のみ前下り衿附共に中裁本裁と同様につき其の條にて委しく記載せり。

並幅296cm（7尺8寸）を以て一ッ身羽織表裁方



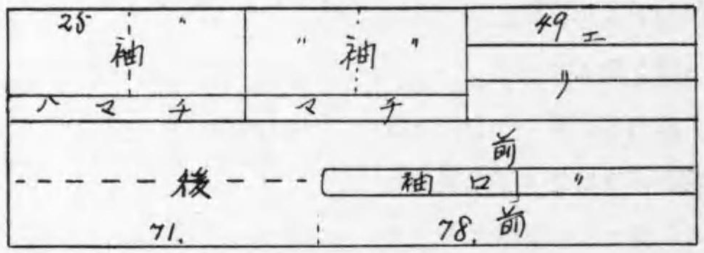
標附身丈61cmとしての衿丈

標入身丈＋12×$\frac{2}{3}$＝衿丈　(61cm＋12)×$\frac{2}{3}$＝49cm弱
└衿肩操こし前下り衿先きの縫代衿のゆるみ

袖丈×4＋後身丈×2＋前後の差＋衿の分＝用布

25×4＋70×2＋7＋49cm＝296cm

二幅物を以て149cm(3尺9寸3分)一ッ身羽織表



袖丈×4＋衿の分＝用布　25×4＋49cm＝149cm

用布－前後の差÷2＝後丈　149－7cm÷2＝71cm

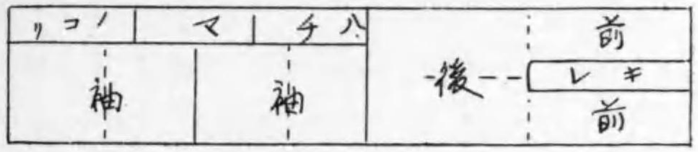
前丈＋前後の差＝前丈　71cm＋7＝78cm

裏　地　積　方

標入身丈×2－表裁切身丈＋胴接縫代（6cm或はそれ以上）＝裏裁切身丈　61×2－70cm＋6＝58cm

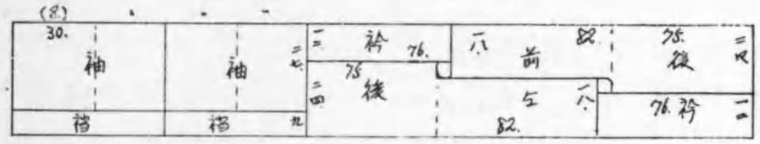
袖丈×4＋身丈×2＝裏用布　25×4＋58cm×2＝216cm

並幅216cm(5尺7寸)を以て一ッ身羽織裏の裁方



並幅353cm(9尺3寸5分)を以て三ッ身羽織表の裁方

元祿袖（衿は天接ぎ）



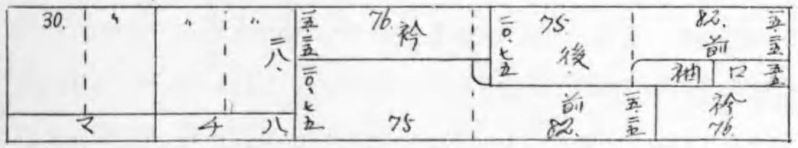
小裁羽織は身頃裾の返り少きを以て衿丈より袖口切を取ること得ず故に袖口切は別切を用ふ。

衿肩のまる味1cm

袖丈×4＋後裁切身丈×3＋前後の差＋1cm＝用布

30×4＋75×3＋7＋1cm＝353cm

並幅片面物353cm（9尺3寸2分）を以て三ッ身羽織表（元祿袖）



袖丈×4＋後身丈×3＋前後の差＋1cm＝用布

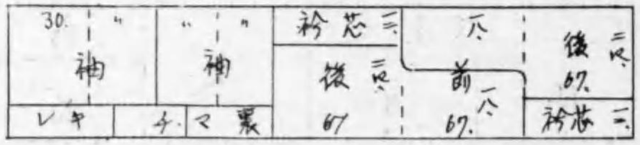
30×4＋75×3＋7＋1cm＝353cm

裏　積　方　袖は表と同じ

標入身丈×2－表裁切後丈＋6cm或はそれ以上＝裏身丈

標入身丈を68cmとして68×2－75＋6cm＝67cm

袖丈×4＋身丈×3＝用布　30×4＋67×3＝321cm



普通仕立上寸法　（一ツ身及び三ツ身は大抵綿入仕立として）

袖　　丈　着物より5mm長く。

袖　　口　着物と同寸。

袖　　附　着物より8mm多く。

袖　　幅　着物より2mm廣く。

身　　丈　55cm乃至(1尺4寸5分)65cm(1尺7寸2分)

幼兒は年々身長著しく長ずるを以て今年長い目に仕立たるものも來年は早や短かしと云ふ工合外出用の物等は身丈のばしに困るを以て最初より長く仕立着用時に合せて中間に縫揚をなす場合多し常用にして一冬毎に洗濯縫代をするものは揚はせず。

肩の繰越し　4mm

前下り　1.25cm(3分)2　cm－(5分)

衿肩明き　着物より3mm多く。

身八ツ口　8cm(2寸1分)

後　　幅　一ばい

前　　幅　凡そ13cm(3寸5分)

襠　　幅　上3cm(7分5厘)下5.5cm(1寸5分)

乳　　附　21cm(5寸5分)乃至25cm(6寸5分)

衿　　幅　5cm 内外

標入方　袖は着物と同じ，寸法に差あるのみ。身頃も一ツ身及び

三ツ身は袖なし羽織と同じ唯寸法に差あるのみにつき省く。

仕立方　袖は着物と同じ。衿の折り方は一ツ身袖なし羽織と同じ

身頃胴接ぎ　表裏胴接の標と標とを合せキセなくして小針に縫ひ裏に折りを返す。襠の胴接も同様。

前　下　前下り裾の標表は前下り標の通り裏は標を3cm縫込みて待針し前幅の間丈を細かく縫ひ2cmのキセをかけて裏に返す。

襠　附　後前共身頃裾山と襠の裾山とを合せて待針し襠上は襠附の終りより3mm内を裏襠を幅稍釣り加減に縫ひ合せ裏に含み綿を躾絲にて綴ぢ附ける。

襠上の四ツ留，身頃八ツ口縫ひ　留切を當て表襠附上端より2mm下，キセ山際より2本絲の針を通し次に襠の表裏全く端より2mm下を通し次に裏襠附キセ山際を矢張り留切を當てて小針に縦に抄ひ襠の裏表，表襠附に歸りて結ぶ歸りには襠の折り山の極端を通る今結びたる絲1本は切り1本は續けて其のまま身頃八ツ口幅標より2mm縫代に依りたる所を縫ふ裏に含み綿を躾絲にて綴ぢ附ける。

綿の入方は一ツ身と同様につき省く。

綿入終りたらば裾口によく綿を行屆かせ躾す次に表裏の中に綿をはさみ裏より見て衿付の躾をなす。

次に肩より寸法の所に乳を縫付衿布の丈，天標を身頃の裏脊縫に宛待針し左半身は脊より裾下りの端へ右半身は脊より裾下りまでの順序にて待針し掛針かけて縫付る。衿先き二糎の所を縫ひ折は裏（衿の表）へ返し綴ぢ付て表にて（卽衿の裏こて）絎け付る其絎方は身頃の布を抄ふ加減にて絎ける衿肩廻りは特に針目に注意

し衿附の針目の大きさと同じ針目にて衿附縫ひにて絲の出てゐる所は身頃を抄ひ衿附の絲の出てゐない。所は衿の方を抄ふ絎け終らば身頃前裏を衿の折山より3mm控へて正しく折り衿附の折山より6mmの所を衿の裾端より衿肩の所まで躾す。

脊綴ぢ後襠綴ぢ入は綿入着物の縦綴ぢと其の仕方同じ。

肩揚の仕方　着物と同様。

身丈長く仕立てる時身頃に揚をなすことあり裾より20cm上りたる所にて衿を折返したるまま長き丈の半分を揚の深さとして二本絲にて大針小針の仕方にて摘む。

第二節　中　裁　羽　織

普通仕立上寸法

女兒の上物には袷仕立になすことあれど常着用の大抵は綿入れ仕立になすを以て仕立上寸法は綿入仕立と見做して置く。

袖　丈　着物より1cm長く。袖　口　着物と同じ。

袖　附　着物より8mm多く。袖　幅　着物より3mm廣く。

身　丈　65cm(1尺7寸)乃至90cm(2尺4寸)　身八ツ口　9cm

後　幅　一ばい。乳　附　25cm(6寸5分)乃至28 5cm(7寸5分)

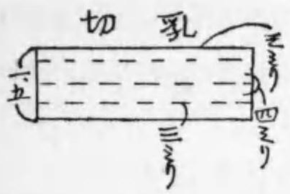
前　幅　15cm 内外。襠　幅　上2cm(5分)下6cm(1寸6分)

衿　幅　5.5cm(1寸5分弱)　前　下　2cm(5分)乃至2.7cm

綿入れ方　長着と同じ方法なれども裾に綿5cm程長く折りかへす

衿綴ぢ　脊と衿肩廻りは表裏揃へ紐附より下は綿の厚さ加減により2mm乃至 3mm裏前幅を廣く裾口の所にて衿を折返すのによく落付く樣加減を見て綴ぢ附ける。

乳 拵 へ 乳 附



乳は表の布にて作るを正とす4mmの幅に絎けて絎目を内に折曲げ乳の切 1.5cmの幅初め兩端3mm折りそれを又二ッに折りて4mmの幅となす重なりたる所を二三度針絲を往復させて留め乳の出し加減に注意して身頃乳附の標に附ける。

男と女とは重ね方反對にして男は を左とし女は之を右とす卽ち乳を附けてより男は上が高くなり女は下が高くなる。

衿附け　衿の中央衿附け折山より3mm縫代に依りたる所裏身頃脊縫ひ1cmの所とを合せて針を打ち衿肩廻りは衿を少しゆるく乳附の所4cm位衿を極少し張りきみとす乳附より下は衿も身頃もゆるまぬ樣に待針す裾口5cm程は綿も厚ければ針目やや大きく半返しをよしとす。それより上は掛針して絲をゆるく乳附の所に至らば返し針して衿肩廻りは小針に半返しとす。

衿先き縫ひ方　縫込の整理

衿の縫附端より2cm外を衿布の折山より3mm衿幅に依りたる所と衿絎の折山とを合せ衿芯は其のまま表衿の方につけ置きて表衿衿幅を心持ちゆるめに加減して縫ふ。次に衿附終り身頃キッカリに衿先縫込を衿附の方に折返し布の厚み分だけ加減して衿附の縫代に綴ぢ附表に返へす。

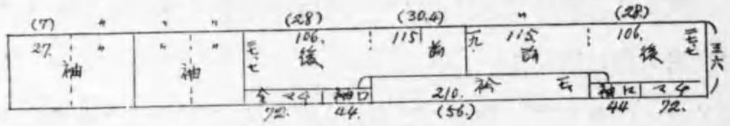
衿　絎　始め終りは4cm位絎け返しをなす衿絎の折山より2mm奥を身頃只表一枚に絎け付る。

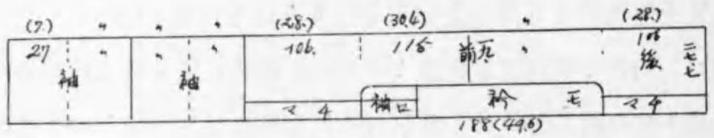
裁方及び積り方

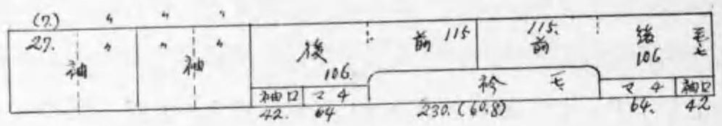
四ッ身羽織は四ッ身着物の如く長袖ならざる時は普通半反にて作

る故に反物一反にて着物羽織とお揃ひにて作り得るなり。女兒の長袖になす時は一疋物にて $\frac{1}{3}$ 或は一反物なれば多きだけ布を除し置く。

並幅物550cm (1丈4尺5寸) を以て四ッ身羽織の裁方(筒袖)







以上三種の裁方は積方皆同じ。

{用布－(袖丈×4＋前後の差×2)}÷4＝後丈

{(550－27cm×4＋9cm×2)}÷4＝106cm

後丈＋前後の差＝前丈106cm＋9＝115cm前丈

以上三種について得失を説明すれば袖は並幅其儘を使用すれば問題なし。

○袖口布の丈は42cmそれ以上を要す。

○襠丈はその羽織を最も長く仕立つる時を豫想して其の身丈に肩のくりこしを加へたるものより袖附と身八ッ口とを減じそれに加へること上の縫込2cmと裾の返り幾何かを要す。

例へば標附身丈に肩の繰越しを加へたる寸法を90cm (2尺4寸) と

見做して計算するときは

90cm－(19cm＋9)＋2＋6＝70cm

袖附　身八ッ口　上の縫　胴裾分接のこ縫返代り

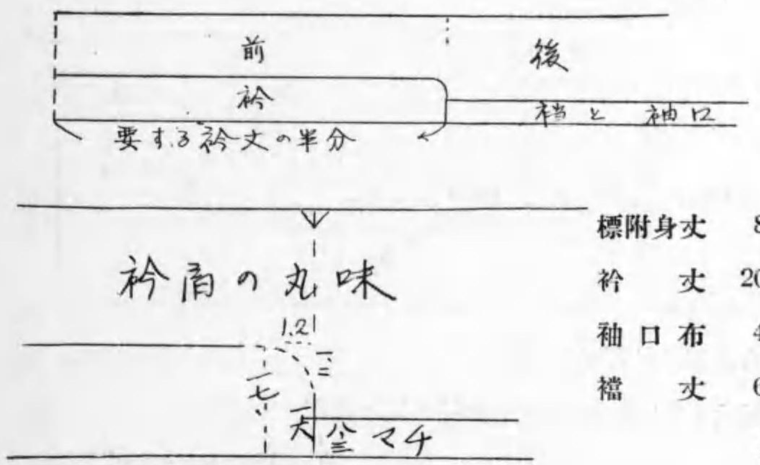
衿丈は襠丈と同じく其の羽織を最も長く仕立つる時を豫想して其の標附身丈に加ふること15cmそれを2倍したる長さを取りおくなり。

例へば標入身丈90cmと見做して計算するときは

(90＋15cm)×2＝210cm

裁切順序

袖丈の4倍は普通に切り取りて殘り身頃の分を二ッに折り其の輪の方に於て前後の差を長くなし四ッに折りて其山を圖の如く衿肩明きの標入れて丸味の通り切り離す。

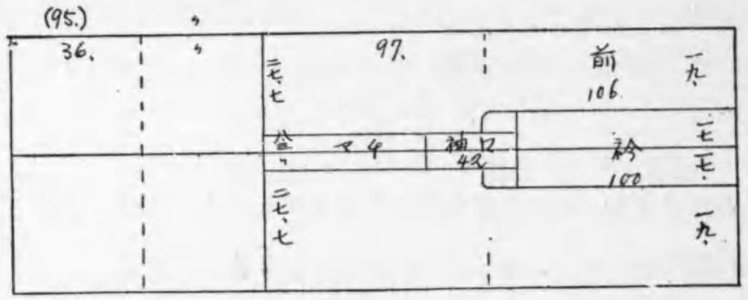


標附身丈	85cm
衿丈	200cm
袖口布	42cm
襠丈	62cm

以上

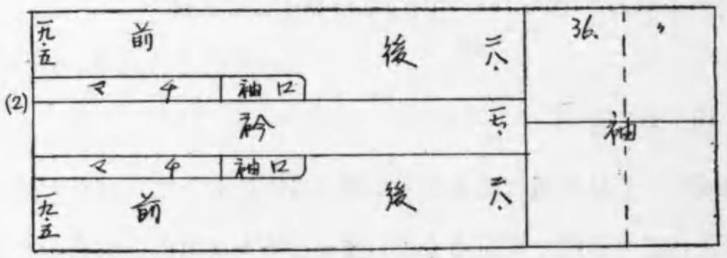
二幅物275cm(73cm)の布を以て中裁羽織表の裁方

(1)



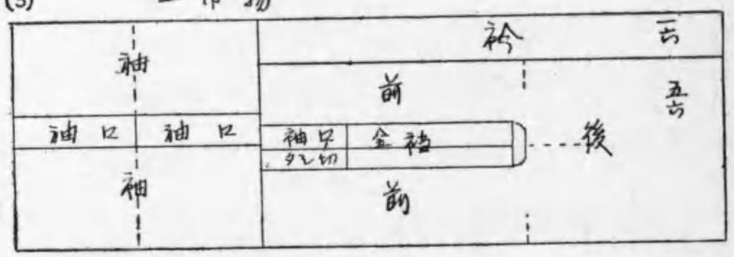
(1) 圖は衿を山接ぎにする缺點あり

(2)



(3) 圖は前身頃の返り多くして前身丈より襠と袖口を取り衿に接ぎなく都合よし。

(3) 二巾物



積方は以上3種とも同様。

袖丈×2＋後身頃×2＋前後の差＝用布

36＋97cm×2＋9＝275cm

或は(袖丈＋身丈)×2＋前後の差＝用布

(36＋97cm)×2＋9＝275cm

{用布－(袖×2＋前後の差)}÷2＝後丈

{(275－36cm×2＋9cm)}÷2＝97cm

後丈＋前後の差＝前丈　97＋9cm＝106cm

並幅にて裏用布の積方　袖は表と同様

標入身丈×2－前後の裁切丈＋6或はそれ以上＝裏身丈

袖丈＋裏身丈×4＝用布

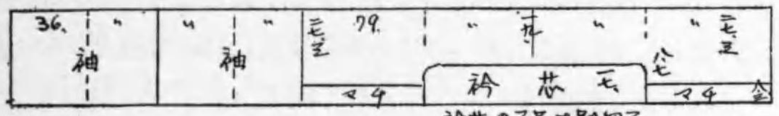
85×2－97cm＋6＝70cm　(36＋79cm)×4＝460cm

又次の算法もある。

仕立上袖丈×8＋仕立上身丈×8＋63cm－表用布＝裏用布

胴前前肩こ背縫袖
接下のしの代
縫縫下く衿縫
代代りり附代

34cm×8＋84cm×8＋63cm－550cm＝457cm



裏布幅表布幅に比して狹き時は脇にて揃へ衿幅を狹くす。

表布に前後の差あるに依り裏は前身丈も後身丈も同樣。

衿の折かた標入方縫方何れも三ッ身羽織に準ず。

第三節　本裁男羽織

男物普通仕立上寸法

袖　丈　着物と同じ。

袖　口　着物と同じ。

袖　幅　着物より2mm廣く。

袖　附　袖丈と同寸

身　丈　1米(2尺6寸4分)乃至106cm(2尺8寸)

前下り　4cm

後　幅　着物の後幅と同様。

前　幅　20cm内外。

襠　幅　上3mm下据7cm

衿　幅　7cm

肩　繰　2cm

乳　附　脊より44cm

女物普通仕立上寸法

袖　丈　地質又は着る人に依りて一定せず。おびを高く締める時は着物より2cm乃至2.5cm短かくすべく袴を穿く時は地質にもよれど殆ど着物と同寸になすべく又木綿物綿入羽織の如きは着物より5mm長くなさざるべからず故に羽織の袖丈のみは普通幾何と云ひ難し。

この理をよく會得して各自種々の事情を考へて定むること必要なり。軟かき地質にては普通1.5cm着物より短かくなす。

袖　口　着物と同寸。

袖　附　着物より8mm多くす。

袖　幅　着物より2mm廣くす。

身　丈　91cm(2尺4寸)乃至1米(2尺6寸4分)

肩の繰り　0.8mm乃至2cm これも着用者に依りて一様ならず

前　下　4cm

後　幅　着物と同寸。

肩　幅　着物と同じ故に裄は着物より2mm長くなる上に着るものの裄短かく着物見ゆるは恰好よろしからず。

身8ッ口　9.5mm

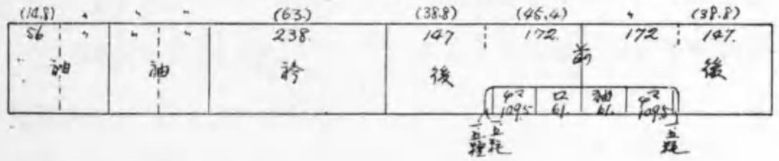
前　幅　18cm

衿　幅　6cm乃至6.5mm

乳　附　脊縫より43cm内外

裁方及び積り方

並幅1反11cm(2丈9尺)の幅を以て本身羽織表の裁方



標入身丈1cmとして計算

(標入身丈13cm+19cm)×2=衿丈　(100+19cm)×2=238cm

{用布−袖丈×4+衿丈+前後の差×2)÷4=後身丈

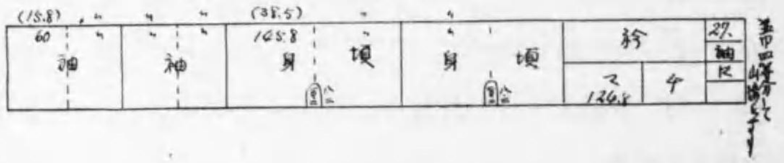
{1000−(56cm×4+23.8cm+25cm×2)}÷4=147cm

後身丈+前後の差=前身丈　147+25=172cm

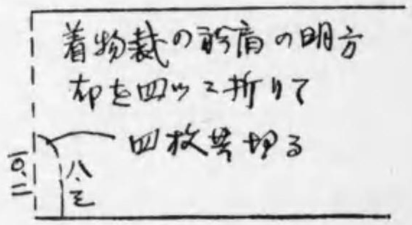
羽織としては前後の差多き方前身頃表布返り多くして恰好よろしけれど後日長着として仕立かへんとする時は後身丈短かくして困る故に最初裁つ時よく考へて前後の差を附けざるべからず。(此の注意は常のものに必要なり) 羽織として裁ち又別染する場合は羽織として最も恰好よきに定むる事云ふまでもなし。常着用として後日長着に仕立かへる必要上着物裁として前後の差を附けず紅用の布を襠に衿共衿を切離さずしてそれを衿に當つることあり。只

前身頃表布の返り後身頃より少なくなるのみ袖口布は別紙にて山接して用ゆ。

並幅1反1100cm(2丈9尺)を以て着物裁羽織の裁方



袖口布27cmとる爲め餘り身丈短かくなりすぐる時は袖口布は全くの別切を用ひてもよし。



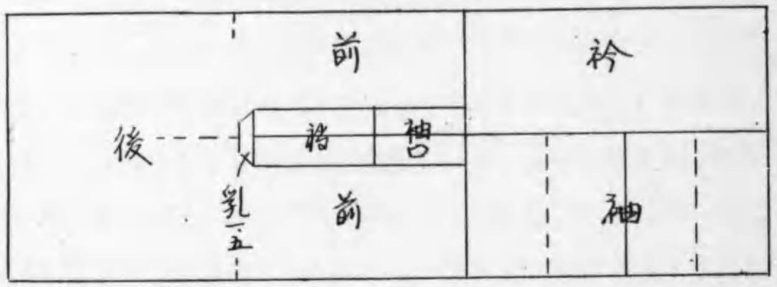
{用布—(袖丈×4+袖口布)+衽下り×2}÷6=身丈

{1100cm−(60×4+27cm)+21cm×2}÷6=195.8cm

大幅物にて本裁羽織の表裁方

積　　方

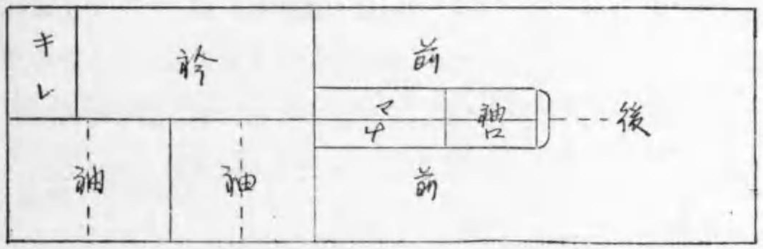
{用布—(袖丈×4+前後の差)}÷2=後丈 後丈+前後の差=前丈



要する衿丈と裁切袖丈の4倍とを比べて長き方にて積り裁つ。男物の時は大抵衿丈の方長く若き女物にして袖丈長き時は袖の方長

し。若き婦人用として袖丈75cm内外の長き時は衿布の方でムダ切を出す。

又此の反對に男物の身丈長く袖丈短かき時は袖布の端にてムダを出す。



積り方はいづれも袖衿長き方にて計算して用布を求む。

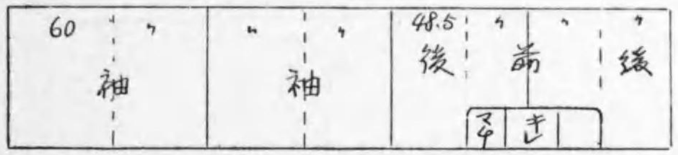
並幅の布を以て本裁羽織裏の裁方

仕立上袖丈×8+仕上身丈×10+100cm−表用布=裏用布

58×8+96cm+100−1100=424cm

縫込の説明　袖下の縫代　衿先　胴接　前下　繰越　前下の縫代

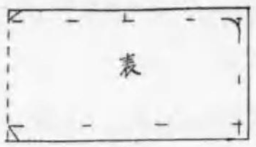
16cm　38cm　16cm　16cm　12cm　2

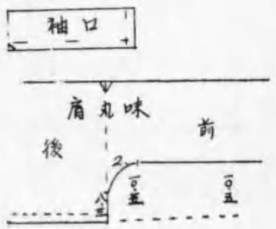


表布にて前後の差を13cmつくる時は裏身丈は前後同寸にしてよし。

(用布−袖丈×4)÷4=身丈　(434−60cm×4)÷4=18.5cm

標入方　女物袖は長着の袖と殆ど等し男物は縫人形なきを以て着物の袖よりは容易とす。





前身頃衿附ゆがみ肩の丸味の所にて 8mm 前身頃裾の所にて前幅を定めて衿肩の縫代まで定木を宛てるか又は絲を引きて幾何か斜に眞直に標入る。

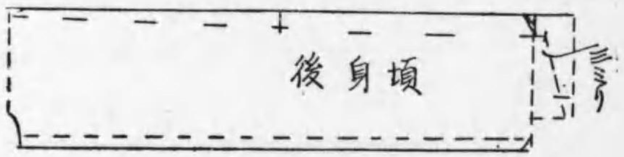
襠の下幅は大抵衿幅と同寸にして上の幅は 3mm（中央を8mm手前に取りそれを中央と見做して）兩方へ裾により斜に標入る卽ち多く斜になりたる方前身頃に縫付る。

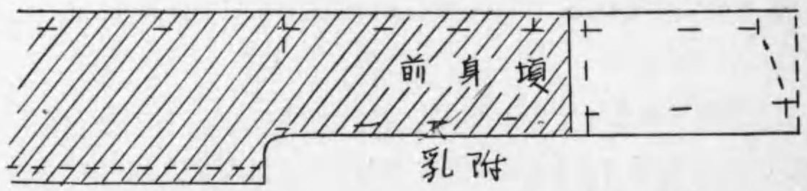
身　　頃

表身頃の上に裏身頃を重ね身丈寸法を定めて表布を折返して待針したる圖。

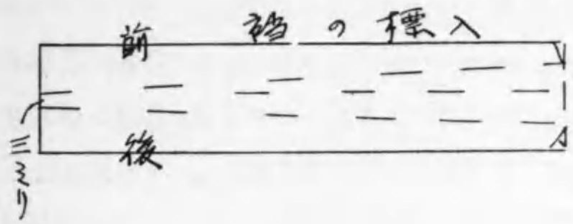
100.8＋4＋4＋0.8cm＝109.6cm

假に100＋0.8cm＝100.8cm





襠裏の胴接ぎをなし襠丈の標より表裏とも縫代を折込襠の中所に



あらく鋏して標入をなす。

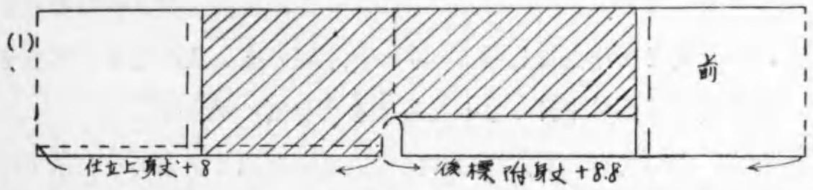
女物羽織身頃標入方は男物と同樣なれども寸法はちがふ。

肩の繰越は着用者に依りて一定せざれ共普通標準は 2cm とす。

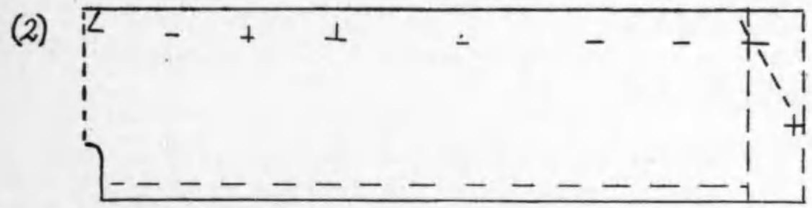
標入前によく調べ着用者によく合ふ樣なさざるべからず。

着物裁　羽織標入

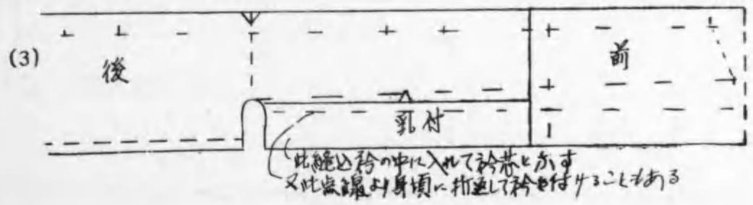
袖は變りなし　身頃表は着物裁にして裏は羽織裁と假定す。表身頃を所定の寸法にして折返し其の上に裏をのせ胴接の標をなす。



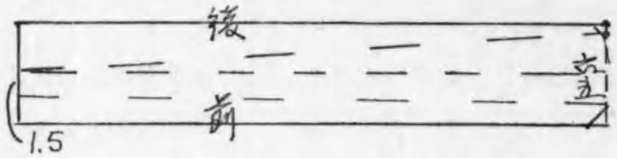
第 1　圖を肩山より二ツに折りて後幅袖附八ツ口前下りの標を入る



第 2　圖後身頃の標入終れば前身頃に寫して後身頃を左にはねる。

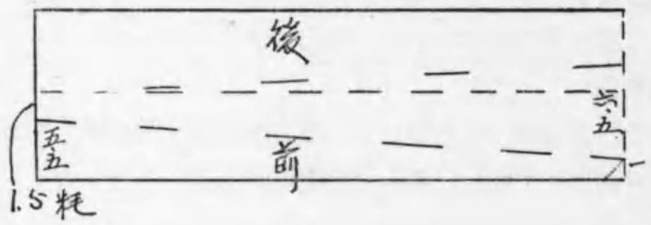


衽布を以て襠になす標入



身頃後幅裾は眞直なるを以て襠幅の縫込は皆後になし前は普通の1cmの縫代となす。

普通羽織裁の襠(女物)

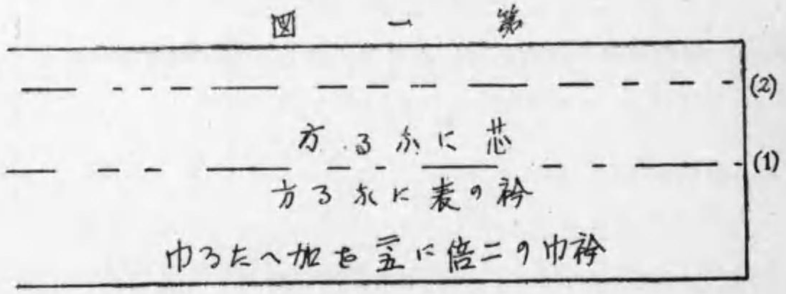


女羽織普通標入は裾は6.5cm の幅になし上は布の中央を7mm片寄せて中央とし兩方へ75mm半宛の標を入れ片寄つた方を後身頃に一方多く斜になりたる方を前身頃に縫合す。

仕立方　衿の折方　本裁羽織衿は普通並幅を以て衿布となし殆ど半幅以上は衿芯となす。又着物裁の時は半幅衿なれば小裁羽織芯附方と同樣なり。

普通並幅の衿折

1 衿布の表を下にして標附臺の上に置く。



2 手前より計りて位上衿幅の2倍に2.5cmを加へし所に標す。(1)

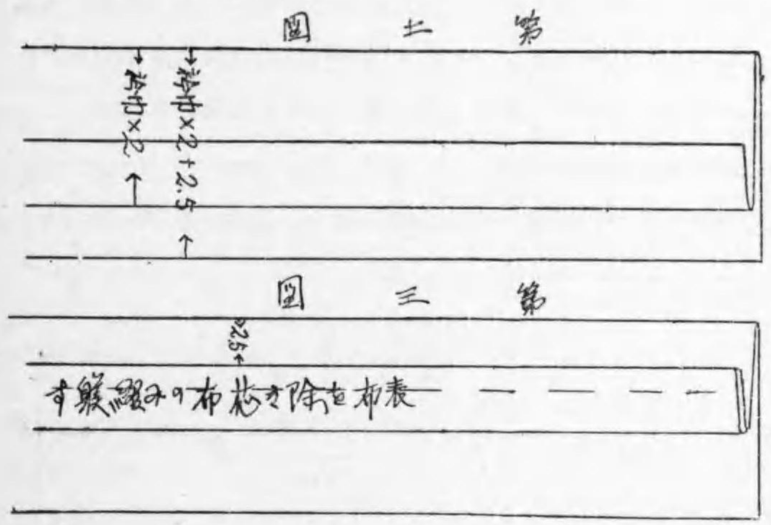
3 その標より向ふに今の幅より2.5cm減じ其の幅を標す。(2)

4 (1) 番の標通り布を手前へ表を外に折る縮緬又は折のつき難き地質のものは縫躾す。手慣れぬ先きより鏝を使つて折りをのばすべからず。

5 (2) 番の線衿幅の2倍の線を第2圖の如く向ふへ折返す。

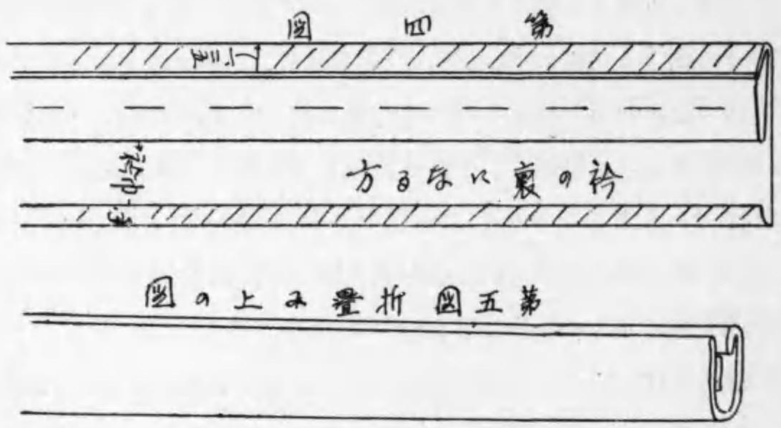
6 第3圖の如く (1) 線の端より2.5cmの所へ折返して躾す。

7 躾終らば向ふの (1) 線の所を2.5cm の半分手前に折り今の躾したる折と重ならぬ樣又少しのすきもなき樣に折目をつき合せて折り手前衿の裏になる方は仕立上の衿幅より3mm 控へ標して內へ折る第4圖の通り。



第5圖出來上り。

8 第4圖の表衿の折山へ裏衿の折山を3mm 控へ持ち行くあらく躾して壓をかけて落ちつかす。

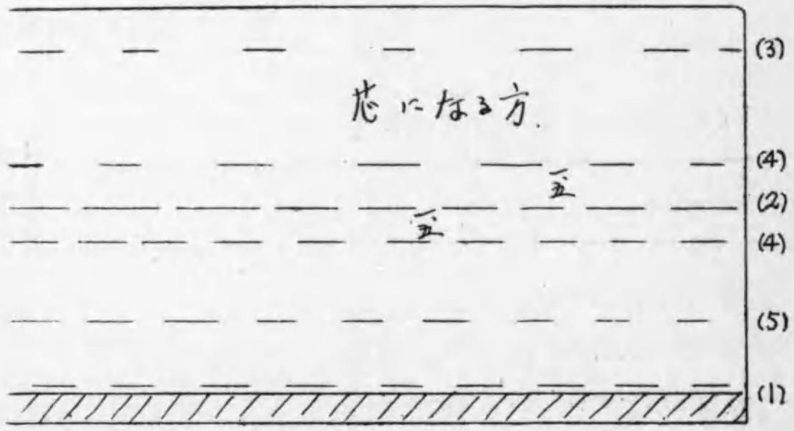


第五図　衿の上み畳折図

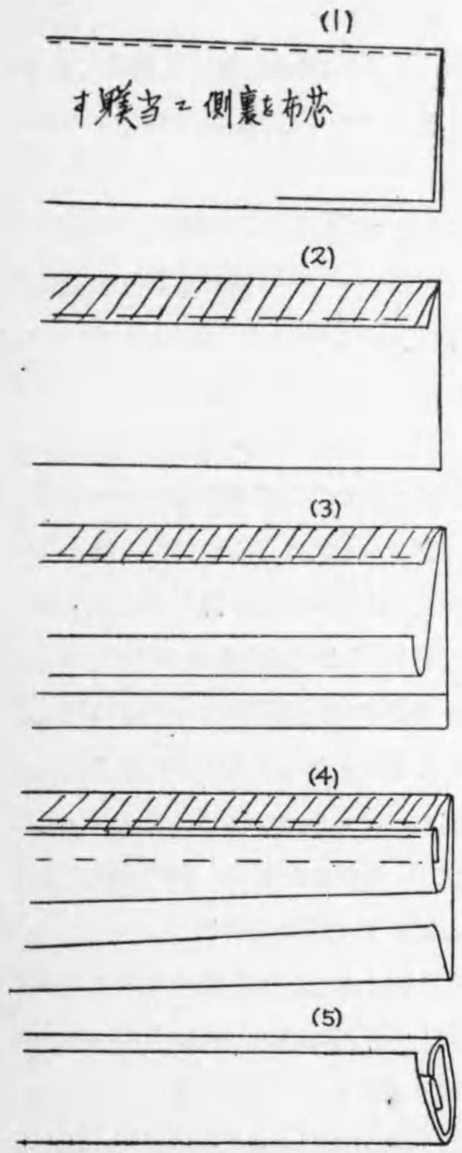
9 表地の布軟かくして衿芯を入るゝ時は厚地の芯なれば1枚又軟かき芯布なれば2枚を用ふことあり1枚の時は衿幅より2mm控へてA幅を裁ち切つて表衿の折りの中にくるみ芯をつらぬ程度にして躾綴ぢをなす。此の躾綴は羽織を仕上げても取り去らぬ様もし表地薄く表より透け見えぬ様表布共色を以てす。

特に耳幅廣き並幅物の時

二幅物セルの耳幅廣き時は並幅に切りし裁目の方を衿衍の方にな



し耳太の方を芯に入るれとも縫返しの時はその耳幅廣き方が衿衍の方となる。



地質の如何によらず耳太が衿衍となる場合はその折代より定めて衿折の標をなす

1 衿の表を下にして標附臺の上に置く。

2 太き耳より3mm深く標をして折る。(1)

3 その折目より向ふへ仕立上衿幅の2倍より3mm減じたるものに1.5cm加へし標をなす。(2)

4 その標より向ふへ今附し幅より1.3cm狭く標す(3)

5 (2) の標通り折山より1.5mmに芯の方に向つて折る。

6 (3) の標通り折る。

7 (1) の折山を (4) の折山より3mm控へし所に持ち行きて上より躾して壓をかける。

半幅衿の時

小裁羽織にて説明せし通りなれど再び茲に説明す。

1 衿布の裏側に芯となすべき布を當て衿附の方にて芯布の鈎らぬ様注意し極めて端をあらく躾かける。

2 其の躾したる衿附の方の布の端より1.5cmの深さに標して折る

3 表衿布のみ衿附の折山より計りて仕上の衿幅の2倍より3mm減せし所を折る。

4 衿芯のみ今折りし衿紵の折山より1.3cm控へて折る。

5 衿紵の折を衿附の折山より3mm控へたる所に持ち行きて躾すそれより先きは前に同じ。

仕立方　いつの時にても羽織は仕立の初に於て衿折りをなしシカと壓をおき落付かす。

○男物袷羽織　男女に係はらず皺になり易く又木綿物の如き地質の厚きものは紵衿とし反對に地質軟かく皺にならぬ物は袋縫となす

○身頃の裾には幅5cm位の布を二ッに折り七三に折りて入るをよしとす。又眞綿を入れることもあり。(まづ紵衿を先きに記す)

○袖口縫合せ，袖口留，袖口下袂丸袖下縫袖下の四ッ縫は袖幅縫込みユックリ折返るまでとしそれより先きは表裏別々に縫ひ袂丸を整へ表に返し袖口の出枇を定めてキセを正し躾をなす。

○表裏の脊縫は標入前になす故に後身頃前身頃とし直に胴接ぎをなす針目細かく縫ひ此所は裏に返すキセは殆どなし。

○前下りを縫ふ表は標の通り裏は標より返りの2倍深き所とを合せて脇縫の標より衿附の幅の標までを針目細かく縫ひ2mmのキセをかけて裏に返す。表より躾をかける。

○脊縫中綴ぢ裏表とも脊縫のある時は裏表の縫目を合せ2mm内側

を裏表共4cm位の針目にて綴ぢる裏布額縁などにて脊縫なき時は縫共絲を以て大針に裏には小さい針目を出して裏布の有る間隠しとぢになす。或は地質によりては布の厚みを抄ひ綴ぢをする事もあり。裾に芯を入れる時は裾より56cm上まで綴ぢて絲を留める

○後の襠縫附裾に芯を入れる時は裾の部56cm上まで芯を通す豫猶を別縫としそれより上は四ッ縫ひとす。

○前襠附四ッ縫前下り縫目開かぬ様注意して2mm裏へ返るを以て其2mmの所を山に襠の裾山とを合せ裾に芯を入れる時は56cm上まで別に縫ひ前下りの縫込みは一針縫附けるのみあとは離して縫ひ上は四ッ縫ひになす。

○袖附　身頃と袖の鈎合の取れざるは最も見苦しきものなる故にまづ縫ふべき標を布き張つて線を引き袖の天標と身頃の天標とを合せて次に身頃折戻しの線をつけ袖下と襠上との鈎合を計り萬一鈎合不同の時はよく調節して後袖下の留めをなす。

○袖下留の仕方 袖下縫ひに近き一方より針を2本の絲にて身頃襠附終りキセ山と襠上の終り襠の眞中と片方の身頃の襠は終りキセ山とを極めて少し抄ひ元の袖下縫の片方に針を通し戻してシッカリと結び留めをなす。其の絲を1本は4cm殘して切り1本をつづけ身頃の折戻し縫代を考へ5cm位は半返し縫となし其他は細かく縫ひ終りに至りても袖附留めの5cm位は半返縫ひとして絲を留める。此の折は袖に返し袖幅の縫込みは袖下の縫目に綴ぢつけておく。裏は後袖幅の終りの縫代を三角に折り其の際より針を通し(2本絲を以て)裏身頃襠上の終りキセ山を前後一時に通し元の袖下の袖幅の縫目の上に針を戻しシッカリ結び絲は1本は切り1本にてつ

づけ縫ふ故に裏は身頃にも袖にも折り戻しの要なく其のまま縫ふ折りは身頃に返す。

○衿綴　脊より衿肩の丸味まで表裏を揃へ乳附より下は表は標入通りの裏は標より2mm淺き所衿附をなす。前丈は表裏全く同じにて少しもゆるみたるみなく裾口にて表布2mm裏へ返して衿綴ぢをなす。針目大きすぎぬ樣絲もつらぬ樣に注意を要す。

○乳挿へ及び乳附　小裁羽織にて述べしと同樣乳の左右を取りちがへぬ樣向きの相違せぬ樣注意してシッカリと裏乳附の標に衿附の標より1cm出して綴ぢつける。

○衿附　脊より衿肩の丸味までは衿の折山より2mm内を乳附にて4mm内をそれ衿下まで同じく4mm内を裏身頃衿附標と合せ乳より上は衿肩廻りは衿を少しゆるくそれより下は身頃衿共丁度同じ位衿もゆるまぬ樣加減して待針し絲の引けぬ樣掛針して縫ふ乳附の所に至らば2針3針返し縫ひにし衿肩廻りは特に針目を小さく注意して縫ふ。

○衿先き縫及び衿紵　衿縫附端より6mm内を衿附の折山より3mm深き所と衿附の折山とを合せて待針し芯の部は衿附の方におき其の芯のある卽ち仕上げて衿の表になる方を少し心持男女共加減して衿布輪の端5mm殘してそこまで縫ふ。衿附の折山にて身頃丈とピッタリになる樣衿附の方に折りを返し折込みの部は少し衿幅を控へ衿附に綴ぢつけ尙丁寧に幅の部も綴附て表に返し衿先きの角を整へて衿紵の待針す。衿紵の折山より2mm内を身頃は表布1枚にのみ針を通し丁寧に紵ける衿肩廻りは特に注意して衿縫附の縫目の見へぬ樣紵ける。

○衿の躾　衿附の折山より3mm控へて身頃を折返し衿附の折山より1cm入りたる所に躾をなす。衿下部に簡單に飾りをなし上は衿肩にて止める。

衿附四ツ縫の仕立方(袋衿)

○衿折は前と同じく初めになし落付かせて衿縫の合標をなす。此の時衿の表に標の出でざる樣注意す。

○袖縫　袖口布を裏に縫附表裏袖口を合せて縫ふのみにて止めおく

○胴接ぎ脊縫の綴ぢを入れ前下り縫前襠附前と同じ。

○衿綴をなす綴方前と同樣。乳挿へして乳を綴附ける。

○衿附　衿附の釣合キセ等は前と同じ衿丈の天標を脊の縫目に宛て衿肩丸味の所まで待針し一旦衿と身頃との釣合を驗しそれより前身頃と襠を卷き疊みとなし衿幅にて包み衿附の合標を合せ向ふは折山より2mm淺き所に待針し掛針にかけて縫絲の釣らぬ樣兩方キセの狂はぬ樣注意しつつ縫ふ衿肩明きの所に至らば1針針を返して手前の衿は離し身頃と衿の裏の方(衿肩の所のみ表になる方)のみ縫ひ片方身頃も之と同樣に裾にて終る。

○衿先き縫ひ　衿の附初めより2cm外を幅は6 m内を表衿の方は衿附の折山より3mm幅によりたる所と裏衿の方のキセ山とを合せ表衿を少しゆるめ加減にして絲をゆるく縫ひ衿附終りにて身頃より出でぬ樣ピッタリ衿附の方へ折り返し布の厚み丈幅を控へ衿附に綴ぢつけ尙丁寧に幅の所も折り込みを芯に綴ぢ附け先きに絲をつけて衿肩の衿幅一方離し置きたる所よりスルスルと表に返す後返した所を紵ける。

衿を落付かせて躾をなすこと前に同じ。

○袖附表袖は廣げて全部縫附前と同樣身頃の折戻しに注意し袖丈の標より3mm上にて止めおく折りは袖に返す。

裏は裏身頃と袖裏とにて表布を挾み前袖下20cm明け殘して縫ふ折りは身頃に返す。

○後襠附　裏袖附後表に返して普通襠を四ッ縫ひになす。

○袖附留　袖口留及び袖下丸味，袖附留は表身頃，表袖，後の表袖後身頃裏後身頃，裏袖，前裏袖と2本絲にて針に通し(此の際裏袖は2枚とも布を三角に折り）布を行儀よく左手指先にてささへ今一度絲を廻して同所へ針を通してシッカリと結ぶ絲の1本は4cm殘して切り1本を其まま續けて袖下標の通り袂まで縫ふ。次に袖口留をなし（注意すること前の通り）袖口下を四ッ縫ひに袂丸味を整へ表へ返す後返した處を絎ける。

第四節　女物袷羽織仕立方

男物と異なりたる所は袖に振り口あり身頃に身八ッ口あり從つて襠に上幅あるのみ。

縫方の大方は男物と同じ袖振り口の縫方は着物と同じ後襠附をなさば襠上終りにてすくひ留めをなし其の絲を切らずして身の八ッ口を縫ふ前襠附をなさば續いて前身八ッ口を縫ふ。

袖附の仕方着物と同じ裏袖附は身頃に返す。

乳附は乳の重ね方男物と反對なり一ッ身羽織の時說明したり。

薄地物又は皺のよらぬものは衿附を四ッ縫（袋縫）にする方よし男物と同樣縫方順序は胴接し（前後とも）脊縫綴ぢ前下り縫ひ前襠縫附身八ッ口終りまでそれより衿附と及ぶ衿附の注意も男物と同樣

表に返して躾す。

次に後襠を縫附身八ッ口まで續けて留める次に表袖附留めは着物と同じ次に裏袖を縫附く裏袖前身に於て10cm殘して縫ふ折は身頃に返し殘して表に返したる所を絎ける。

女物綿入羽織仕立方

1 仕立の初めに於て衿を折り壓をかけおくこと袷羽織に同じ。

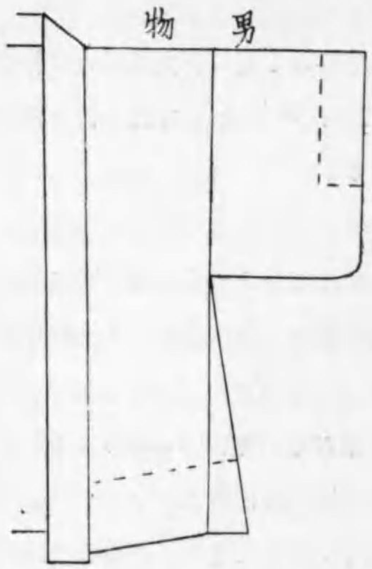
2 袖縫　着物と同じ袖口振り口共に縫ひて含み綿をなす。袖口の出梳は3mmを普通とす。

3 前後身頃の胴接，前下縫，胴接及び前下縫は1mmのキセにて表より躾をかける縫目はキセなき故小針に縫ふ。

裏袖附留　袖下幅標の所にて一方後袖の方を三角に折り袖の一方より針を通す（2本の絲にて）身頃襠附終り前後とも1mm抄ひ片方の袖幅の所へ戻りシッカリ結びとめをなす。絲1本は切り1本にて裏袖を縫付ける折はやはり身に返す。

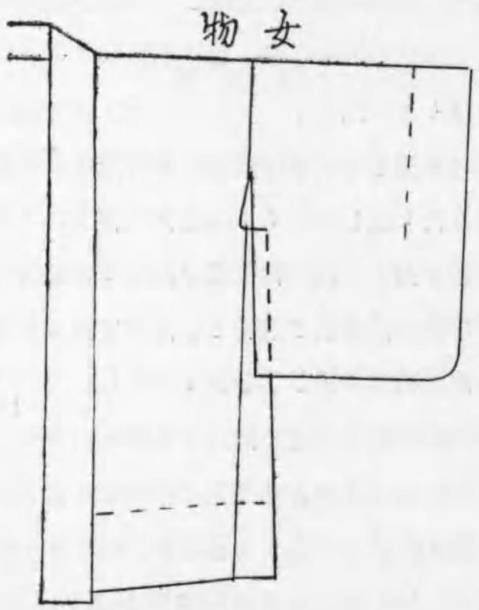
前身頃を缺き落して袖口切と襠とを取るは袷羽織と同樣なれども單羽織は裏附羽織の如く裾の折り返し多からざるを以て襠丈に不足を生ず。故に前身頃に補ひ切を出して缺き落し丈を長くす普通着尺地1反を以て共肩當を取る場合は前身頃と肩當とを續けて裁つを以て襠丈は充分なり。從つて前身頃より補ひ切を出す要なし。

4 襠の胴接ぎ前後の襠附襠の胴接は身頃と同じく1mmのキセにて表より躾をかく後襠附は後身頃裾天標と襠の裾天標とを合せそれより左右待針して襠丈の標より丈までを縫ひ2mmのキセにて身頃に折り返す。表に返して裾口10cmばかり躾をかける。次に前身頃の裾山と襠の裾天標とを合せ針を打ち裏の方は前下



り縫のキセの開かぬ様注意して針打ち縫ふ時は前下りの縫込みのよく落つく様1針のみ縫ひつけあとは離し襠丈まで縫ふ折りは身頃に返して裾口10cm躾かける。

5 襠先き縫　上襠附終りたる所より外に3mmの所を裏表合せ縫ふ裏に含み綿を綴ぢつけて表に返し躾す次に八ッ口の留めをなす。留めは表襠附キセ山の所襠先き1mm離れた所より針を通し(2本絲にて)表襠裏襠裏襠附キセ山の所に針を出し1mmの針目にて初めの表襠附キセ山の所に歸りシッカリ結び留め其の絲1本は切り1本の絲にて八ッ口を縫ふ着物と同じく標より2mm外を縫ひ裏に含み綿を綴ぢつ



けて表に返して躾す。前後とも同じ。

6 袖附　着物と同様裏袖附の折は身頃に返す。

7 綿入　方法着物と同様。

8 衿綴　袷羽織と同じ。

9 乳拵へ　乳附衿附衿先縫衿紵等皆袷羽織に同じ。

男物綿入羽織仕立方　袖口振り口なく身頃に身八ッ口なきが女物と異なれる所にて他は女物と同様。

袖は袖口を四ッ留めにして袖口下袂丸袖下全部表裏を別縫ひにす袖附留めは表裏別に留めをす表は袖幅標の袖下キセ山より針す。

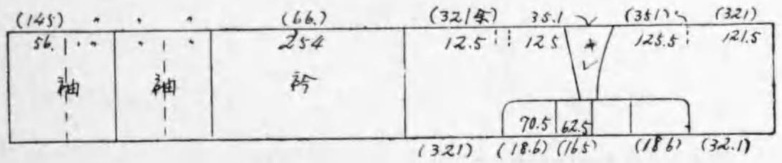
第五節　本裁單羽織

仕立上寸法は袷羽織と大差なし。

裁切寸法は袖丈衿丈は同じけれど身丈に大差あり。卽ち袷羽織は1反の布を以て表を裁ち標附身丈より長きだけ裏に折返す故折り返りの分多ければ裏身丈短かくして足る。

されど單羽織は裏への折り返し多くを要せず普通男物單羽織地は1反の長さ10m位なり普通着尺地1反を以て裁つ時は肩當布をも取得女物は袖丈の長短によりて一樣ならず。

並幅980cm(2丈5尺8寸7分)を以て男單羽織の裁方



(仕上身丈＋23cm)×2＝衿丈＝254cm袖丈×4＝224cm
5尺6寸

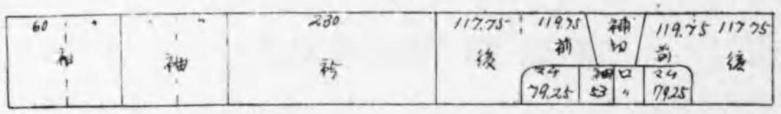
{用布－(袖丈×4＋衿丈＋補ひ切)}÷4＝後身丈

{980cm－(56×4＋254＋115cm)}÷1225cm

後身丈＋補切＝前身丈　1225＋115＝134cm

此の補ひ布丈は用布總尺の長短標入身丈の長短に關係せず裾まで要する襠丈及び袖口布の長短によりて差異を生ず。卽ち袖丈短かき時は（男物は袖を皆付ける故に襠丈短かくを要し女物は袖附は少なく故に襠丈を長く要する故女物の時は補布の寸法も從つて多くを要す。）

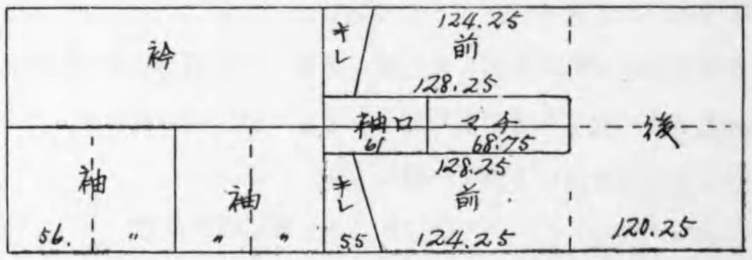
並幅970cm(2丈5尺6寸)を以て本裁女物單羽織の裁方



{用布－60cm×4＋230＋(98＋112.5cm)×2)}÷4＝19.75cm
裾の返り分

98cm＋197.5＝裁切後身丈

二幅物を以て500cm（1丈3尺2寸）男單羽織の裁方

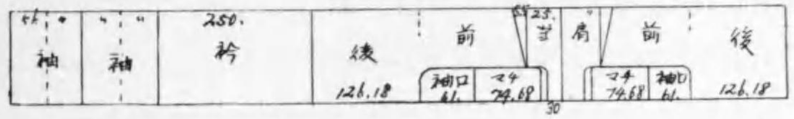


103cm＋5－53cm＋1＝515cm襠丈

標丈入後身　肩こしの繰り　袖附　襠上衿代

袖丈×4＋124.25cm×2－4＋5.5＝500cm

並幅1100cm(並通1反2丈9尺)を以て肩當附男單羽織の裁方



{用布－(袖入×4＋衿＋肩當の分＋前下×2＋仕上繰越し×4)}
÷4＝裁切後身丈　{1100cm－(56×4＋250＋110cm＋4.65×2＋
5cm×4)}÷4＝126.18cm

後裁切身丈＋仕立繰りにし×2＋前下＝前裁切身丈

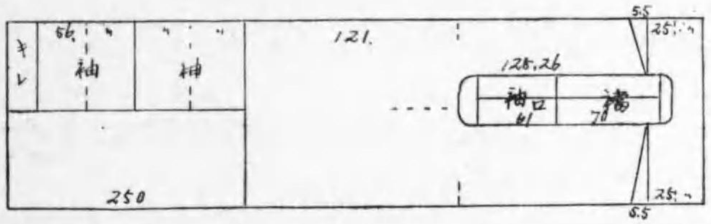
126.18cm＋5×2＋4.65cm＝131.83cm

後裁布身丈＋仕上繰りし－袖附＋襠上の衿代＝裁切襠丈

126.18＋5－53＋1＝74.63cm

總尺長くして身丈のあまり長くなる時は（肩當も餘り長くを要せず）最初より裁切後身を定めて布を殘しおく方よろし。

二幅物553cm（1丈4尺6寸）を以て肩當附男物單羽織



衿丈＋後身丈×2＋肩裏丈×2＋前下＋肩の繰越し＝用布

250＋121×225×2＋4＋4＝553cm

例へば103cm

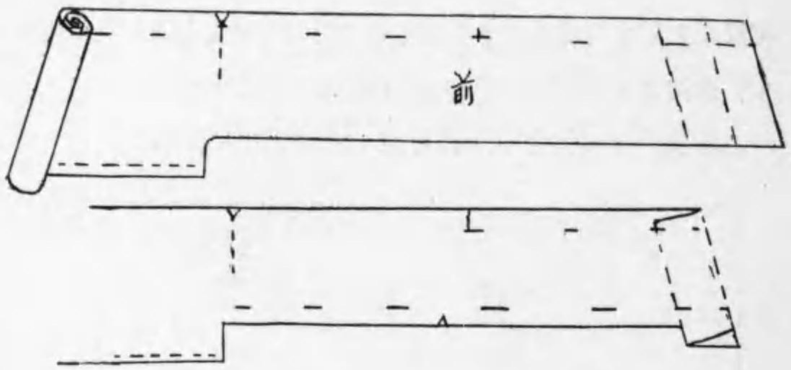
標入方　袖は男女ともに袖口布を附く男物は人形なく皆附けるなり

其他單衣の袖標入と同じ(上仕立は別)

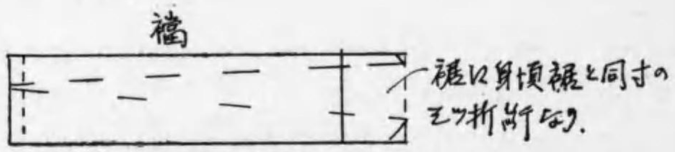
肩山を 2cm繰にして裾口を揃て四ッ折り標入

女物には身八ッ口あり裾の折り返しは三ッ折りとして幅は前後とも同じ。

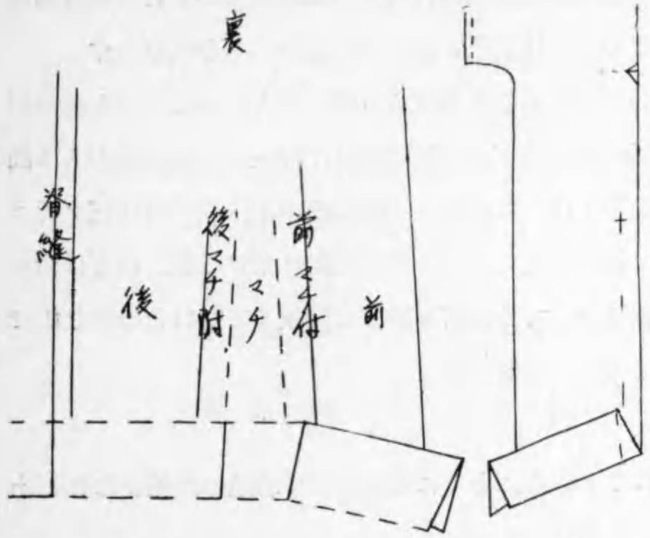
前下り斜に標入る



標の通り裾三ッ折りにして假躾をなして後に襠附の方及び衿附の方も標入れる。

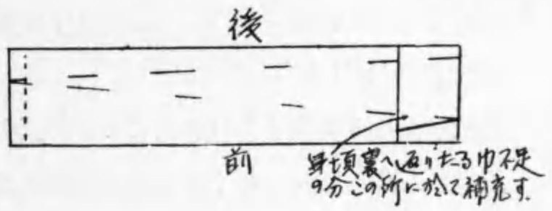


襠上は細く三ッ折り縫けて左右表を合せ重ねて標入れす。

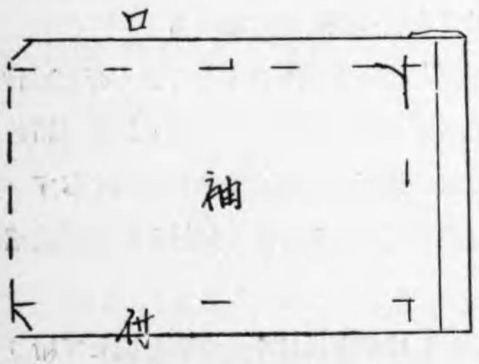


多く斜になりたる方を前身頃に縫附く女物の襠上は 2cm の幅を普通とす。

布幅狹く裾の折り返し三ッ折の幅普通なる時は裏に折り返る分表と縫目揃はず其の場合上の如く裏に返りたる幅の一ばいに標入れす。



故に幅の不足の分は前襠に於て補充す。



袖上仕立標入

薄物又丁寧に仕立んとする時は上の如き標入をなす即ち兩袖表 2 枚合せ丈の端を揃へずして一方を 2cm 長く置きて標入れす

仕立方　衿折りを先きにし

壓して落つかせるは裏附羽織に同じ絽又は紗の如き内の躾絲の透き見える地質のものは共色の絲を以て躾をなし合標をなす。

袖縫　袖口を合せ裏附の如く袖留めの所に褄を作ることなし袖口留めも袷と同樣に留め袖下は後袖の折戻に注意して袖口布のある間半返し又1針拔きにして袂袖下と縫ふ袖下上仕立の時は三ッ折りとして小さな針目を表に大針に出して絎け附ける袖口の方は袷の如く出枇を出さずして袖口布の凹まぬ樣躾して袖口布の奥を伏せて絎け附ける丈の方は絎けず。

身　　頃

1 いつの時にても標入れまでに脊縫をなす普通二度縫ひなれど上仕立の物は袋縫ひになす。

2 肩當布は別に脊縫ひをなして端は5mmの幅に三ッ折りをなし後に脊の縫目に綴ぢ附ける。

3 前襠附上より裾山までは裾山にて1針返し折返しの所は襠の標附けにて說明したる如く身頃の布幅狹き時は狹き丈襠の方にて持出して縫ひ三ッ折の内へ折り込む所は1針2針丈にて留めおけばよし。2mmのキセにて身頃に折りを返し襠布の縫込み身頃縫込みは落附く樣伏せて身頃に躾し後に絎ける。

4 衿附四ッ縫(袋縫)裾の折返し標より三ッ折りしてよく布を落付かせ躾をかける衿先縫乳の拵へ及び乳附は袷羽織と同樣(絎衿になす時は後襠つけ裾全體の裾三ッ折絎始末後に衿附をなす。)

5 後襠附2mmのキセにて後身頃に折りを返し縫込みの始末前襠附と同樣。

6 裾絎針目表には小さく縫目には必ず表に小さき針を出して絎け

る。

7 袖附女物は單衣の上仕立と同じく男物は綿入羽織の表の仕方に同じ女物は袖振り口及び身八ッ口あり袖附身頃折戻しに注意して肩當布は袖附折戻しの端に絎け附ける前後とも襠附の縫込みは裾より肩當の所まで絎ける。

第九章　寢冷知らず

第一節　二三歳及三四歳用

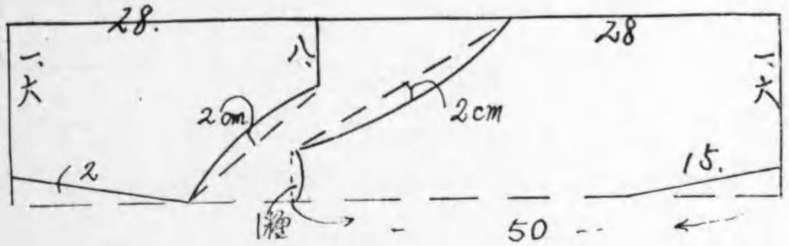
二三歳小兒の寢冷え知らず

(1) 並幅69cm(1尺8寸)の布裏表2枚を以て寢冷え知らずの裁方

幅二ッ折にして裏表重ねて裁つ

紐丈50cm2本腰の方

紐丈55cm1本首の方



仕　立　方

1 裾口を合す(裏を2mm縫込んで折は裏に返す。)

2 後脚の上を縫ひ折は裏に返し上端に紐を挾みくりたる所は1寸縫ては1針返して縫ふ折は裏に返して角を正しくす。

3 前脇を以て後脇を挾み四ッ縫とす脇の終りにて針留めをして絲

を切らずして上脇斜の所を裏布を少し縫込んで一寸縫ひては1針返して縫ふ折は裏に返して。

4 前を以て後脚を狭み内股を縫ふ後脚のある間は四ッ縫ひそれより上は前の表裏を縫ひ合せ表に返して表よりへりを取る。

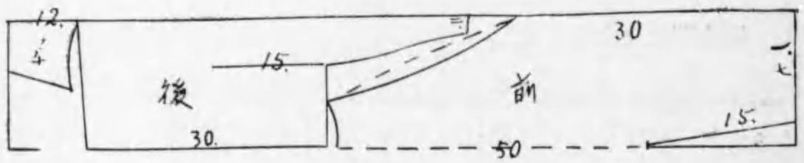
5 表に返して落ちつけ顎の紐を附ける。

(2) 並幅表裏2枚を以て3.4才寝冷え知らずの裁方

紐幅3cm丈60cm1本

紐幅3cm丈40cm2本

50cm＋30cm＋12cm＝92cm用布



仕　立　方

1 前後表裏を揃へマチの裾口を合す（裏を少し縫込んで裏に折を返す。）

2 前の上脇斜の所を表裏縫合せ裏に折を返す（縫合せる時裏布を2mm縫込む）

3 後脚にて前脚を挟み四ッ縫ひになす上端をシッカリ留めおく。

4 後布の上を縫ひ裏に折を返して脇の所をシッカリ留める。

5 後脚の表裏にて襠をはさみ四ッ縫になす。

6 前脚の表裏にてマチを挟み四ッ縫ひになす。

7 胴廻りの表裏にて股明きを挟み四ッ縫ひになす胴廻布長き時は前にて切る。

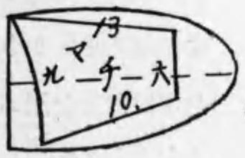
8 胴廻布の後上を縫ひ裏に折を返し端に紐を挟みて合標をなし縫へる丈両端より縫ふ。

9 表に返し形を整へ顎の紐附をなす。

(3) 4.5 才小兒用寝冷え知らず。

表裏とも 2幅物57cm

紐幅3cm丈23cm4本



仕　立　方

1 身頃及び襠の裾合せをなし折は裏に返す。

2 襠の上を表裏縫合せ折は裏に返して表に返す。

3 前足し布斜の方を表裏縫合せ折は裏に返して表に返す。

4 足し布及びマチ附卽ち前脚の表裏にてたし布の眞直な方を挟み（上を揃へて針を打ち裾にては前脚の表裏にて襠を挟みて針を打ち襠と足し布を表の方に襠を裏の方に當て針を打ち上より返し針で裾まで縫ふ。）

5 後脚の表裏にて襠を挟み四ッ縫ひなす端にて留め其絲にて後を縫ふ。

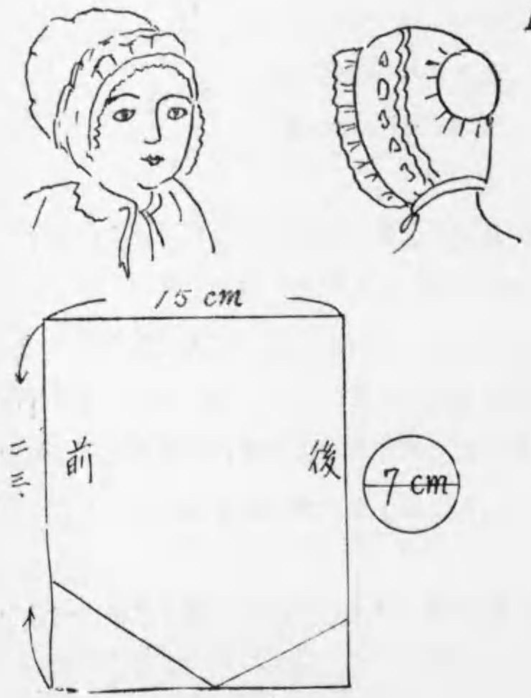
6 脇明を小針に縫ひくぼみたる所に鋏を入れて折は裏に返して表に返す。

7 顎の縫合せの合標をなし後前肩にて後肩を挾み四ッ縫となし續きて兩方より顎を縫へる丈縫ひ折は裏に返して表に返して殘りたる所を小針に絎る。

8 後紐附肩より8cm下りたる所左右及びそれより更に12cm下りたる所の左右にシツカリ縫附る。

第十章 帽　子　類

第一節 嬰兒用帽子



A

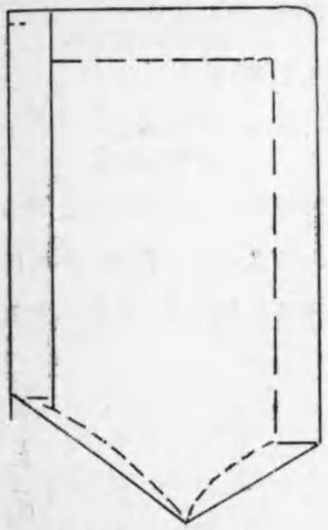
嬰兒用帽子は頭部の保護を目的とする故素地軟かきを選び白色を用ふるをよしとす。

帽子はすべて頭圍を計り基として割り出す。

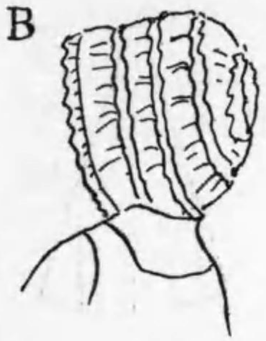
原型の取方

1 縱頭圍×½(凡23cm內外)

2 横深さ凡そ頭圍 ⅓15cm內外



B



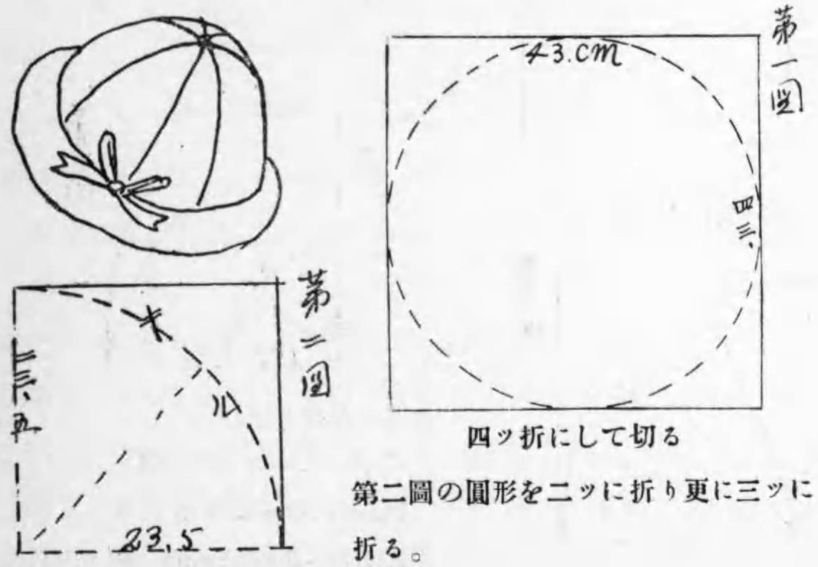
3 圖の如く縱の長さの凡そ ⅓ を幅の中央より前で繰り後は其の ½ をくる。

4 後の圓形共別切を以て直徑 7cm內外

Aの原型を基本としてピンタックの位置及び數だけ幅と丈を廣く且つ長く豫猶を加へて裁斷す。

原型の取り方 （シコロの裁方）

頭の深さに＋2cm＝43cm 43cmを方形に取る。凡そ41cm



四ッ折にして切る

第二圖の圓形を二ッに折り更に三ッに折る。

第三圖

第四圖

頭圍＋2cm＝47cm
└此の2cmはゆるみ

凡そ 45cm

47cm÷6＝7cm8强
└分數に等分す

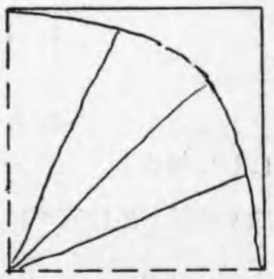
頭圍に2cm のゆるみを加へたるものを 6 等分しそれに兩方の縫代 1cmを加へたる寸法に切る。

同じくつばの裁方

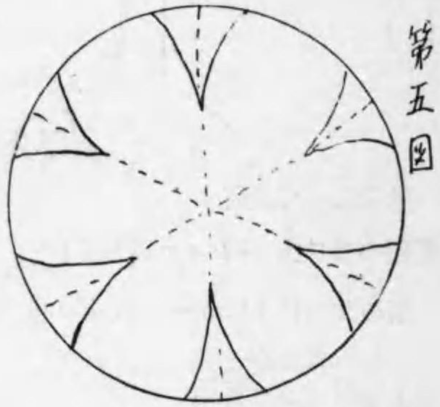
頭圍＋ 2cm＝47cm 47cm を方形に取る。凡そ54cm

第一圖

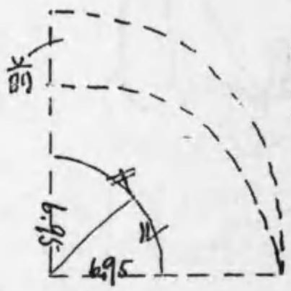
四ッ折にして丸く裁つ



第二圖



第五圖



第三圖

頭圍の直徑を求む

47cm÷3.14cm＝14.9强

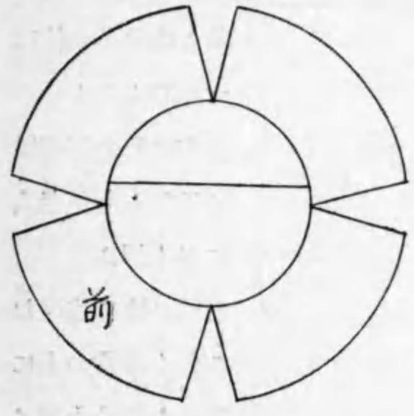
14.9cm÷2＝7.45cm

7.45cm－5＝6.95cm

女學生用帽子

シコロの裁方

先づ頭の深さにゆるみを加へ



たものを方形に取る。凡42cm＋2＝44cm裏表共同寸法2枚を要す。小兒用と同樣圓に裁斷す後表裏を合せて躾をなし頭圍に 2cmのゆるみを加へたる寸法に圖の如く襞を取る。

つばは小兒用と同樣につき省く。

第十一章　被　　布

第 一 節　小裁，中裁，本裁被布

普通仕立上寸法

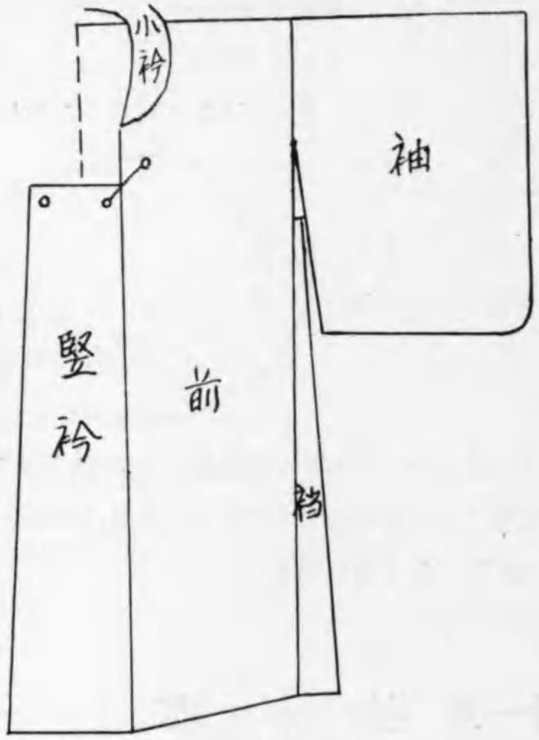
殆ど羽織と同じけれど身丈は羽織より 2cm乃至 4cm長きを普通とす。

竪衿下り　着物の衽下に2cm乃至4cmを加ふ。

竪衿幅　下の幅は着物の衽幅と同じく上の幅は小裁にて 8 mm 中裁にて1cm本裁に2cm詰める。

小衿丈　衽下りの 2 倍に兩端の縫代4cmを加へたもの。

小衿幅　好みにより一樣ならず廣き時は小裁中裁にて 10cm 內外本



裁にて12cm内外狹き時は7cm位にする時もあり。

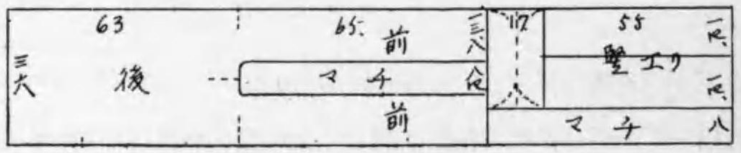
被布は衿の形羽織と異なり小兒老人に多く用ふ。

羽織の時に述べたる如く着物の上に着るもの故小裁と雖も一ッ身裁より三ッ身の方格恰よろし袖無被布の如きは一ッ身裁の方よろし。

被布は一身三ッ身四ッ身迄は小衿丈横切を用ふるも差支へなし。

本裁に横切を用ふるは見苦しくよろしからず。

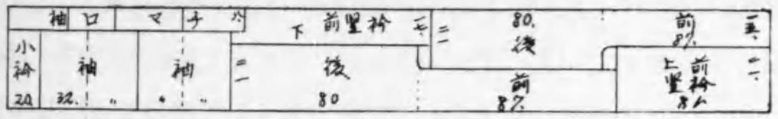
並幅200cm(53寸)を以て一ッ身袖ナシ被布の裁方



積　　方

裁切後身丈×3+肩の繰こし×2+前下−竪衿下+小衿丈

並幅396cm(1丈5寸)を以て三ッ身裁被布の裁方(片面物)



積　　方

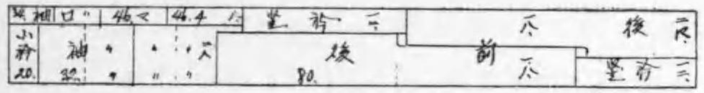
襠丈裁切46cm以上

袖丈×4+小衿丈+裁切身丈×3+衿肩の丸味の分+前後の差=用布　　32×4+20+80×3+1+7=396cm

{用布−(袖丈×4+小衿丈+肩の丸味+前後の差)}÷3=後丈

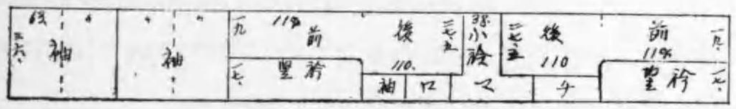
{396cm−(32×4+20+1+7cm)}÷3=80cm後丈

並幅兩面物396cm (1丈5寸) を以て三ッ身被布の裁方



積　　方　片面物と同じ。

並幅763cm(20寸)を以て中裁被布の裁方(長袖)



積　　方

袖丈×4+後裁切身丈×4+前後の差×2+小衿丈=用布

63×4+110×4+9×2+38cm=768cm

{用布−(袖丈×4+小衿丈+前後の差×2)}÷4=後身丈

{768cm−(63×4+38+9cm×2)}÷4=110cm

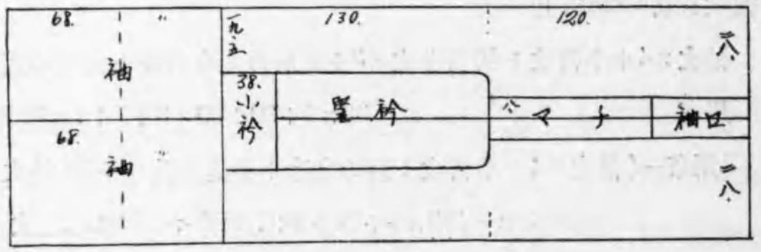
後身丈+前後の差=前身丈　110cm+9=119cm

裏用布の積方　羽織と殆ど同様　袖は表と同じ。

標入身丈×2－表裁切身丈＋5cm或はそれ以上＝裏身丈

（袖丈＋裏身丈）×4＝用布　袖丈×4（後身丈＋裏前丈）×2＝用布

二幅物を以て中裁被布の裁方　裁切身丈長くして裾の折り返し多き時。



後身頃裾の返り25cm前身頃裾の返り30cm内外ある時は此の裁方よろし。

（裁切袖丈＋標入身丈＋裾の返）×2＋10cm＝用布

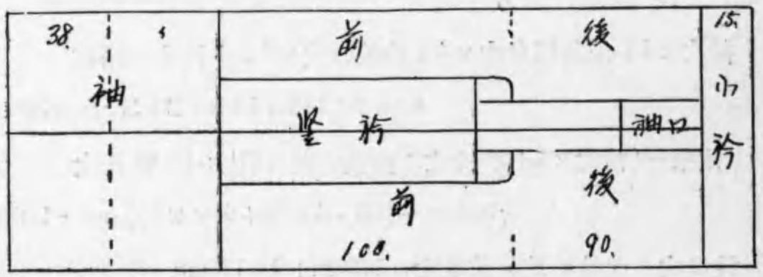
(68＋90＋30cm)×2＋10cm＝386cm

｛用布－（袖丈×2＋10cm)｝÷2＝裁切後身丈

{386cm－(68cm×2＋10cm)}÷2＝120cm

後身丈＋前後の差＝裁切前身丈　　120cm＋10＝130cm

二幅物を以て裁切身丈短かく裾の返り出ない時



小衿は横切にて取る。袖は元禄

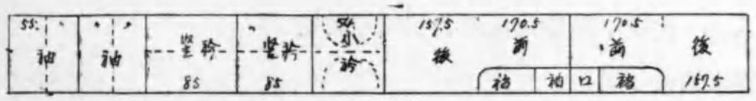
裁切袖丈＋標入身丈＋裾の返り×2＋前後の差＋小衿丈＝用布

(38＋85＋5cm)×2＋10＋15cm＝281cm

｛用布－（袖丈×2＋小衿＋前後の差)｝÷2＝裁切後身丈

{281cm－(38×2＋15＋10cm)}÷2＝90cm　90cm＋10＝100cm

並幅の布1反（1100cm）を以て本裁被布の裁方



羽織に於て衿丈を定むる如く被布にありても竪衿丈を定む。

標入身丈＋肩の繰りこし＋前下り－竪衿下り＋5＝裁切竪衿丈

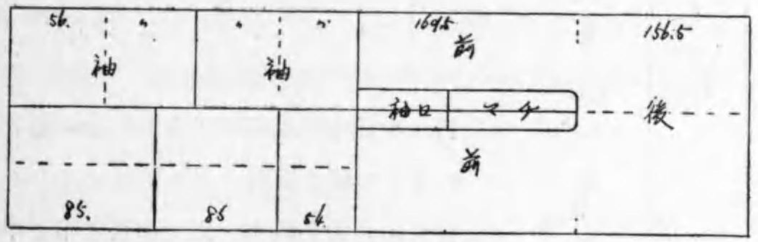
100cm＋7cm＋4－25＋5cm＝84.7cm

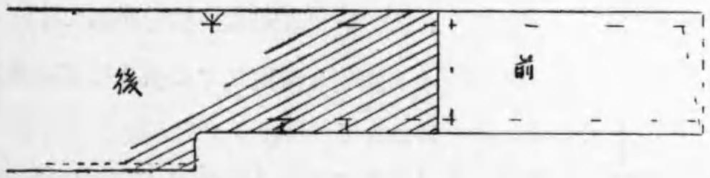
｛用布－（袖丈×4＋竪衿×2＋小衿＋前後の差×2)｝÷4＝裁切後丈

{1100cm－(55×4＋85×2＋54＋13cm×2)}÷4＝157.5cm後丈

＋前後の差＝前丈　　157.5cm＋13cm＝170.5cm

二幅物550cm（1丈4尺5寸）を以て本裁被布　普通物





袖大の四倍と竪衿丈の二倍に小衿丈を加へし物とを比べて長き方にて積る。

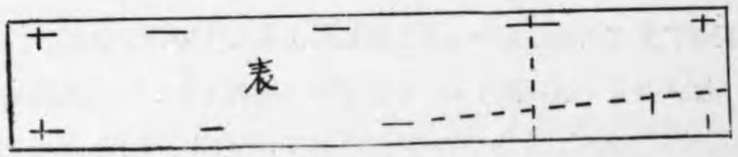
{用布－(竪衿丈×2＋小衿＋前後の差)}÷2＝裁切後身丈

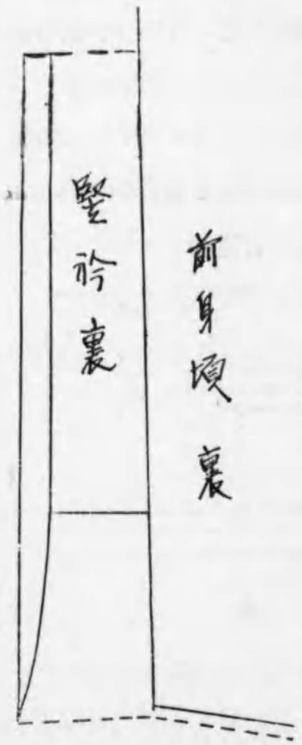
{550cm－(85×2＋54＋13.1cm)÷4＝156.5cm

裁切後身丈＋前後の差＝前身丈　　156.5＋13cm＝169.5cm

標入方　袖は小裁中裁本裁共羽織と同様

襠も羽織と同じ。





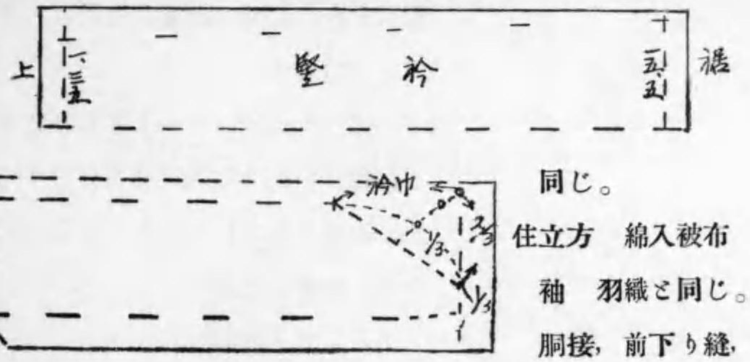
身頃も大體同じなれども羽織は前身頃衿附の標を乳附より下は漸次縫代を多くなせしが被布は竪衿の標より裾まで眞直なり。

竪衿　小裁中裁本裁にても竪衿布の裾を裏に返して縫ふ場合。

普通竪衿布を並布を以ての場合布を中表に二ッに折り左右の衿を重ねて。

小衿幅廣き時幅二ッに折りて更に丈二ッに折りて

小衿幅狹き時大人物は大抵羽織の衿幅と



同じ。

住立方　綿入被布

袖　羽織と同じ。

胴接，前下り縫，脊縫，前後兩襠附羽織と同じ。

竪　衿　大中ともに裏に返る時は標附の通り裏及び幅を先きに縫合せ躾をかける。

襠先き縫ひ　綿含み身八ッ口の留め及び縫方袖附等羽織と同樣。

綿　入　羽織と同じ方法にて入れる竪衿は後に衿綴を終りて入れる竪衿と小衿との間を縫ふ　綿は表に含ませ躾す。

裾の假綴　衿綴竪衿先上下とも3mm外を縫ひ（裏に返りたる時は上のみ）

次に竪衿の綿入

竪　衿　絎

小衿縫　縫方は小裁小衿縫にて説明せし通り。

小衿縫附　小衿の表芯裏の二ッ共に身頃の裏に合せて縫ふ　折は身頃に返し綿は程よく表身頃に含ませ小針に絎け附る。

袖口下　袖下　脊前襠に縦綴を入る。

竪衿を左右合せて適宜の位置にスナップを2組附る。

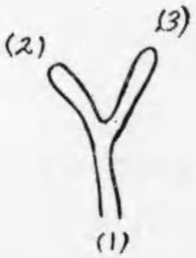
飾り紐附　大人物は形小さきものよろし子供物は稍大きなる花形等を用ゆ。

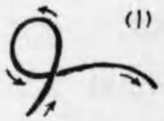
紐の兩端の中央にかかれる部を上に突き上げて靜かに締める。

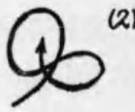
1. (1) を2と3の間へ。
2. (3) を1の上を通りて(2)と(1)の間へ
3. (2) を(3)の上を通りて(1)の穴より入る。

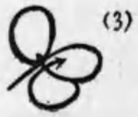
紐の太さに依りて一様ならず最初加減を見て程よきに切り兩端よりクルクル卷き共色の絹絲にて留めて形を作る。

かくの如く次ぎ次ぎに五ツの輪を作りて最初の紐の端を第1の輪を通して第5の輪に上より入れ裏へ返して









最後の紐の端にて之をおさへ初めの紐の端を第1の捻りの中に通して締める。

第十二章　本裁女物袷コート

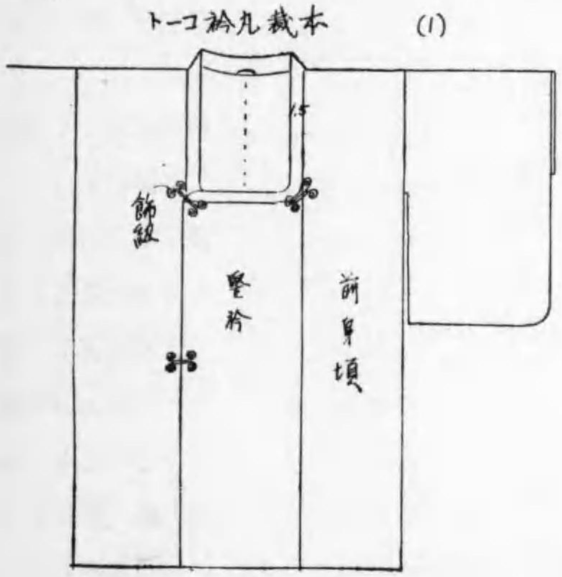
第一節　種　　類

1 半　コ　ー　ト

羽織を準標として羽織より稍長目に仕立夏用單衣コートは絽紗アルパカ等の類を用ひ冬物と雖もセル類は多く單衣仕立となしお召金紗等は主として袷仕立となす。

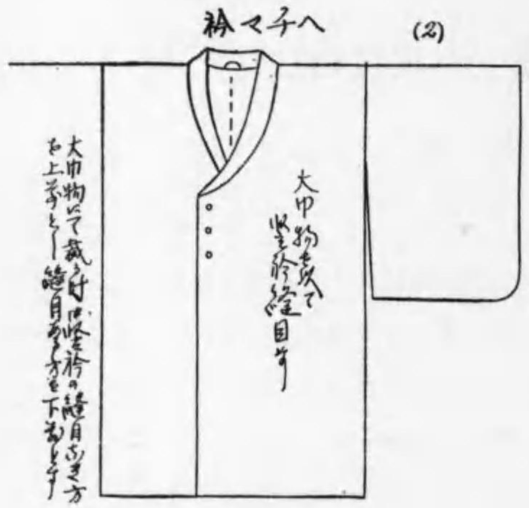
2 全コート（長コート）及び7分コート

長着を標準とし長着と同寸又は稍短かく仕立て7分になすことあり。長コートは多く冬用及び雨天用にして地質厚き羅紗等を用ふることあり。夏用にても銘仙紬等それぞれ防水の布を用ひ多く單衣仕立となす。



袷の種類　袷の形は時代の流行に依りて一様ならず今時使用せる數種袷の裁方縫方を左に。

第二節　本裁女物袷半コート



普通仕立上寸法

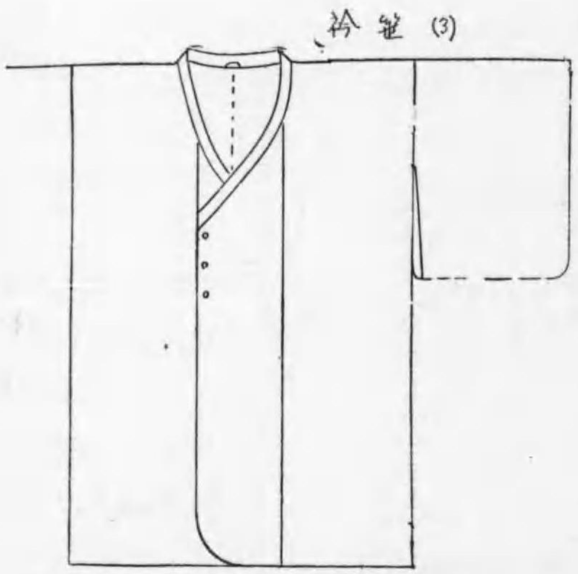
袖　丈　（羽織より8mm(2分) 長く）

袖　幅　羽織より3mm(1分) 廣く。

袖　口　羽織と同じ

袖　附　羽織より3mm(1分) 多く。

身　丈　羽織より4cm(1寸) 乃至6cm(1寸5分)長く。

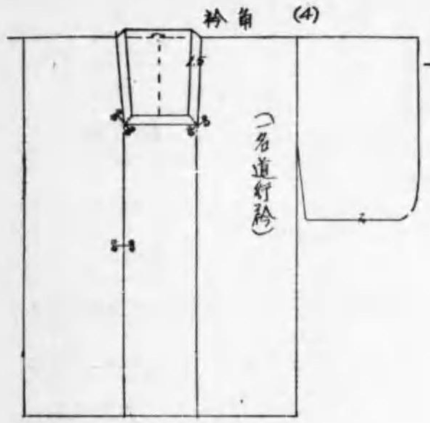


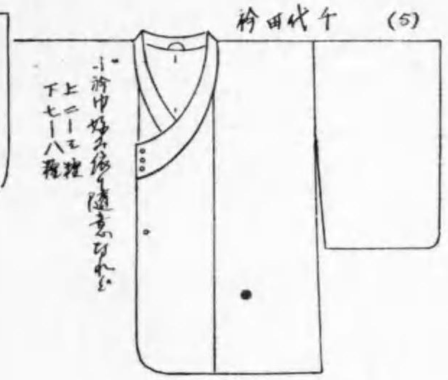
袷肩明　羽織と同じ。

肩の繰越し　羽織と同じ。

後　幅　羽織と同寸又は身八ッ口より裾までの間にて漸次2cm廣げることもあり

肩　幅　羽織と同寸（袖幅の廣き





丈3mm裄け廣くなる

前　幅　裾にて21cm乃至23cm

上にて19cm乃至21cm

脇にて幅の廣からぬ時は前幅は上も下も同寸竪袷附は眞直。

身八ッ口　15cm

竪袷幅　上下とも15cm(四寸)

小袷幅　前に説明せし通り。

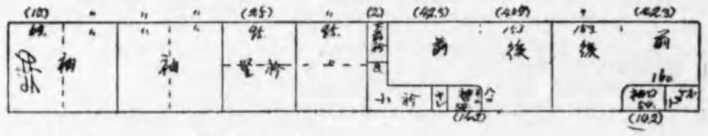
竪袷下り　小袷の形によりて一定せず。

ポケットの位置　肩より40cm (1尺5分) 内外を普通とすれど小袷の形によりて一定せず。

ポケット口の大きさ　15cm(4寸)

（注意）半コートと長コートの異なる點は身丈にして長コート身丈は着物着丈と同じなり他は半コートと同様。

並幅の布を以て袷半コート丸衿表の裁方



総用布1075cm(2丈8尺4寸)

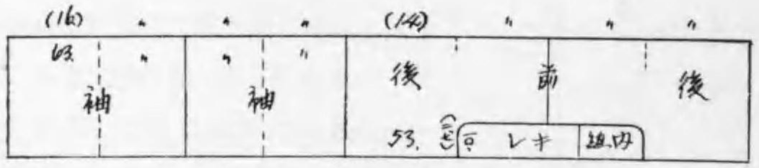
積　　方

{用布－(袖丈×4＋竪衿丈×2＋前後の差×2＋小衿)}÷4＝後身丈　　{1075cm－(63×4＋95×2＋7×2＋7cm)}÷4＝153cm

後身丈＋前後の差＝前身丈　　153cm＋7＝160cm

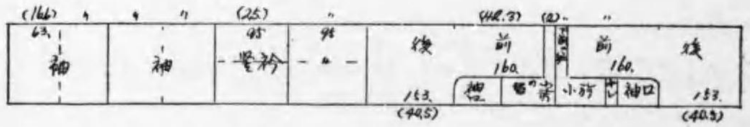
袖丈×4＋竪衿丈×2＋後身丈×4＋前後の差×2＋小衿丈
63cm　95cm　153cm　7cm　7cm
＝1075cm用布

並幅464cm(1丈2尺2寸)の布を以て胴裏の裁方



(袖丈＋身丈)×4＝用布　(63＋53cm)×4＝464cm

並幅 1082cm(2丈8尺6寸)の布を以て袷半コート表の裁方(替衿附)丸衿



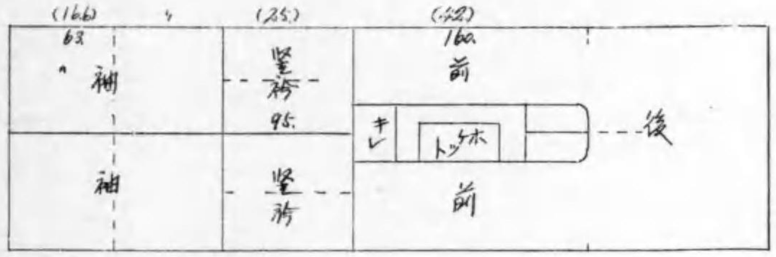
積　　方

袖丈×4＋竪衿丈×2＋後身丈×4＋前後の差×2＋小衿丈×2＝用布

63×4＋95×2＋405×4＋7×2＋7cm×2＝1082cm

{総用布－(袖丈×4＋95×2＋7×2＋7cm×2)}÷4＝153cm
竪衿丈　前後の差　小衿丈

大幅533cm(1丈4尺)の布を以て半コートの裁方(丸衿)

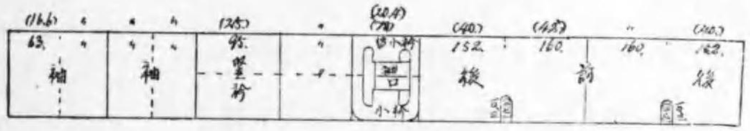


積　　方

袖丈×2＋竪衿丈＋後身丈×2＋前後の差＝総用布

63×2＋95＋152×2＋8cm＝533cm

並幅1151cm(3丈4寸5分)の布を以て丸衿コートの裁方(長尺物)丸衿



積　　方

袖丈×4＋竪衿丈×2＋小衿丈＋後身丈×4＋前後の差×2＝総用布

63×4＋95×2＋78＋152×4＋8cm×2＝1151cm

{用布－(袖丈×4＋竪衿丈×2＋前後の差×2＋小衿丈)}÷4＝後丈身　　{1151cm－(63×4＋95＋8×2＋78cm)}÷4＝152cm

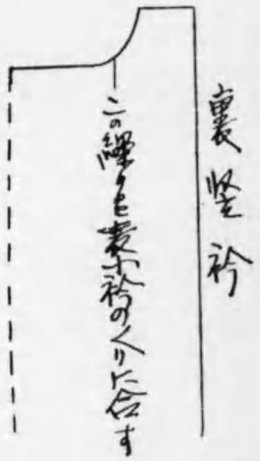
152cm＋8＝前身丈

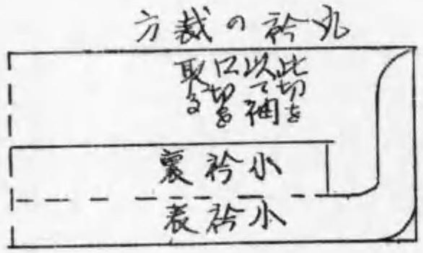
○小衿割出し裁切寸法　(丸衿)

積　　方

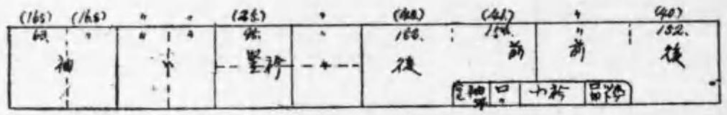
(2.3cm)(3cm)(3cm) (6.3cm) (5cm)(5cm) (20.4cm)
9 + 1 + 1 × 2 + 24 + 2 + 2 × 2 = 78

衿明き上り肩 肩代り縫 肩の縫代 竪衿下 衿幅 衿先縫代





並幅の布を以て角衿コートの裁方



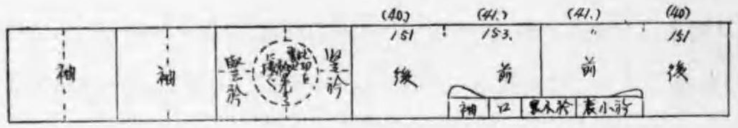
積　　方

袖丈×4＋竪衿丈×2＋前後の差×2＝用布

小衿布は前身頃より落したる布にて長さは

(仕立上り衿肩明＋竪衿幅＋衿附ゆるみ＋縫代×3)×2＝小衿丈

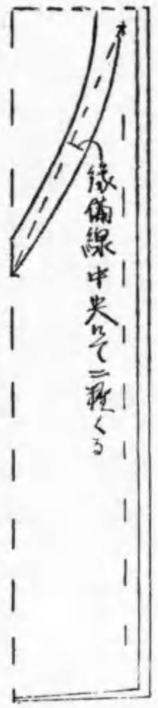
並幅の布を以てコートの裁方　(ヘチマ衿)



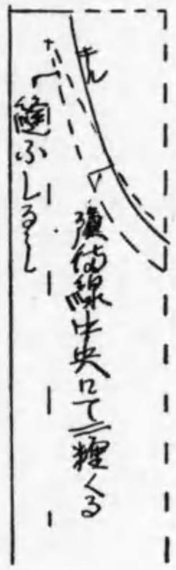
裏小衿丈不足につき竪衿先きの出切を接ぐ。

積方は角衿コートと同じ。

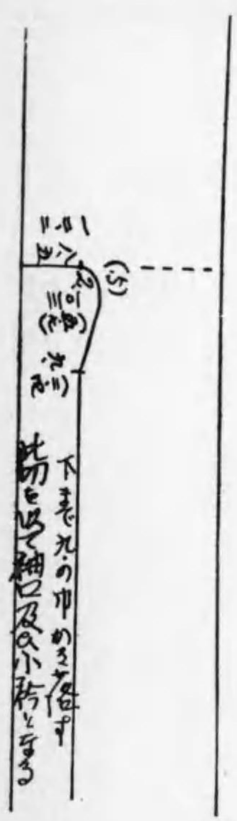
ヘチマ衿　單衣の時の裁方　布幅片方に寄せて折る



ヘチマ衿　袷の時の裁方

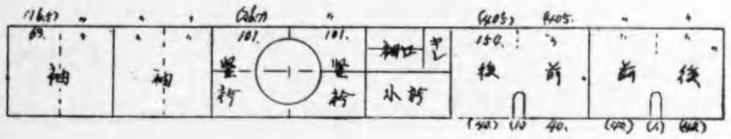


分解裁方　身頃



竪衿縫代多き方を裏とす。

並幅の布を以てヘチマ衿コートの裁方(長尺の時)



積　　方

袖丈×4＋竪衿丈×2＋小衿丈＋後身丈×4＋前後の差×2＝總用布

竪衿丈を求むる積方

仕立上身丈＋肩繰越×２－竪衿下り＋上下の竪衿先きの縫代＝竪衿丈裁切寸法

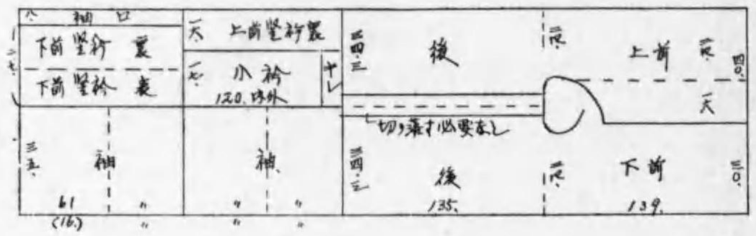
假に仕立上身丈100cmとして100＋2×2－10＋5＝101cm

笹　衿　へチマ衿と異なることなし只仕立小衿幅狹きのみ。

衿幅1.7cm乃至2cmとす前身頃より切り落したる布を用ふ。

瑞穗衿　衿幅裁切15cm位丈は要する小衿丈に4cm加へたるもの其他裁方に變りなし只小衿幅廣き爲に身頃前かき落したる切にては用をなさず別布を以て小衿となす。

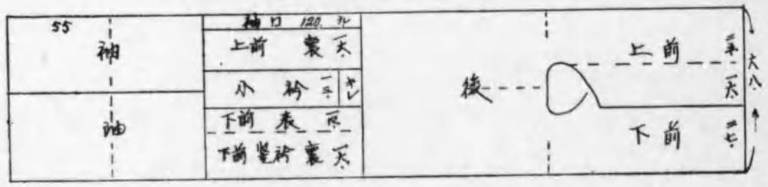
二幅物を以て女物コートの裁方　（へチマ衿）



積　　方

袖丈×4＋後身丈×2＋仕上繰こし×2＝總用布

同二幅物にて袖丈短かきを以て袖のみ幅にて取る（へチマ衿）

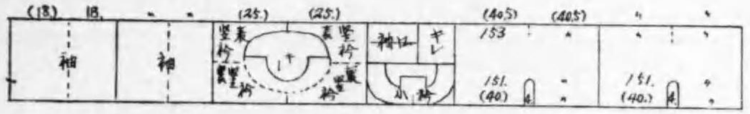


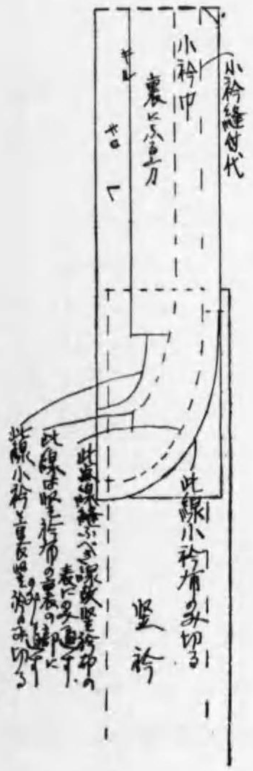
積　　方

袖丈2＋裏竪衿丈＋裁切後身丈×2＋繰越し×2＝用布

59×2＋120＋135×2＋2×＝504cm

並幅の布を以て千代田衿コートの裁方





積方　へチマ衿と同樣。

竪衿及び小衿の分解裁方

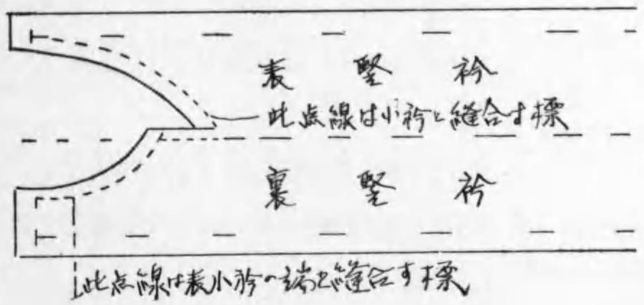
竪衿布最初丈を二ッに折り次に幅を二ッに折り其の上に小衿布を重ねて。

千代田衿竪衿を裁切り廣げて見たる圖

○標入方　（丸衿衿半マート）

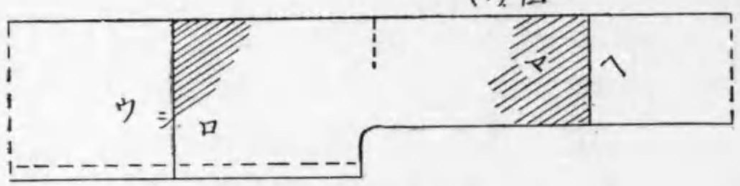
1. 袖　女物袷羽織と同じ。但し袖附上仕立となす時は縫目は兩割縫となす故に袖幅の標入をなす時キセの餘裕を入れる必要なし。

1. 身頃　標入に先立ちまづ表裏共脊縫をなし上仕立の時は其の縫目を表身頃丈兩割になすを以て縫代1.5cmとす。裏は普通片返しとす。表裏共揃へ裏で袷羽織と同樣なれど前幅上下共同寸なり。



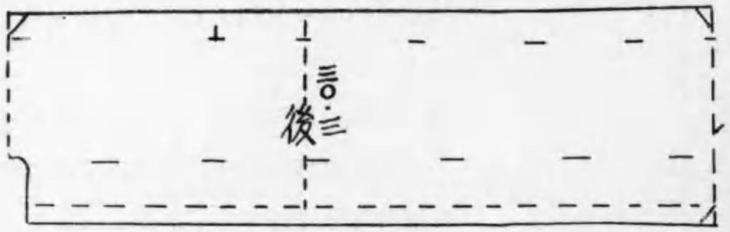
並幅裁の標入

(1)圖

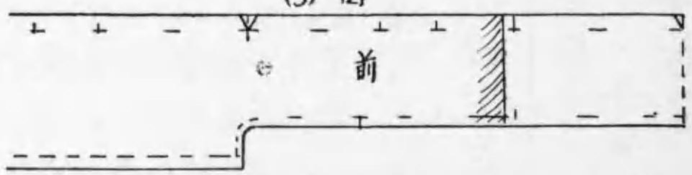


身丈を定め繰越しを付けて四ッ折りしたる圖

(2)圖



(3)圖



（注意） 小衿と竪衿との關係は縞物なれば縞目をキッチリ合せ無地のものにても其の布目をよく合せざれば見苦し。

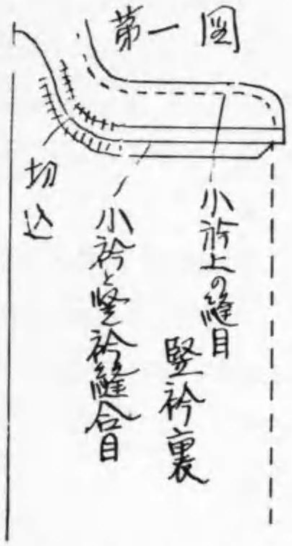
仕 立 方

1. 袖　袷羽織と同樣なれども袖口枇なし。
1. 身頃　表裏胴接の標を合せて胴接なす折りは裏に返す。

竪衿の標入

1. 脇縫をなす兩割りにつき，極めて小針に4cm程縫ひ進みては半針後へ返しつつ縫ふ終り脊の中綴をなす。

第一圖

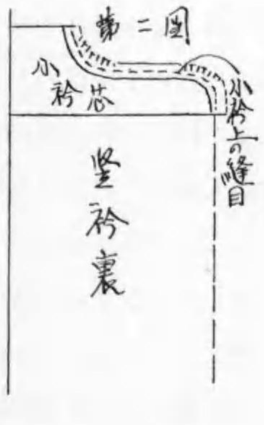


1. 身八ッ口　後前とも縫ふ2本の絲を以て四ッ留めにす。
1. 表袖附
1. 裏袖附　終りて前後共2本の絲を以て身八ッ口留めと同じ四ッ共寄せて結ぶ。

第四圖

第三圖

第二圖



1 小　衿

○先づ小衿竪衿共に表を中に表に分らぬ様合標を付てよく合せ端より縫ひ初める。此の縫方極めて細かく双方の標をよく合せ特に丸味の部分は2針3針毎に針を上げながら衿先きまで角立たぬ様縫ふ。

（特に注意）　此の所横布にて且つ丸味の部分なれば絲しごきをなす際布を伸さぬ様指先にて輕く縫目を送る様になし又絲のつれぬ様布の伸びぬ様細心の注意を拂ひつつ絲扱きをなし縫終りは返し針にて留める縫目を丸味の所は切込みを入れて兩割に開く。1圖參照。

○第2圖の如く小衿上の縫方終りなば小衿芯を入れる小衿上を縫合たる縫目に2mmのキセを見込み控へて芯布を當て小衿上の縫代に薄き糊をつけて芯布にはり表に返す。此の際特に注意は芯布の引けぬ様ややゆるく糊も決して表布にはつけぬ様する肝要なり。

○第3圖參照衿先き振キセ丸味の所も角立たぬ様整へて表に返し鏝にて落付かせ衿幅を揃へ裏布のふき出ぬ様躾をかける。

○竪衿裏より見たる第4圖參照。

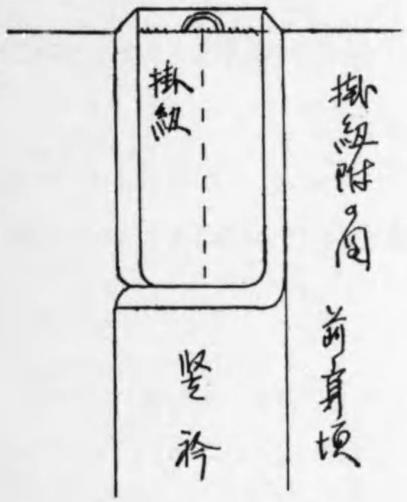
○次に竪衿小衿出來上りたらば小衿の天標を身頃表の脊縫目に當てまづ待針す衿肩廻りは小衿を稍ゆるめ加減にそれより下は小衿身頃も平等に竪衿先きと右半身は漸次下裾口へと待針し針目も細かく3,4cm毎に返針しつつ縫ふ。

○かくして左半身も縫ひ終りなば兩割にし衿肩の丸味のみ切り込みを入れて落付かす。次に裏身頃と裏竪衿を標を合せて普通細かく縫ひ此の折りは身頃に返し竪衿裾を裏を2mm縫込んて縫ひ3mm

キセをかけて裏に返し綴ぢつける。

○竪衿の縫目は前身頃の方より表竪衿の縫目開きたる一枚と裏竪衿身頃と縫合せたる縫目をよく合せ中綴をなす。

○脇の縫目に中綴ちをなす前身頃より引出して表布の縫込みと裏布の縫込と縫目をよく合せて中綴ぢす。



○小衿裏の縫代と表小衿縫附の縫目とを中綴し小衿幅を整へ小針に中綴ぢを入れる。

○表布斜切を2cm位の幅長7cm位を細かく絎け 此の如く形を鏝にて作り掛け紐を脊縫目を中心に身頃小衿の上にしつかり縫つける。

○裏身頃一方の竪衿先きより竪衿先きまで標の通り折りてまづ躾をかけ先きの小衿の中綴の上に當てまつり絎けをなす。

○内紐　小衿の裁ち殘り切より取る幅る1cm丈約20cm位の出來上りに作り竪衿丈の中央にて下前は竪衿の折り山に上前は脇縫の所前身に向けて縫附ける。

○仕上　裏より表に順序よく丁寧にアイロンをかけスナップは普通竪衿上の左右及び竪衿丈の中央に丈夫な絲2本にて綴ぢつく。

○飾紐　着用者の好みに依りて飾紐を附く。又つけぬこともあり

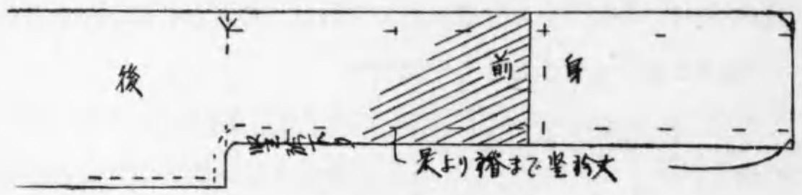
○角衿コート標入方及び縫方

1. 標入方　角衿コートの標入は丸衿コートと大差なれども異なる

點のみ記す。

1. 袖羽織の袖と同樣。

1. 前身頃竪衿下は左の標準による。



肩の繰越＋竪衿下＋小衿幅＝竪衿下り

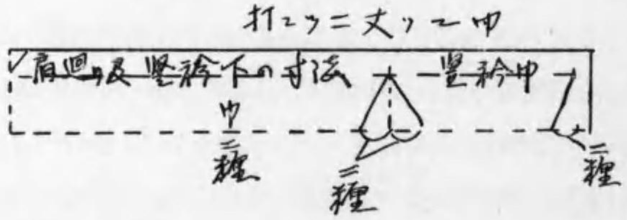
(.5)×2＋(6.)＋(.5)＝7.5cm鯨尺　2×2＋23＋2＝29cm

此の竪衿丈を同寸に標入す上の縫代1cmとり縫込みあらば全部裾の方になす。

○小衿丈は左の割出しに依る。

仕上衿肩明＋肩の繰こし×2＋(竪衿下小衿幅＋竪衿幅)×2＝小衿丈仕上り寸法　(7.2＋2×2＋23＋2＋15.3cm)×2＝51.5cm

第一圖



○角衿小衿標入　都合にて小衿丈竪衿先きまで續かぬ時は其の別切を接合せてもよろし。

小衿幅の方法を一邊としたる正方形の對角線を縫ふ。

縫方は細かく半返しにて縫目は兩方へ開く。

中に縫込釣れる故切り込みして平になす。

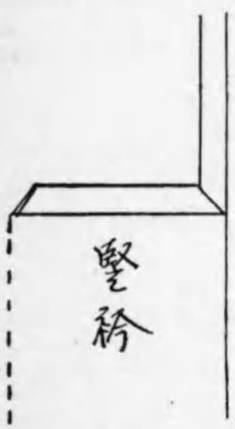
仕　立　方

○袖　丸衿コートと同樣。

○身頃　脊縫，胴接，脇縫までは丸衿コート同樣。

○竪衿附　何れも縫目細かく2,3cm毎に返し針して縫ひ兩割にすること丸衿と同樣。裏竪衿は縫目片返し身頃に返す。

○順次脊綴より脇綴，竪衿綴以上中綴を入る。



○身八ッ口縫　袖附，丸衿の時を參照。同樣裏の袖附は片返し身頃に返す。

○小衿附　小衿幅廣き時は程よく疊み込み衿芯をなす芯になす餘裕なく衿幅狹き時は別切にて芯を入れる。

○角衿標の如く衿の天標を身頃脊縫目に當て竪衿下りの縫目を竪衿上の終りに當て小衿の端を竪衿幅の山にそれぞれ待針して此の際衿肩廻り小衿の方3mmのゆるみを加へたる外は身頃小衿の釣合平等に竪衿上は布目正しく丸衿の時と同樣細心なる注意を以て下前小衿先より縫ひ初め上前小衿先きにて終る。

○次に縫目を割り小衿先きは圖の如く形を作り衿幅に折りて身頃の縫目に中綴をなす。

○次に裏身頃　標通り折り表小衿縫目に當てまつり絎になす上前より初めて下前にて終る此時掛紐をつける掛紐の仕方は丸衿と同樣

○仕上，飾紐　スナップの付方内紐等皆丸衿と同樣。

へチマ衿及び笹衿コート標入方仕立方

○へチマ衿，笹衿の仕立上寸法は大部分丸衿コートと同じなれば其の異なる點のみを記す。

○へチマ衿コート普通仕立上寸法

1. 袖丈身丈は丸衿と同じ。
1. 竪衿下り　10cm(2寸6分)内外
1. 小衿幅　9cm(2寸3分)乃至10cm(2寸6分)
1. 小衿丈　1m8cm(2尺八寸五分)乃至1.10m(2尺9寸)

(特に注意)　竪衿下りは着用者の體格好みに依りて異なる又用布の長短に依りても加減を要す。

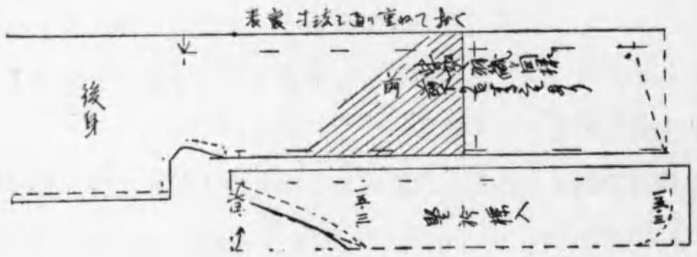
笹衿コート仕立上寸法

1. へチマ衿と同じ只異なるは小衿幅のみ。
1. 小衿幅　仕上2cm乃至2.3cmを普通とす。

◎へチマ衿コート標入

○袖は丸衿の時と同様。其他異なる點のみ記す。

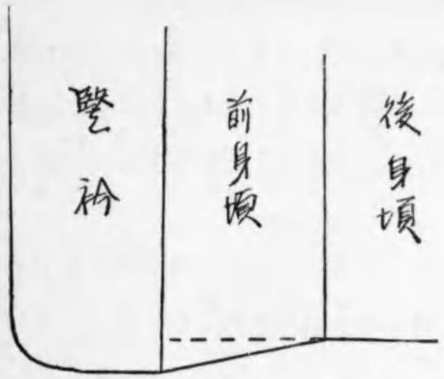
○身頃標入



○好みに依りこの如く羽織と同様前身頃に下りを附ることあり。

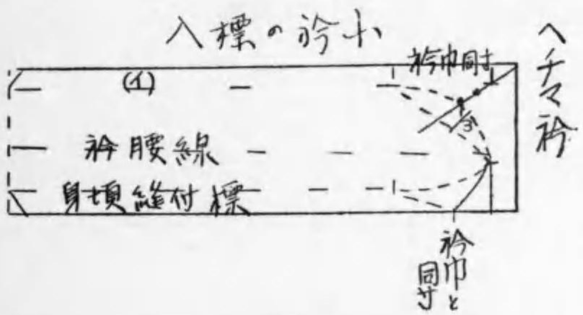
○下り寸法は大抵3cm内外とす。

仕　立　方



○袖角衿コートに同じ

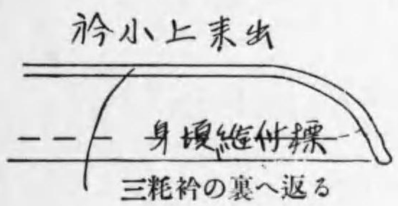
○身頃抜衣紋を多くする人又肥滿せる體格の人には肩の繰越し普通より1cm位多くし裾口には羽織と同様前下りを附す。前下の縫方は衿羽織と同様表の標はそのまま裏の標を 3 mm 縫込んで縫ひ折りは裏へ返し脇縫をなす。



前身竪衿先き竪衿下り短かきのみ他は角衿コートと同じ。

○小衿布幅　廣き時は芯布の必要なく廣き部分を中へ疊み芯代用すれど小衿幅一ばいの時は芯布を要す。

○芯を入れる時は芯表布共に標入す。



○小衿の縫方 表布の標を 3mm 外側を芯共に 裏は標を 3mm 内側(縫込)を合せて縫ふ丸味の部分表布芯布ともゆるむ譯なれど其まま針を打ち殊に小針目に縫ひ其の縫込みは3回縫ひて(袖丸と同様)丸味を落付ける表に返して躾す。

○小衿縫附　小衿布表の天標を身頃裏脊縫目に當て衿肩廻りは丸衿角衿と同樣。小衿にゆるみを持せて其他は身頃小衿とも平等に小衿先きやや丸味の所竪衿の終る所双方やや丸味ある所は先きに絹絲にて假縫をなし脊に掛紐をつけて上前より縫初め下前にて終る（縫方は丸衿と同じ）

衿先きを整へ縫目を開き肩丸味には切込みを入れ身頃縫目といふ衿裏の縫代を合せて中綴を入れる表身頃及び表竪衿を伏せてまつり絎す。

仕　上　丸衿角衿と同樣內紐スナップなども同樣。

◎千代田衿コート標入

○袖　身頃はヘチマ衿と同樣故省く。

○竪衿及び小衿標入

小衿先きと竪衿先きを重ねて

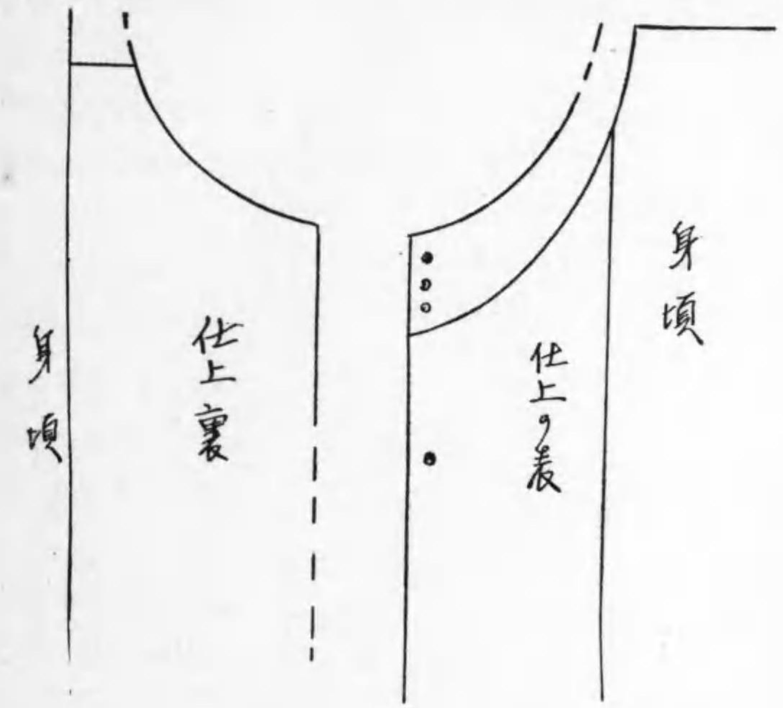
○先づ厚紙を以てすきずきの形を作り圖の如く小衿布，衿肩廻り竪衿下りまでの寸法と竪衿丈上の寸法を合せて標入し待針して整頓し先きの形厚紙を乘せて形を下に寫す。

此の際小衿端は小衿竪衿共に標を寫し小衿竪衿縫附る方は小衿と表竪衿のみに標を寫す。

◎仕　立　方

○袖　袷羽織と同樣。

○身頃　脊縫，胴接，脇縫，身八ッ口縫，袖附（裏表共）前下りあら



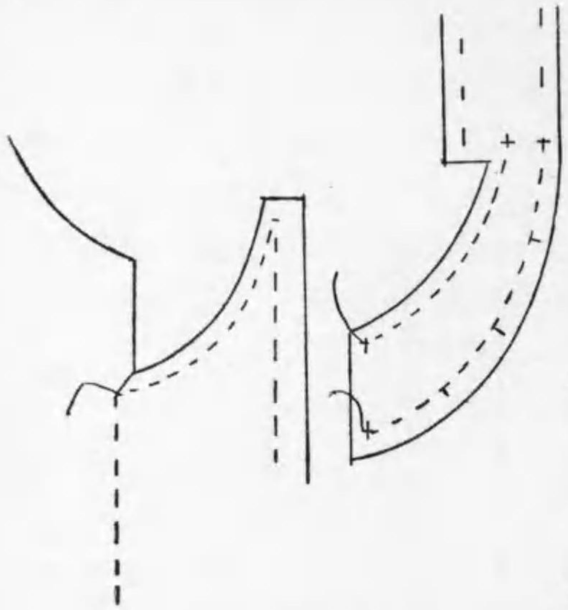
ば皆羽織と同樣につき省く。

○小衿竪衿縫附方

○小衿先き及び竪衿先双方共形丸く然も縫合せの時は反對の丸味を縫合せる故其の縫方に非常なる困難を感じ從つて苦心を要す。故にまづ下圖の如く縫ふべき標を絹絲を以て假縫をなす。

それより竪衿小衿の合標を合せ待針して縫ひ初む縫方は丸衿と同樣細心の注意を拂ひ斜布丸の反對を合縫ふ故かねての下假縫を目標に注意して縫ふ。縫ひ終らば縫目を開き形を整へ用意の芯布を稍ゆるく小衿先きの縫代に綴ぢ附けて表に返し絎す。

○次に小衿の天標を表身頃の脊縫目に當てかねて衿肩廻は丸衿角衿



と同様小衿に少しゆるみを持たせ其他身頃竪衿小衿共に平に待針し下前裾より縫初め上前にて縫終る縫方はすべて丸衿と同様

○次に表袖附裏袖附縫目は表は割り裏片方返し身頃に返す。

○次に裏竪衿縫附裾竪衿先きを裏の方2mm縫込んで縫ひ裏に返して縫目に綴ぢ附て上まで中の縫目に綴ぢを入れる。

○小衿裏を身頃の小衿縫附代に綴ぢ附けて掛紐をつけ身頃の縫標をつけてまつり絎けになす。

○飾りボタンの作り方

○入用の數だけ其の布の裁ち端より3cm直徑の圓形に切り中へかくしボタンを其の圓形の端を小針 に縫ひ引き締めて作る。位置を定めて丈夫な絲にて絎附く。

第三節　本裁女物單半コート(丸衿)

裁切寸法

1. 袖丈　62cm(1尺6寸2分)仕上寸法に4cmを加ふ。

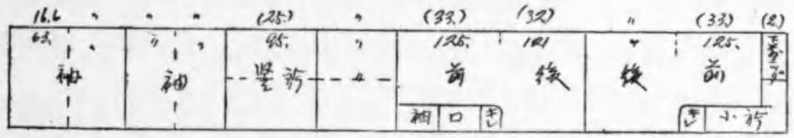
1. 身丈　122cm(3尺2寸)仕立寸法に17cm乃至20cm(4寸5分乃至5寸2分)を加ふ。
1. 前後の差　15cm(4寸)前丈より袖口切及び小衿丈を取らるる樣。
1. 小衿丈　78cm乃至80cm(2尺6分乃至2尺1寸)
1. 竪衿丈　95cm(2尺5寸)仕上身丈より7cm乃至10cm短かく。

單衣長コート裁切寸法　丸衿

1. 袖丈　單衣半コートに同じ。
1. 身丈　着物着丈より20cm長く。
1. 小衿丈　單衣半コートに同じ。
1. 竪衿丈　仕上身丈より10cm短かく。

(注意)コートを裁つに當り最も注意すべきは小衿なり小衿を鍵に裁ち落す所は必ず上前になすこと心掛くべし。

並幅940cm(2丈4尺8寸)の布を以て單衣半コートの裁方(丸衿)

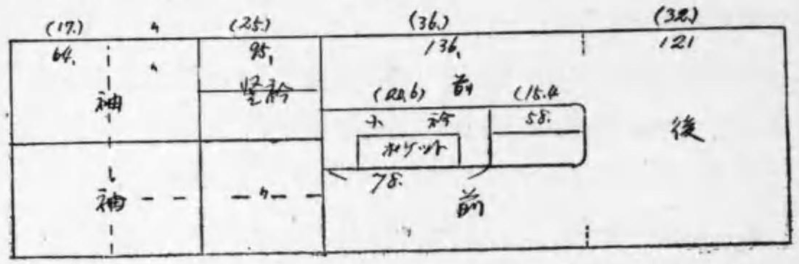


{用布−(袖丈×4+竪衿丈×2+小衿丈+前後の差×2)}÷4=後身丈　　{94cm−(63×4+95×2+7+4cm×2)}÷4=121cm

袖丈×4+竪衿丈×2+後身丈×4+前後の差×2+小衿丈=總用布

並幅150cm(4尺)の布を以て肩當の裁方

大幅物480cm(1丈2尺7寸)の布を以て單衣半コート裁方



{用布－(袖丈×2＋竪衿丈＋前後の差)}÷2＝後身丈

{127cm－(17×2＋25＋4cm)}÷2＝32cm　(算式鯨尺)

袖口切＋小衿丈－後身丈＝前後の差　　15＋21－32cm＝4cm

單半コート標入方及び縫方

標　入　方

袖　女物單衣羽織と同樣なれば省く。

身頃は袷コートと同樣又單羽織と同樣。脊縫を終り肩の繰越を定めて第1圖の樣におき。まづ身丈は仕上寸法に1cm加へて標入其の餘を三ッ折りとなす。

○後幅は羽織の後より2cm(5分)控へ裾にて羽織の後幅と同寸にして絲を引くか又は定木にて斜に標入す。

○肩幅は裄の都合を見て後幅より廣くも又眞直にもなし標入す。

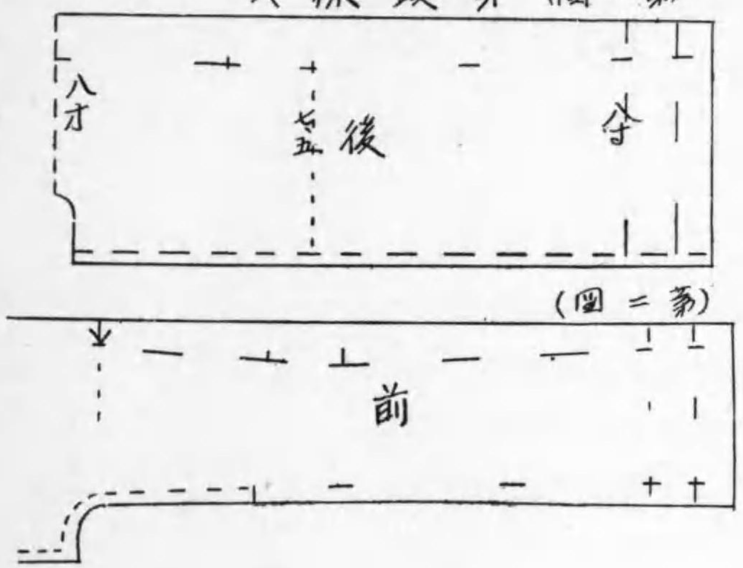
○第2圖の如く後の標を前布に通し前幅竪衿附竪衿下り等すべて衿半コートと同樣。前身頃好みに依りて前下りをつける時は單衣羽織の前下りと同樣になす。

○この外竪衿　小衿の標入は衿半コートと同樣。

同　仕　立　方

○袖　單衣羽織と同樣。

入標　塡身　(圖一第)



(圖二第)

○衿　袷半コートと同樣。

○身頃　脊縫は袷コートと同樣小針に縫ひて兩方へ開く其の端を又細く折りて小針に表布に絎け付ける。但し裾口の三ッ折り所と肩當布の有る所は其の要なし。

○肩當の附方は男物單衣羽織と同樣。

○脇布も細かく縫ひて兩割りとす。

○小衿　竪衿附袷コートと同樣。竪衿の裏は幅一ぱいに折りて細かく表布に絎け附く。

○袖付　小衿肩當縫合せ小衿表裏綴合せ等は袷コートと同樣。

○仕上　袷コートと異ることなし。

(注意)衿幅は時代の流行もあれど初め少しく廣く仕立おき順次其の折山を替へ得らるる樣になすを可とす。

第十三章　女　　袴

第一節　裁方及び積り方

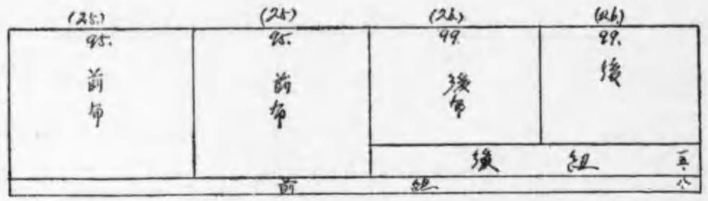
裁切寸法

丈　　仕立上寸法に10cmを加ふ。

前紐　幅10cm内外長さ3米(8尺)以上

後紐　幅15cm(4寸)長さ1.90m(5尺)内外

大幅の布を以て390cm(1丈2寸)

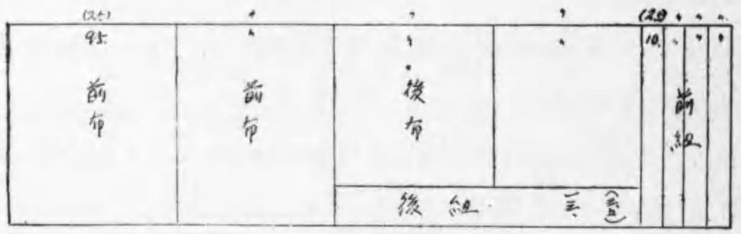


(用布＋前後の差×2)÷4＝後布丈　(390cm＋4×2)÷4＝99cm

99cm－4＝95cm前布丈

後布丈×4－前後の差×2＝用布　99×4－4cm×2＝390cm

大幅420(1丈1尺)を以て本裁女袴



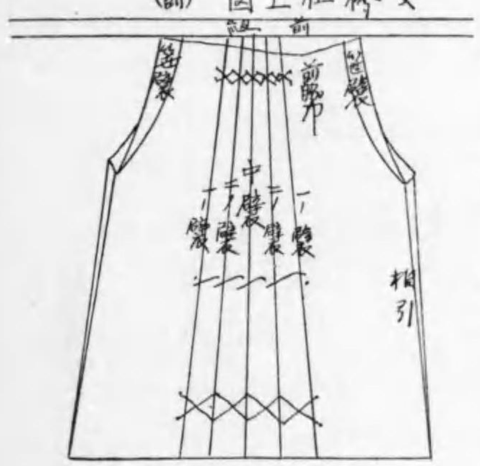
後布丈×4＋前紐幅×4＝420用布

95×4＋10cm×4＝420cm用布

大幅500cm(1丈3尺)の布を以て本裁女袴の裁方積方

女　　袴（三ッ稜）

(前)　図上仕袴女



仕立上各部寸法割出方

○紐下　衣服の着丈にコンマの7を乗じたるもの。

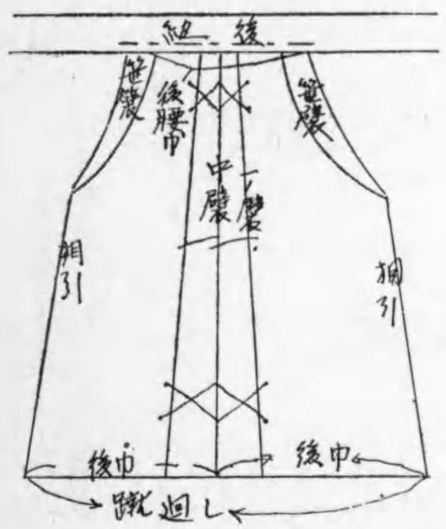
○相引の高紐下の $\frac{2}{8}$ に2cm乃至4cmを加へたるもの

○後幅衣服の後幅と同様。

○後脇布幅後幅の $\frac{3}{8}$

○後寄せ襞幅後幅の $\frac{1}{8}$ 上は $\frac{1}{8}$。

(後)　上仕



○後腰幅後幅と同寸

○懐襞幅 後幅の $\frac{2}{8}$ より1.5cm(4分)減じたるもの。

○前寄襞幅下は後幅の $\frac{1}{8}$ 上は後幅の $\frac{1}{10}$

○前腰幅は後腰幅と同寸。

○後笹襞幅は後脇布幅の $\frac{1}{4}$

○前笹襞幅は前脇布幅の $\frac{1}{4}$

○後紐幅　後布の $\frac{1}{8}$ 内外。

○前紐幅　後幅の $\frac{1}{10}$ 内外。